

北洋大学紀要

第3号

(第1部) 教育研究論文

モンゴル語の帯気性対立の他言語話者による知覚
— 日本語・中国語・韓国語母語話者を対象とした知覚実験 — ◀ 植田尚樹 ▶ 5

地域日本語ボランティア育成と諸条件
— 北洋大学で求めるボランティア像に関して — ◀ 奥村訓代 ▶ 21

身体化された文化資本についての一考察
— 眼鏡産業振興の視点から — ◀ 瀧波慶信 ▶ 31

中国語非母語話者による中国語の方言のイメージ
— 中国語学習歴のある日本語母語話者を対象とした聴取調査から — ◀ 陳曦 ▶ 47

日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語について ◀ 馮一峰 ▶ 63

現代日本社会における敬語の誤用に対する考察
— 1990年代の敬語に関する実用書の例を通して — ◀ 福本達也 ▶ 77

一般中高年ランナーの貧血における一考察
◀ 山中慎・小林愛子・杉山喜一 ▶ 93

実践報告・研究ノート・レビュー論文

中上級日本語学習者を対象とした授業報告
— 内容説明の作文タスクを中心に — ◀ 藤田航輝 ▶ 109

東洋思想再考
— 風水とは何か — ◀ 山田利一・岡迫晃 ▶ 125

Approaches to Mindfulness in Science
— A Historical Perspective Review for Mindfulness Understanding — ◀ LI Sheng ▶ 137

(第2部) 北洋大学のこの一年 155

紀要第3号発刊に際して

北洋大学に校名変更し、はや3年になろうとしています。

その間に、台湾高雄国立大学、インドネシア国立ブラビジャヤ大学、モンゴル国立科学技術大学等アジアを中心に11大学と新規に大学間交流協定を提携し、北洋大学卒業と同時に上記国立大学をはじめとする海外の諸大学も卒業できるダブルディグリー取得システムを構築するなどして、新大学においては「世界に羽ばたく北洋大生」をスローガンに教育改革を行っております。しかしご承知の通り、その2年間はコロナにより、全く学生交流実績が出せなかったのが実情です。やっと令和5年4月から、コロナも収束方向に向かいキャンパスにも東西の言語が飛び交う賑わいが戻りつつあります。

大学では、日常的に食堂と図書館を一般利用対象区域として広く地域住民の皆さまに開放しています。食堂では、2種類の500円定食やそれよりも安いラーメン、丼などに人気があり、150円で飲み放題の焙煎珈琲は超人気です。

一方、図書館には、幼児コーナーや漫画コーナーも設けており、定期的に「留学生による読み聞かせ」、「図書館講座」、「各種イベント展示」も定着しています。また最近、隣の北星公園に遊びに来たご父兄にも、暑い日中やにわか雨時の避難所としても利用価値の高い場所として認知されてきています。

大学全体としては、教職員が一丸となり、教務・事務両面で学生の支援を行うのみならず、環境と教育の質向上と維持を目指し日々自己研鑽を行っています。

本日は、その一環としてここに紀要第3号として教育研究論文7本、実践報告・研究ノート・レビュー論文として3本を掲載し、世に問う運びとなりました。是非、多くの関係各位にご覧いただき、叱咤激励頂ければと願っています。

尚、北洋大学では、「日本比較文化学会北海道支部」を設立し、多文化共生社会における諸問題解決に向けたSDGsな研究を進めています。ご興味のある方は、併せて日本比較文化学会のHPなどご覧いただければ幸いです。

令和6年3月吉日
図書館長 奥村 訓代

第 1 部：教育研究論文

モンゴル語の帯気性対立の他言語話者による知覚

— 日本語・中国語・韓国語母語話者を対象とした知覚実験 —

植田 尚樹
北洋大学

Perception of the Mongolian Aspiration Contrast by Speakers of Other Languages

— A Perceptual Experiment with Native Japanese, Chinese, and Korean Speakers —

UETA Naoki
Hokuyo University

Abstract

Many languages have a laryngeal contrast in obstruents. Japanese has a voicing contrast between voiceless and voiced, whereas Chinese, Korean, and Mongolian have a phonemic contrast between aspirated and unaspirated obstruents. However, the phonetic realization of laryngeal contrasts is not straightforward; voiced consonants in Japanese are frequently realized as voiceless unaspirated ones, and the voice onset time of aspirated consonants in Chinese tends to be longer than that in Mongolian.

This study addresses the perception of aspiration contrast in Mongolian through a perceptual experiment involving native Japanese, Chinese, and Korean speakers. It was found that native Japanese speakers can more accurately distinguish Mongolian /t^h/ and /t/ than can native Chinese and Korean speakers, although the differences are small. This result suggests that the difference between /t^h/ and /t/ in Mongolian is closer to that between Japanese /t/ and /d/, even though the distinctive features are different, than that between /t^h/ and /t/ in Chinese and Korean.

1. はじめに

多くの言語は阻害音に喉頭素性による対立を持つ。日本語は阻害音に有声性の対立があり (Labrune 2012 など)、例えば無声音 (清音) の /t/ と有声音 (濁音) の /d/ は音韻的に対立する (1a)。中国語は破裂音と破擦音に帯気性の対立を持ち (Lin 2007 など)、例えば有気音の /tʰ/ と無気音の /t/ が音韻的に対立する (1b)。モンゴル語¹でも、破裂音と破擦音は基本的に帯気性の対立を持ち (Svantesson et al. 2005、植田 2020 など)、例えば有気音の /tʰ/ と無気音の /t/ が音韻的に対立する (1c)。

- (1) a. 日本語 : /to/《戸》 vs. /do/《度》
- b. 中国語 : /tʰoŋ/《通》 vs. /toŋ/《東》
- c. モンゴル語 : /tʰaŋ/《平野》 vs. /taŋ/《肩甲骨》

調音音声学的には、有声子音は子音区間に声帯振動を有する音、無声子音は子音区間に声帯振動を有しない音と定義され、また有気音は子音の閉鎖・狭めの開放の直後に帯気を伴う音、無気音は帯気を伴わない音と定義される。そして、これらの音声カテゴリーは音節初頭位置において、VOT (Voice Onset Time) で十分に区別されることが知られている。VOT は調音器官の閉鎖・狭めの開放から声帯振動の開始までの時間であり、有声音ではマイナスの値、無声音ではプラスの値を取り、また無気音ではゼロに近い値、有気音ではプラスの大きな値を取る (Lisker and Abramson 1964, Abramson 1977, Ladefoged and Johnson 2011: 151–156、斎藤 2006: 67–69 など)

しかし、これらの音声的な基準が必ずしも音韻的な弁別素性と一致するとは限らない。喉頭素性に関する音韻的な弁別素性と音声的な実現との関係は複雑である場合がある。例えば日本語では、音韻的に有声性の対立があると広く認められているものの、音声学的には必ずしも有声音と無声音の違いとして実現するとは限らず、ともに無声無気音で現れる場合がある (詳しくは 2.1 節で述べる)。また、同じ音韻カテゴリーに含まれる音素であっても、音声的な実現は言語によって異なる。例えば、同じ有気音 /tʰ/ であっても、VOT の長さは言語によって異なることが知られている。知覚の面においても、各言語の話者がどのような音声をもどのような音韻カテゴリーとして知覚するかについては不明な点が多い。例えば、日本語母語話者は無声無気音 (VOT がほぼゼロである音声) を清音と濁音のどちらとして知覚するか、といった点は必ずしも明らかでない。

さらに、言語接触状況における喉頭素性の知覚となると、さらに状況は複雑になる。モンゴル語は帯気性の対立を持つとされるが、中国語よりも有気音の VOT が短い傾向にあることが指摘されており (植田 2018)、音声的な特徴は中国語よりもむしろ日本語に近い可能性がある。このような状況で、モンゴル語の帯気性の対立が、音韻的に帯気性の対立を持つとされる中国語の話者と、音韻的に有声性の対立を持つとされる日本語の話者によって、それぞれどのように知覚されるかは明らかでない。

本稿では、モンゴル語の帯気性の対立を題材に、これらを他言語の母語話者がどのように知覚するか、その知覚のパターンが母語によって異なるか否かを検証する。具体的には、日本語および中国語の母語話者を中心に、韓国語の母語話者も加えた3言語の話者がモンゴル語の語頭破裂音/ t^h / - / t / および語頭破擦音/ $tʃ^h$ / - / $tʃ$ / の対立をどのように知覚するか、知覚実験を通して検討する。

2. 東アジア諸言語の喉頭素性の対立

2.1 日本語の有声性の対立

日本語は阻害音にいわゆる清音と濁音の対立があり、音韻的には無声音と有声音の対立であるとされる。音声的には、基本的に清音は声帯振動を伴わない無声音であるのに対し、濁音は声帯振動を伴う有声音であるとされる(斎藤 2006: 86-92)。

ただし、日本語の濁音にはいくつかの音声的バリエーションがあることが知られている。朱(2010)や高田(2011)によると、日本語の濁音には2つの音声カテゴリーが認められる。1つは、閉鎖の開放より前に声帯振動が始まることにより、閉鎖区間中に声帯振動を伴う(言い換えると VOT がマイナスである)音声であり、「完全有声音」とみなされるものである。もう1つは、閉鎖の開放に対して声帯振動の開始がほぼ同時かわずかに遅れる(言い換えると VOT がほぼ0またはプラスの小さな値をとる)音声であり、「半有声音」と言われるものである。この場合、閉鎖区間に声帯振動がないため、調音音声学的には有声音ではなく無声無気音であることになる。他方、日本語の清音は、VOT がプラスの小さな値(大まかに言って、/p/ や /t/ では 10~30 ms 程度、/k/ では 40 ms 程度の値²)を取ることが多い。つまり、日本語の清音は典型的には無声無気音で現れる。ただし、VOT には地域差や世代差があり、濁音では VOT が正の値に、清音では VOT が大きな値になりつつあることが指摘されている(高田 2011)。

2.2 中国語の帯気性の対立

中国語は、典型的な帯気性の対立を持つとされる。中国語の VOT の値は呉(主編)(1986)、Rochet and Fei (1991)、Shimizu (1996)、Chao and Chen (2008)、朱(2010)など多くの研究で報告されており、いずれの研究でも有気音が長い VOT (およそ 60~100 ms 程度)、無気音が短いプラスの VOT (およそ 3~15 ms 程度)を持つことが明らかにされている。

2.3 モンゴル語の帯気性の対立

モンゴル語の閉鎖音と破擦音には「張り子音」と「緩み子音」の対立がある。語頭において、張り子音は無声有気音 [p^h , t^h , k^h , $tʃ^h$, $ʃ^h$]、緩み子音は無声無気音 [p , t , k , $tʃ$, $ʃ$] として実現し、これらは VOT の長短によって明確に区別される(Ueta 2018)。音韻的にも、少なくとも歯茎音系列については有気音/ t^h , $tʃ^h$, $ʃ^h$ / と無気音/ t , $tʃ$, $ʃ$ / の対立であると言える³。VOT の値に関しては Svantesson and Karlsson (2012) および Ueta (2018) が調査しており、語頭

での VOT の平均値が無気音 /t/ では 10~20 ms 程度、有気音 /t^h/ では 50~60 ms 程度であることが報告されている。

2.4 韓国語の三項対立

韓国語は破裂音・破擦音に 3 項対立、すなわち平音、激音、濃音の対立を持つ。これらは、語頭において全て無声音で現れ、音韻的には帯気 (aspiration) と緊張 (tensity) の有無によって対立し、激音は有気硬音 /C^h/ (aspirate fortis)、平音は無気軟音 /C/ (non-aspirate lenis)、濃音は無気硬音 /C/ (non-aspirate fortis) と解釈される (邊 2016)。

音声的には、伝統的には激音が強い有気音 (strongly aspirated)、平音が弱い有気音 (slightly aspirated)、濃音が無気音 (unaspirated) と扱われてきたが、近年の研究によると、平音の VOT が長くなるという変化が起こり、激音と平音がともに長い VOT を持つ無声有気音になっていることが指摘されている (Silva 2006、邊 2016 など)。邊 (2016) には、激音、平音、濃音の VOT としてそれぞれ 79~89 ms、60~71 ms、13~18 ms というデータが示されている。なお、激音と平音は VOT が非常に近いが、後続母音の基本周波数 (Fo) によって対立が保たれているという (Lee et al. 2013)。

2.5 言語間の音声特徴の差異

2.1 節から 2.4 節で見たように、日本語は有聲性の対立を持つのにに対し、中国語、モンゴル語、韓国語は帯気性の対立を持つ。しかし、日本語も音声的には (少なくとも VOT の値に関しては) 有声音と無声音の違いではなく、無声無気音と無声有気音の違いとして現れる場合がある。

一方、中国語、モンゴル語、韓国語は帯気性による対立を持つが、音声の特徴は必ずしも同じではない。植田 (2018) は中国語とモンゴル語の VOT の値を比較し、有気音の VOT の値に差があることを明らかにした。具体的には、有気音の VOT の平均値は中国語で 79~85 ms、モンゴル語で 49~61 ms であり、両者には 20~30 ms 程度の差がある (図 1)。

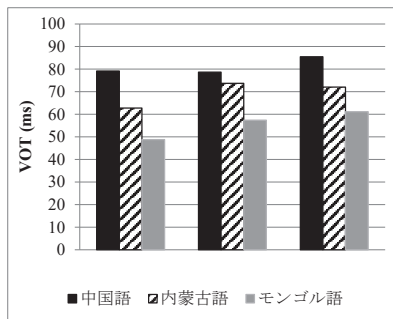


図 1 : 有気音の VOT の平均値 (植田 2018: 175、図 2)⁴

Cho and Ladefoged (1999) は無声音を4つの音声カテゴリーに分類しており、VOTが30 ms程度のもを無気音 (unaspirated)、50 ms程度のもを弱い有気音 (slightly aspirated)、90 ms程度のもを有気音 (aspirated)、120 ms程度かそれ以上のものを強い有気音 (highly aspirated) としている。中国語とモンゴル語のVOTをこの基準に当てはめれば、中国語は有気音 (aspirated)、モンゴル語は弱い有気音 (slightly aspirated) に入ると考えられ、両者は異なるカテゴリーに入る。つまり、同じ帯気性の対立を持つとしても、言語によって音声的特徴が異なることが十分にあり得る。

2.6 音声特徴の知覚

各言語において、喉頭素性の対立の知覚についての研究は少なからず行われている（日本語および中国語については朱 2010、モンゴル語については Ueta 2021、韓国語については韓 2016 など）。

しかし、モンゴル語の帯気性を他言語の話者がどのように知覚するかという問題は、これまでにあまり取り上げられていない。前述のように、モンゴル語は音韻的に帯気性の対立を持っており、この点で中国語や韓国語と類似している。一方、有気音のVOTはそれほど長くなく、有気音と無気音のVOTの値は比較的近い。この音声的特徴は中国語や韓国語よりも、むしろ日本語の一変種、すなわち濁音が完全有声音ではなく半有声音（短いプラスのVOTを持つ音声）で現れる変種の特徴に近い。これらの事実から、モンゴル語の帯気性の対立の知覚について、以下の2つの仮説が考えられる。

- (2) a. モンゴル語は帯気性の対立を持つので、同じく帯気性の対立を持つ中国語や韓国語の母語話者の方が、有声性の対立を持つ日本語の母語話者よりも、モンゴル語の有気音／無気音の区別を容易に知覚できる。
- b. モンゴル語の有気音と無気音のVOTの差が小さいので、両者のVOTの差が大きい中国語や韓国語の母語話者よりも、両者のVOTの差が小さい変種を持つ日本語の母語話者の方が、モンゴル語の有気音／無気音の区別を容易に知覚できる。

3. 知覚実験

3.1 知覚実験の目的と概要

モンゴル語の帯気性の対立が他の言語の母語話者にどのように知覚されるかを明らかにするために、知覚実験を行った。本研究では対象を絞り、モンゴル語の語頭破裂音 /t^h/-/t/ および語頭破擦音 /t^h/-/ts/ の対立が、日本語、中国語、韓国語母語話者に弁別され得るのか、聴取者の母語によって弁別に差があるのかを検討する。なお、以下では便宜上、モンゴル語の有気音系列 /t^h, t^h, t^h/ を *t*, *ts*, *ʃ*、無気音系列 /t, ts, tʃ/ を *d*, *d*, *d* の記号を用いて表す。

3.2 刺激音の作成

まずは、モンゴル語母語話者による発話を材料に、刺激音を作成した。語頭が有気音 *t, ts* であるか無気音 *d, dz* であるかでミニマルペアをなす4つのペア（表1に示す計8語）を調査語彙とし、1つずつキャリア文(3)に入れて読み上げてもらい、録音した⁵。

表1 刺激音に用いたミニマルペア

語頭有気音	語頭無気音
<i>taxix</i> “供える”	<i>daxix</i> “繰り返す”
<i>tesʎegɣf</i> “火薬”	<i>desʎegɣf</i> “中尉”
<i>tɔsʎax</i> “手伝う”	<i>dɔsʎax</i> “滴る”
<i>tsɔxix</i> “打つ”	<i>dzɔxix</i> “適する”

(3) gedeg n¹ juu wee? “..... というのは何ですか?”

全ての調査語彙の読み上げが一通り終わった後に、順序を変えてもう一度読み上げを行い、1つの調査語彙につき2つ（1回目と2回目）の音声を得た⁶。以下では、1回目と2回目の発話から得られた調査語彙を、それぞれ「調査語彙₍₁₎」「調査語彙₍₂₎」（具体的には *taxix*₍₁₎、*taxix*₍₂₎ など）のように示すこととする。なお、*taxix*₍₁₎ と *taxix*₍₂₎ は、母語話者は同じ語（*taxix* “供える”）として発音したものではあるが、別の発話であるため、音声的に全く同じものではない。

音声提供者は表2に示すモンゴル語母語話者4名である。録音はデジタルレコーダー（ZOOM H4nPro）およびヘッドセットマイク（AKG C520）を用いて行われた。

表2 音声提供者

名前	年齢	性別	出身地
OB	18	男	ウランバートル
TN	18	男	ウランバートル
ER	20	女	ウランバートル
BB	19	女	ムルン (ウランバートルから北西へ約 530 km)

刺激音を作成するために、音響分析ソフト Praat (Boersma and Weenink 2021) を用い、録音された調査語彙を全て切り出した。次に、同じ音声提供者の1回目の発話と2回目の発話から、同じ語として発話された音声（例えば *taxix*₍₁₎ と *taxix*₍₂₎）、およびミニマルペアとして発話された音声（例えば *taxix*₍₁₎ と *daxix*₍₂₎）を、1秒の空白を挟んで繋ぎ合わせた。なお、1回目の発話から得られた音声が必要先行するようにし、逆順の音声は作成しなかつ

た。1人の音声提供者の音声から作られた刺激音は表3の通りとなる。これらの刺激音を、4名の音声提供者の音声からそれぞれ作成した。つまり、刺激音は合計64個作られたことになる。

表3 刺激音一覧

ともに有気音	有気音と無気音	無気音と有気音	ともに無気音
<i>taxix</i> ₍₁₎ - <i>taxix</i> ₍₂₎	<i>taxix</i> ₍₁₎ - <i>daxix</i> ₍₂₎	<i>daxix</i> ₍₁₎ - <i>taxix</i> ₍₂₎	<i>daxix</i> ₍₁₎ - <i>daxix</i> ₍₂₎
<i>tesʃegɣf</i> ₍₁₎ - <i>tesʃegɣf</i> ₍₂₎	<i>tesʃegɣf</i> ₍₁₎ - <i>desʃegɣf</i> ₍₂₎	<i>desʃegɣf</i> ₍₁₎ - <i>tesʃegɣf</i> ₍₂₎	<i>desʃegɣf</i> ₍₁₎ - <i>desʃegɣf</i> ₍₂₎
<i>tosʒax</i> ₍₁₎ - <i>tosʒax</i> ₍₂₎	<i>tosʒax</i> ₍₁₎ - <i>dosʒax</i> ₍₂₎	<i>dosʒax</i> ₍₁₎ - <i>tosʒax</i> ₍₂₎	<i>dosʒax</i> ₍₁₎ - <i>dosʒax</i> ₍₂₎
<i>ʁoxix</i> ₍₁₎ - <i>ʁoxix</i> ₍₂₎	<i>ʁoxix</i> ₍₁₎ - <i>ɖoxix</i> ₍₂₎	<i>ɖoxix</i> ₍₁₎ - <i>ʁoxix</i> ₍₂₎	<i>ɖoxix</i> ₍₁₎ - <i>ɖoxix</i> ₍₂₎

3.3 知覚実験の手順

知覚実験は、Google Form を用いてオンラインで行われた。実験は3つのセクションに分けられる。

最初のセクションでは、調査協力者に年齢や母語、成育地、外国語学習歴を記入することを求めた。なお、これらの個人情報調査のみに使用することを明記している。

続くセクション2とセクション3では、実際に刺激音を聞き判定することを求めた。これらのセクションでは、URL および再生ボタンをクリックすることで、音声ファイルが開き、3.2節に示した64の刺激音のいずれかが流れる。実験参加者には刺激音（語の連鎖）を1つずつ聞いてもらい、2つの音声と同じ単語であるか、違う単語であるかを強制選択で判定（いずれかをクリック）してもらった。なお、刺激音は2秒の空白を挟んで2度流れるようにした。実験に際し、イヤホンもしくはヘッドホンを使って音声を聞くこと、特に最初の音に注目すること、試験ではないので感じた通りに答えること、いつでも休憩を取って良いことをあらかじめ指示した。

なお、本調査の目的は、初頭に現れる有気音と無気音がモンゴル語非母語話者によって弁別されるか否かを明らかにすることであるが、本調査の刺激音では、たとえ「有気音－有気音（例えば *taxix*₍₁₎ - *taxix*₍₂₎）」や「無気音－無気音（例えば *daxix*₍₁₎ - *daxix*₍₂₎）」の刺激音であったとしても、1つ目と2つ目の音声は別の音声であることから、初頭子音以外に顕著な音声的な違いが生じる可能性が否定できない。本調査では「特に最初の音に注目すること」という指示を加えたが、初頭子音以外の部分の音声的差異に反応して「異なる語である」と判断する可能性は残る。しかし、仮に「最初の音が同じか違うか」を問うた場合、言語音の調査ではなく音声自体の弁別能力を問う調査になるリスクがあると判断し、「特に最初の音に注目して、語が同じであるかどうかを判定する」という方法を採用した。

セクション2では(1)～(35)の35問が用意され、最初の3問は練習のためのダミーの刺激音である。また、セクション2が終わったタイミングで休憩を取ることを促し、セク

ション3に進むようにした。セクション3では(36)~(70)の35問が用意され、最初の3問はダミーの刺激音とした。なお、セクション2およびセクション3において、刺激音は類似の刺激音が連続しないという条件で、ランダムに配列された。例えば、*taxix* もしくは *daxix* が用いられた刺激音の直後には、これらの語が用いられた刺激音は現れないように調整した。

3.4 実験参加者

実験参加者は、日本語母語話者5名、中国語母語話者5名、韓国語母語話者1名の計11名である。日本語、中国語ともに、様々な方言の話者が混在しているが、方言差については今後の課題とすることとし、本稿では調査協力者間の方言差については考えないこととする。また、韓国語母語話者は1名のため、参考とする。

なお、実験参加者のうち中国語母語話者と韓国語母語話者は全員日本語学習者でもあり、また日本語母語話者のうち3名は中国語学習者でもある。知覚には学習言語の影響が見られる可能性があるが、実験参加者の学習言語を統制することは難しいため、この点については考えないこととする。また、実験参加者の中にはモンゴル語の学習歴がある人もいる。しかし、モンゴル語学習は週に1回、半年程度であり、音声に関する十分な教育を受けたわけでもないため、モンゴル語学習歴が知覚に顕著な影響を与えるとは考えにくい⁷。そのため、本研究ではモンゴル語学習歴のある参加者を区別することはしない。

3.5 刺激音自体の音声特徴

前述のように、刺激音の音声自体は1つ1つ異なる。そのため、刺激音の原音声自体の差異が知覚に大きな影響を与えることも予想される。そこで、本節では刺激音自体の音声特徴、具体的にはVOTについて記述し、分析の前提とする。なお、喉頭素性の対立の知覚には、VOTだけでなく後続母音における基本周波数(F₀)や第1フォルマント(F₁)など、様々な音響的指標が関わっていることが指摘されている(Haggard et al. 1970, Klatt 1975, Kent and Read 1992, 高田 2011 など)。しかし本稿では議論を単純化するため、VOTのみに焦点を当てて分析を進めることとし、他の音響的キューの役割の検討については今後の課題とする。

図2は、刺激音として使われた音声の語頭の *t, d* および *ʌ, ɛ* の VOT の平均値を、音声提供者ごとに示したものである。

図2より、刺激音の *t/d* および *ʌ/ɛ* の違いは概ね VOT の長短で区別されるが、音声提供者によっては VOT の差が小さいことがわかる。特に、音声提供者 TN と BB では、有気音 *t, ʌ* の VOT が短いことにより、有気音と無気音の VOT の差が小さくなっている。

次に、1つ1つの刺激音における VOT の差について述べる。今回の調査では VOT の値について統制していないため、刺激音ごとに VOT が異なり、また1つの刺激音におけるペア音声の VOT の差もまちまちである。図3は、各刺激音のペア音声における VOT の差

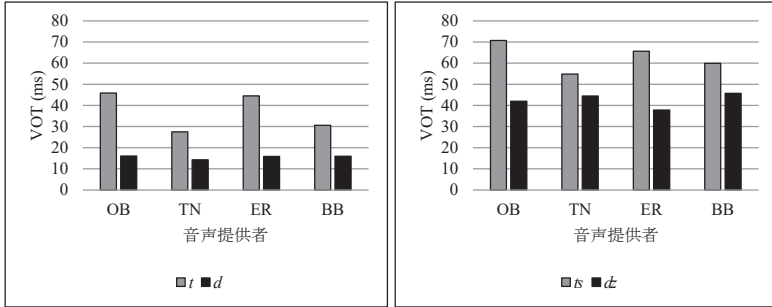


図2：刺激音として使われた音声の VOT の平均値 (左：破裂音、右：破擦音)

をヒストグラムにしたものであり、左は同一の音韻カテゴリーのペア、つまり「有気音₍₁₎-有気音₍₂₎」または「無気音₍₁₎-無気音₍₂₎」の刺激音、右は異なる音韻カテゴリーのペア、つまり「有気音₍₁₎-無気音₍₂₎」または「無気音₍₁₎-有気音₍₂₎」の刺激音の場合である。

当然のことながら、同一音韻カテゴリーのペアでは VOT の差が小さいものも多く、異なる音韻カテゴリーのペアでは VOT の差が大きいものが多い。しかしながら、異なる音韻カテゴリーのペアでも、VOT の差が 20 ms 以下、つまり VOT の差が同一音韻カテゴリーのペアと変わらないような例も多く見られた。これらの刺激音では、本来は異なる音韻カテゴリーのペアとして発音されているが、知覚の際は同一の音として知覚されやすいことが予想される。分析の際は、このような VOT の差にも注目する。

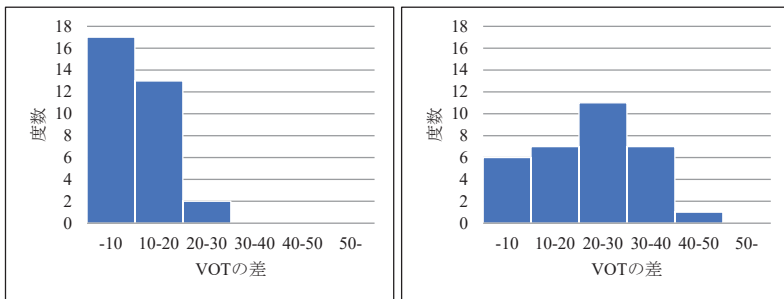


図3：各刺激音ペア音声における VOT の差 (左：同一音韻カテゴリー、右：異なる音韻カテゴリー)

4. 結果

4.1 全体の傾向

まずは全ての刺激音に対する知覚について、全体的な傾向を示す。以下では、音声提供

者が同じ語として発音したペアを「同じ語である」と判定した場合、および音声提供者が異なる語として発音したペアを「違う語である」と判定した場合をあわせて、母語話者の弁別の意図通りに知覚したという意味で「正答」と呼ぶ。図4は、各言語の母語話者の、各刺激音に対する平均正答率を示している。

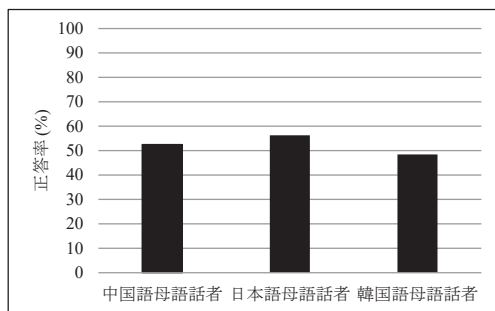


図4：各言語母語話者の音韻知覚の正答率（全体）

図4より、各言語話者とも、正答率は50%程度であることが読み取れる。具体的には、中国語母語話者は52.5%、日本語母語話者は56.3%、韓国語母語話者は48.4%の正答率であった。今回の知覚実験は二択強制選択であり、チャンスレベルは50%であることから、各言語話者ともモンゴル語母語話者の意図通りに帯気性を弁別できたとは言いがたくなる。実験参加者の母語による違いも、全体的な傾向を見る限りはそれほどないように思われる。

4.2 各言語話者の知覚

次に、各言語話者がどのような音声をもどのように知覚（判定）したかをもう少し詳しく見ていく。図5は、各言語話者の音韻知覚の正答率を、同一音韻カテゴリーの場合と異なる音韻カテゴリーの場合に分けて示したものである。同一音韻カテゴリーは「有気音₍₁₎-有気音₍₂₎」または「無気音₍₁₎-無気音₍₂₎」の刺激音であり、これらを「同じ語である」と判定した場合に正答となる、異なる音韻カテゴリーは「有気音₍₁₎-無気音₍₂₎」または「無気音₍₁₎-有気音₍₂₎」の刺激音であり、これらを「違う語である」と判定した場合に正答となる。

図5より、調査協力者の母語によってわずかに傾向が変わることが見て取れる。具体的には、日本語母語話者の場合、異なる音韻カテゴリーの正答率が中国語母語話者（および韓国語母語話者：参考）に比べてやや高い。これは、日本語母語話者がモンゴル語の有気音と無気音の違いを中国語母語話者よりも「正確に」知覚していることを意味する。しかし、両者の正答率の差は大きくない（中国語母語話者：44.4%、日本語母語話者：53.8%）。さらに、異なる音韻カテゴリーの32の刺激音の中で、中国語母語話者の平均正答数は

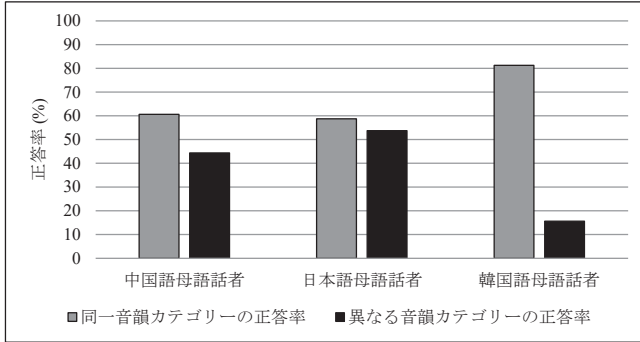


図5：各言語母語話者の音韻知覚の正答率（音韻カテゴリー別）

14.2、日本語母語話者の平均正答数は17.2であったが、5人の正答数は中国語母語話者では8, 9, 15, 19, 20、日本語母語話者では9, 11, 15, 20, 31であり、中央値はともに15.0であった。つまり、正答数には個人差が非常に大きく、母語話者による違いであるかどうかは定かではない。

なお、韓国語母語話者は実験参加者が1名のため参考値だが、今回の実験では、同一音韻カテゴリーの正答率が高く、異なる音韻カテゴリーの正答率が著しく低かった。これは、モンゴル語の有気音も無気音も、どちらも同じ音だと認識しているためだと考えられる。

次に、さらに細かく音韻知覚の結果を分類する。図6は、各言語話者の音韻知覚の正答率を、刺激音のタイプに分けて示したものである。

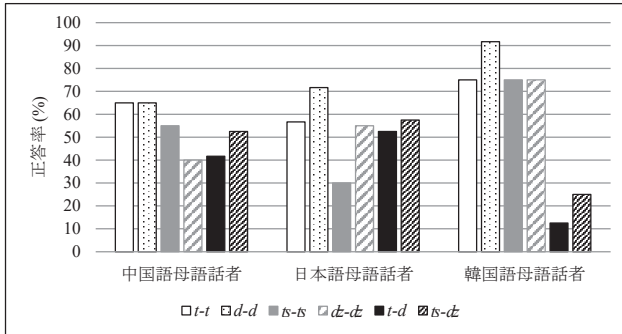


図6：各言語母語話者の音韻知覚の正答率（刺激音タイプ別）

図6より、中国語母語話者と日本語母語話者で、知覚に傾向の違いが見られることがわかる。まず s-s について、日本語母語話者は正答率が低い。つまり、モンゴル語母語話者に

とっては同じ h に属する複数の音を、日本語母語話者は違う音として知覚する傾向にある。日本語は有声性の対立を持つため、有気音、特に VOT の長い有気破擦音は、多少の音声的差異があっても日本語母語話者には同じ音韻カテゴリーとして知覚されることが予想されるが、結果は逆になっている。この要因は定かではないが、モンゴル語の h の VOT のレンジが広く、日本語の h と t の両方にあたる音が混在しているために、日本語母語話者にとって知覚が難しい、という可能性が考えられる。

一方で、 t - t に注目すると、中国語母語話者において正答率が低い。つまり、モンゴル語母語話者にとっては同じ t に属する複数の音を、中国語母語話者は違う音として知覚する傾向にある。こちらも予測としては、中国語は有気音の VOT が長い傾向にあるため、無気音と有気音の境界は VOT がやや長いところにあると考えられ、VOT が短い無気音は多少の音声的差異があっても中国語母語話者には同じ音韻化カテゴリーとして知覚されることが予想されるが、結果は逆になっている。この要因は定かではないが、モンゴル語の t の VOT のレンジが広く、中国語の h と t の両方にあたる音が混在しているために中国語母語話者にとって知覚が難しい、という可能性が考えられる。

以上の考察が正しいとすれば、モンゴル語は有気音 h も無気音 t も VOT のレンジが広く、両者の VOT のレンジが重なることになるため、モンゴル語母語話者にとっても両者の弁別が難しいということが考えられる。モンゴル語母語話者が両者を知覚的に正確に弁別できるか、という点は確認する必要がある。今後の課題としたい。

次に、 t - d に注目すると、中国語母語話者よりも日本語母語話者の方が正答率が高い。つまり、日本語母語話者は、モンゴル語の t - d の対立を中国語母語話者よりも「正確に」弁別している。この結果から、モンゴル語の t - d の対立は、音韻的には帯気性の対立とされるが、特徴としては日本語の有声性の対立に近いことが示唆される。

4.3 VOT の差と知覚

各言語話者が音声的な VOT の差を音韻カテゴリーの弁別に用いていると仮定すると、VOT の差が小さい刺激音には「同じ語である」と判定し、逆に VOT の差が大きい刺激音には「違う語である」と判定することが予想される。そこで、それぞれの刺激音における VOT の差と、「同じ語である」という回答の数との相関をしてみる。図 7 は、実験参加者の母語話者別にその相関を示したものである（韓国語母語話者は 1 名のため除く）。

図 7 より、刺激音における VOT の差と、「同じ語である」という回答の数には相関がないことがわかる。参考までに相関係数を示すと、中国語母語話者で -0.19 、日本語母語話者で $+0.09$ であった。つまり、少なくとも今回の知覚実験においては、VOT の音声的な差のみに基づいてモンゴル語の音韻カテゴリーを知覚することはなかったと言える。

5. まとめと今後の課題

本稿では、モンゴル語の語頭破裂音 t - d ($/t^h/-/t/$) および語頭破擦音 h - t ($/t^h/-/ts/$) の対立が、

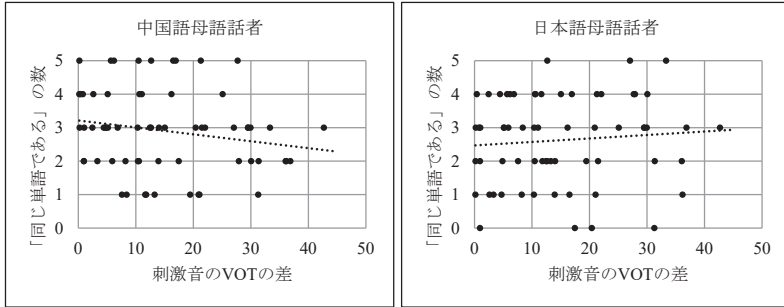


図7：各刺激音における VOT の差と「同じ語である」という回答の数の関係
(左：中国語母語話者、右：日本語母語話者)

日本語、中国語、韓国語母語話者にどのように知覚されるのかを、知覚実験によって検討した。その結果、聴取者の母語による大きな差は見られなかったが、日本語母語話者はモンゴル語の有気音 *t* と無気音 *d* の弁別を、中国語および韓国語の母語話者よりもやや「正確に」(つまりモンゴル語母語話者の弁別の意図通りに) 行っていることが明らかになった。

2.6 節において、以下の仮説を提示した。

(4) (= (2) 再掲)

- a. モンゴル語は帯気性の対立を持つので、同じく帯気性の対立を持つ中国語や韓国語の母語話者の方が、有声性の対立を持つ日本語の母語話者よりも、モンゴル語の有気音／無気音の区別を容易に知覚できる。
- b. モンゴル語の有気音と無気音の VOT の差が小さいので、両者の VOT の差が大きい中国語や韓国語の母語話者よりも、両者の VOT の差が小さい変種を持つ日本語の母語話者の方が、モンゴル語の有気音／無気音の区別を容易に知覚できる。

本研究における *t-d* の知覚の結果から、(4b) の仮説が正しいことが示唆される。

しかしながら、課題も多く残されている。まず前提として、モンゴル語母語話者自身がモンゴル語の帯気性の対立を十分に知覚できるかどうか、確認する必要がある。また、本研究では聴取者によるばらつきが非常に大きかったため、実験自体の妥当性も再度検討する必要がある。さらに、本研究では VOT のみに焦点を当てたが、3.5 節で述べたように、喉頭素性の対立の知覚には VOT だけでなく後続母音における基本周波数 (Fo) や第 1 フォルマント (F1) など、様々な音響的指標が関わっている。これらの音響的特徴が、母語話者および非母語話者の知覚にどのように影響しているかを検討することも、今後の課題である。

謝辞

本研究の調査において、モンゴル国立科学技術大学外国語学部の学生ならびに教員の皆様に多大なご尽力を賜った。また、知覚実験には北洋大学国際文化学部の学生にご協力いただいた。ここに記して感謝申し上げる。なお、本研究は JSPS 科研費 21K20015 および 23K12168 の助成を受けている。

注

- 1 本稿で言う「モンゴル語」はモンゴル語ハルハ方言を指す。モンゴル語ハルハ方言はモンゴル国で広く話される、いわゆる標準モンゴル語である。
- 2 軟口蓋音では両唇音や歯茎音に比べて、VOT が長い傾向にあることが知られている (Kent and Read 1992: 114, Cho and Ladefoged 1999: 218)。以下では特に断らない限り、VOT のおおよその値を示す際には歯茎破裂音 (/t^h/, /t/, /d/) の値を代表値とする。
- 3 両唇音と軟口蓋音については事態がやや複雑である。語中での音声実現や音韻的な振舞いなどから、無声有気音 /p^h, k^h/ と有声音 /b, g/ の対立だとみなす考え方がある。詳しくは植田 (2020) を参照されたい。
- 4 図中の「内蒙古語」は、中国内蒙古自治区で話されるモンゴル語諸方言の総称である。
- 5 この読み上げは他の音声産出実験の一部として行われた。なお、録音された音声データを研究目的で他者に公開する可能性があることについては、録音前に音声提供者に告知し、了承を得ている。
- 6 実際には読み上げは計 3 回繰り返されたが、本研究の刺激音として用いたのは 1 回目と 2 回目の音声のみである。
- 7 モンゴル語教育は、本稿の筆者が授業の一環として行ったものである。

参考文献

- Abramson, Arthur S. (1977) Laryngeal timing in consonant distinctions. *Phonetica* 34 (4): 295–303.
- Boersma, Paul and David Weenink (2021) Praat: Doing phonetics by computer (ver. 6.1.50). <https://www.fon.hum.uva.nl/praat/>
- 邊姫京 (2016) 「韓国語ソウル方言における語頭閉鎖音 VOT の年齢差と性差」『音声研究』20 (2): 23–37.
- Chao, Kuan-Yi and Li-mei Chen (2008) A cross-linguistic study of voice onset time in stop consonant productions. *Computational Linguistics and Chinese Language Processing* 13 (2): 215–232.
- Cho, Taehong and Peter Ladefoged (1999) Variation and universals in VOT: Evidence from 18 languages. *Journal of Phonetics* 27: 207–229.
- Haggard, Mark, Stephen Ambler and Mo Callow (1970) Pitch as a voicing cue. *The Journal of the Acoustical Society of America* 47 (2): 613–617.
- 韓喜善 (2016) 『韓国語ソウル方言の平音・激音・濃音の研究』大阪：大阪大学出版会。
- Kent, Ray D. and Charles Read (1992) *The Acoustic Analysis of Speech*. San Diego: Singular Publishing Group.
- Klatt, Dennis H. (1975) Voice onset time, frication, and aspiration in word-initial consonant clusters. *Journal of Speech and Hearing Research* 18: 686–706.

- Labrune, Laurence (2012) *The Phonology of Japanese*. Oxford: Oxford University Press.
- Ladefoged, Peter and Keith Johnson (2011) *A Course in Phonetics* (6th edition). Boston : Wadsworth, Cengage Learning.
- Lee, Hyunjung, Stephen Politzer-Ahles and Allard Jongman (2013) Speakers of tonal and non-tonal Korean dialects use different cue weightings in the perception of the three-way laryngeal stop contrast. *Journal of Phonetics* 41 (2): 117–132.
- Lin, Yen-Hwei (2007) *The Sounds of Chinese*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lisker, Leigh and Arthur S. Abramson (1964) A cross-language study of voicing in initial stops: Acoustical measurements. *Word* 20: 384–422.
- Rochet, Bernard L. and Yanmei Fei (1991) Effect of consonant and vowel context on Mandarin Chinese VOT: Production and perception. *Canadian Acoustics* 19 (4): 105–106.
- 斎藤純男 (2006) 『日本語音声学入門 改訂版』東京：三省堂。
- Shimizu, Katsumasa (1996) *A Cross-language Study of Voicing Contrasts of Stop Consonants in Asian Languages*. Tokyo: Seibido.
- Silva, David J. (2006) Acoustic evidence for the emergence of tonal contrast in contemporary Korean. *Phonology* 23 (2): 287–308.
- Svantesson, Jan-Olof, Anna Tsendina, Anastasia M. Karlsson and Vivan Franzén (2005) *The Phonology of Mongolian*. Oxford: Oxford University Press.
- Svantesson, Jan-Olof and Anastasia Karlsson (2012) Preaspiration in modern and old Mongolian. *Suomalais-ugrilaisen Seuran Toimituksia* 264: 453–464.
- 高田三枝子 (2011) 『日本語の語頭閉鎖音の研究 —— VOT の共時的分布と通時的変化 ——』東京：くろしお出版。
- 植田尚樹 (2018) 「中国語・内蒙古語・モンゴル語の語頭閉鎖音における VOT の差異」『日本語学会 第 157 回大会 予稿集』172–177 (京都：日本語学会)。
- Ueta, Naoki (2018) Voice onset time of word-initial stops and affricates in Khalkha Mongolian. *Journal of the Phonetic Society of Japan* 22 (2): 131–140.
- 植田尚樹 (2020) 「モンゴル語ハルハ方言の語中閉鎖音の音声的バリエーションと音韻解釈」『日本モンゴル学会紀要』50: 1–18。
- Ueta, Naoki (2021) The perception of word-initial aspiration contrasts in Mongolian: The effects of voice onset time and following vowels. *Altai Hakpo* 31: 155–175.
- 吴宗济 (主編) (1986) 『汉语普通话单音节语图册』北京：中国社会科学出版社。
- 朱春躍 (2010) 『中国語・日本語音声の実験的研究』東京：くろしお出版。

植田 尚樹 (n_ueta@hokuyo.ac.jp)

地域日本語ボランティア育成と諸条件 — 北洋大学で求めるボランティア像に関して —

奥村 訓代
北洋大学

Developing Local Japanese Language Volunteers and Various Conditions
— Regarding the Image of Volunteers Sought at Hokuyo University —

OKUMURA Kuniyo
HOKUYO University

Abstract

At Hokuyo University, while waiting for the end of Corona, from April 2023, we accepted about 160 international students in the international student department alone, and at the same time, we accepted 25 third-year transfer students in the fall in the undergraduate department. As a result, especially at the university, despite being a third-year student, the number of international students who are not fluent in Japanese conversation and insufficient in listening has increased. Considering this situation, it was keenly felt that it is an inevitable task to improve Japanese conversation skills and communication skills for third-year transfer students who come in twice in spring and autumn. Therefore, this time, as one of the solutions for the third-year transfer students who are expected to increase for the time being, we reached the necessity of widely recruiting “Japanese Communication Volunteers” from citizens. The title is “Japanese Volunteer Introductory Course”, and the content of 75 minutes × 6 times is presented, and full attendance is mandatory. In addition, it is not the case that anyone who is Japanese is good for volunteers, but we set a goal to be able to approach with a problem awareness of communication ability development. Now, the main purpose is to train volunteers that match the image of Japanese volunteers that Hokuyo University needs. And for those who meet these conditions, we hope that they will lead to a place of mutual understanding and mutual learning while actually working as volunteers. Please translate the above into English.

はじめに

この小論では、2023年10月から11月にかけて行った北洋大学無料公開講座「日本語ボランティア入門」(1回75分×6回)の内容と主旨を簡単に紹介するとともに、その必要性の背景に関して言及するものである。

同時に、受講者のアンケート結果から、ボランティアやボランティア希望者が抱えている問題点の解決に向けた方策に関しても現状などを纏めてみた。

ボランティアの現状は、2021年のデータによると、日本語教師の7割から8割がボランティアであることが分かる。また特にボランティアが地域に住む、いわゆる「生活者としての外国人」と関わっているケースが多く今後の日本語教育に与える影響は大きい。

この様に日本語教育の現状が歪なのは、日本語教育並びに日本語教師養成が1982年の留学生10万人計画、2008年の留学生30万人計画を始め、先進諸外国並みに留学生数を増やすとか、日本人18歳人口の穴埋めにするなどの理由で、また1985年から始まった日本語教師養成課程やコースの開設を見ても、その対象が留学生である点からも明らかである。この時点では、留学生(日本語学校や、大学)を対象に考えてきたことを物語っている。

この偏った傾向に少なくとも違和感を覚えながらも2019年の日本語教育推進法制定まで日の目を見ることなく40年の月日が費やされてきたことになる。

つまり、やっと日本語教師育成の目的に留学生と並び、児童生徒、難民、技能実習生、生活者としての外国人、海外での日本語指導が明確に区分されたと認知されたことになる。

その一方で文化庁は2022年11月、生活者としての外国人に、CEFRA2レベルの「やさしい日本語」は、情報収集のための日本語レベルとし、同時にB1レベルが情報発信には必要なレベルであると述べている。確かに諸外国の移民言語対策(第2言語獲得対策)を見てみるとCEFRB1レベルを必要としていることも伺える。しかし、決定的に異なる点は、諸外国が移民対策として、或いは国策として移民に対する第2言語習得に時間と費用を掛けているのに対し、日本は移民を基本的に認めておらず、その対策を行わずして生活者としての外国人に同じ能力を求めている点である。

その意味でボランティアの位置づけも諸外国とは大きく異なる。2024年4月の日本語教師の国家資格化も日本語教師のステータス向上の点から悪いとは言わないが、大半を占めるボランティアに取って必要なことかどうかは疑わしい。国外に対する日本語教師資格の位置づけとしては対外的に必要なかもしれないが、国内に目を向けたとき、とるべき行動の順番が異なるのかも知れない。その周辺事情を再度確認し、今後のボランティア養成と地域で増え続ける技能実習生をはじめとする多くの留学生以外の生活者としての外国人の円滑な日本語習得に資すればと願っている。

1 今回の「日本語ボランティア入門」講座のあらまし

今回の募集要項は資料1の通りである。全6回の講座を全て受講できる人を基本条件とした。また時間帯も、市内から離れていることを考慮し18:30分から19:45分までの75

分を1回分とした。地域貢献と日本語ボランティア育成を目標に無料で行った。企画運営は筆者が行い、6回中の4回は、関連教員に其々の専門の視点から講義を進めてもらった。

1.1 講義の目的

今回は、ボランティア育成の基礎として以下を学んでもらうことを主目的に講義内容を構成した。

資料1 全6回のタイトルと担当者

	タイトル	担当者	サブタイトル
1回目	日本語教育の現状と課題	奥村訓代	ボランティアの必要性
2回目	7000言語の中の1言語としての日本語	植田尚樹	言語の普遍性と特異性
3回目	言語が異なると思考パターンが異なる	福嶋剛司	日英仏語比較
4回目	海外の日本語事情	福本達也	韓国・中国を例として
5回目	日本語実習	藤田航輝	海外と国内の様子
6回目	ボランティアとしてする事、出来る事	奥村訓代	全体の振り返りとまとめ

資料1にもあるように、今回は6回全回参加できる方という位置づけで募集した。

その趣旨は、ボランティアだとしても「日本語は誰でも出来るから」という安易な気持ちでを払拭し、文化庁や日本語教育推進法で言うところの日本語教師のレベルアップと維持を脳裏にいだきながらも国際交流や多文化共生に役立てばと願い、最小ユニットの学習だけは伝えたいという思いを込めた。

結果、14名の苫小牧、白老、千歳の方が新聞情報や市の情報から参加された。また、高知からも2名のオンラインの申し込みがあり、毎回16名の参加者を得た。

尚、参加者の属性は以下の通りであった。

1.2 参加者の属性分析

資料2 参加者の属性など

年代・男女	地域	日本語教師歴	情報収集先	(現職など)
1 60代男	苫小牧市	なし	大学HP	無職
2 60代男	苫小牧市	なし	受講者リスト	未記入
3 40代女	白老	なし	受講者リスト	未記入
4 60代男	苫小牧市	なし	大学HP	公務員
5 60代男	苫小牧市	なし	民報(新聞)	会社員
6 40代女	苫小牧市	なし	市のLINE	個人事業主
7 未記入女	千歳市	なし	民報	未記入

年代・男女	地域	日本語教師歴	情報収集先	(現職など)
8 40代女	苫小牧市	なし	民報	パート
9 10代男	苫小牧市	なし	民報	学生
10 60代女	苫小牧市	なし	知人より	無職
11 60代男	苫小牧市	なし	大学HP	無職
12 40代女	白老	なし	大学HP	会社員
13 60代男	苫小牧市	なし	民報	未回答
14 20代女	苫小牧市	なし	民報	会社員
15 40代女	高知市	あり	※	大学教員
16 60代女	高知市	あり	※	ボランティア

※ 15・16番は、筆者前職の関係者（高知からのオンライン参加者）

以上の様に、半数が60代ではあったが、10代から60代までと幅広い16名の参加者を得ることが出来たのは、若い層にも2024年から国家資格となる日本語教師やますます増え続ける外国人との共生に対する興味が、少しずつではあるが浸透してきているのを実感できた。また殆どの参加者が、全6回を通し100%の出席（一部、法事や入院による欠席者除く）となり、主催者の意図が伝わる講座となった。

次章では、全6回の具体的な学習内容（主催者の意図）を見ることにする。

2 学習内容の吟味（6回それぞれの意図）

この章では、特に6回（1回75分）という限られた時間内に、ボランティア入門講座の目的をどこに於いたかについて述べる。

先ず、今回の市民公開講座は、情報公開時から「全6回を受講できること」を条件に募集した。市民公開講座として、全出席を受講条件とすることはハードルが高くなり、最も参加率の悪くなる要因を含んでいたが、主催者としては開講の背後に北洋大学の学部留学生88名や留学生別科152名、計240名の留学生に対する「日本語コミュニケーション・ボランティア」養成という喫緊の課題を持っていた。

従って、全6回という非常に限られた時間内に、大学側がボランティアに要求する最低の条件や情報・知識の習得を期待するものであった。

2.1 第1回目から第6回目までの趣旨とポイント

第1回目：（日本語教育の現状と課題——ボランティアの必要性——）

ここでは、まず全6回を通した今回の講座開設目的を説明、全体を通した講義の流れと意図説明、それぞれの担当者の役割分担などのガイダンスやオリエンテーションを行った。

引き続き、日本語教育の現状、特に抱えている課題を中心に話すと同時に、日本語ボランティアの必要性と役割分担に関する話を行った。

第2回目：(7000言語ある中の1言語としての日本語の位置づけ——言語の普遍性とそれぞれの言語の特異性——)

ここでは、言語学の視点から1言語としての日本語の位置づけを行う講義が行われた。

どこの国にもある国語と第2言語としての日本語の違い、またよく言われる、「日本語は難しいから・・・」は、どの意味で正しいのか。本当に難しいのか、難しいという暗示が外国人のみならず日本人を呪縛し、外国人の学習意欲低下や拒否に繋がっていないのか、同時に日本人の説明不足を許容する原因となっていないのか、などの話題提供が出来ればという主旨を持っていた。

第3回目：(言語が異なると思考パターンが異なる——日英比較を中心に——)

ここでは、日本人に一番なじみのある言語、日本語と英語を比較しながらその単語や意味、ロジックの違いの背景習得を主旨とした。

第4回目：(海外の日本語事情——韓国・中国を例として——)

ここでは、担当者の海外教授経験を活かし、それぞれの国のデータをもとに日本との比較を行いながらそれぞれのお国事情と日本語事情について背景を探り、違いの特色と必要性把握を主旨とした。

第5回目：(日本語実習——海外と国内の様子——)

ここでは、通常ボランティアでは行わない教育実習の必要性を国内外の引率経験をもとにのべ、そこから得られる数々の発見と必要性に関して違いを認識することを主旨とした。その中では国内外の日本語学校や義務教育機関、並びに大学における実習内容の詳細ものべられた。

第6回目：(ボランティアとしてする事、出来ること——全体の振り返りとまとめ——)

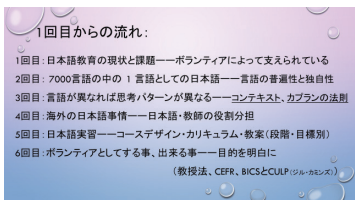
ここでは、全6回の復習と総まとめを行いながら、ボランティアに求められている事、出来ることと、してはいけないことの一部を紹介することを主旨とした。

特に全6回講義の関連性に関しては、以下のようにPPTにまとめた。

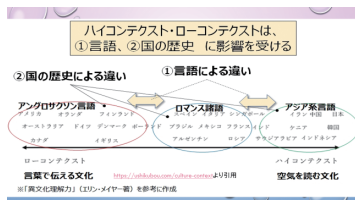
それぞれの講義のまとめと全体の流れを簡単に紹介しつつ、全6回の今回のボランティア入門講座に主催者側が求める主旨が伝わるように配慮した。

また、結果的に受講後の感想の多くに、今回の講義で全体の流れと関連性が理解できた

資料3 実際の授業で使用したスライド



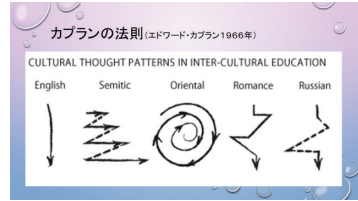
スライド1



スライド2

	ハイコンテキスト文化	ローコンテキスト文化
好まれるコミュニケーション	繊細、含みがある、多層的	厳密、シンプル、明確
メッセージの受け止め方	行間で伝え、行間で受け取る	顔面通りに伝え、顔面通りに受け取る
コミュニケーションスタイル	ほのめかし、はっきりと口にしない	明確に伝えるためなら、繰り返しも歓迎

スライド 3



スライド 4

専門家とボランティアの相違点

専門家: <ul style="list-style-type: none">文法・構造シラバス標準語日本語試験 (CALP)登録日本語教師 (国家資格化)有償/無償	ボランティア: <ul style="list-style-type: none">場面/話題シラバス①方言OK日本語能力試験 (JICS)②資格不要 (日本語教育の背景・基礎)無償/有償
--	---

スライド 5

① 語学教育から見たシラバスとは

- 文法シラバス: 品詞を単位に組み立てたシラバス
- 構造シラバス: 文型・文法・語彙を単位に組み立てたシラバス
- 場面シラバス: 場面や場所を単位に組み立てたシラバス
- 機能シラバス: 動作や機能を単位に組み立てたシラバス
- 話題シラバス: 話題(トピックやテーマ)を単位に組み立てたシラバス
- 課題シラバス: 課題(タスクや目的など)を単位に組み立てたシラバス
- 技能シラバス: 技能(スキル)を単位に組み立てたシラバス

スライド 6

② ジム・カミンズ (1979年)

生活言語能力 (BICS) <ul style="list-style-type: none">日常生活で使う言語の能力。(1~2年)英語では、BICS (BASIC INTERPERSONAL COMMUNICATIVE SKILLS)場面があり、文脈(コンテキスト)があり、表情、視線、手の動きなど非言語的作業が理解をサポートしてくれるので認知能力必要度(脳をどれだけ使うか)が低い。認知的負担が軽い。子どもは習得が早い。	学習言語能力 (CALP) <ul style="list-style-type: none">学習で使う言語の能力。数学を学ぶときも。高コンテキスト。(5~7年)英語では、CALP (COGNITIVE ACADEMIC LANGUAGE PROFICIENCY)場面がなく、文脈から切り離されているので、認知能力必要度が高い。認知的負担が高い。脳をたくさん使う。外国語で学校の授業を受けることでも成れる。
--	---

スライド 7

日本語教師になる方法現在と今後

現在 <ul style="list-style-type: none">大学で日本語教師養成講座を受ける長年の420時間以上を受ける日本語教育能力試験に合格する	今後 <ul style="list-style-type: none">大学・民間で420時間以上教育実習45時間(認定日本語学校)国家試験合格
--	--

↓

上記つづき登録

↓

登録日本語教師

↓

(経歴重視)

↓

どれが一つ

日本語教師

スライド 8

日本語教育推進法とは(2019年6月21日)

- 国内の日本語教育の対象者
 - 外国人等である**幼児、児童、生徒等**(第12条)
 - 外国人**留学生等**(第13条) *学校教育の充実*
 - 外国人等である**被用者等**(第14条)
 - 難民**(第15条) *生活者としての外国人*
- 海外の日本語教育の対象者
 - 海外における**外国人等**(第18条)
 - 海外に在住する**邦人の子等**(第19条) *海外での日本語教育*

スライド 9

「共生」の同義語は？

感謝の気持ち

尊敬できる人間性

信頼できる関係

仲間意識の構築

スライド 10

というコメントが多数寄せられた。

2.2 結果と分析

全6回(参加者16名)によるアンケート結果は、以下の通りであった。

尚、残念ながら16名中の2名が最終日に法事等で欠席となり、また1名が未回答であった。

① 今回の講座全体に関する満足度調査結果

とても満足	8人
ほぼ満足	4人
満足	1人
未回答	1人
欠席	2人

結果、未回答・欠席を除く「全員が満足以上」を示し、「とても満足」が回答者の62%であったこと、「やや不満、不満」が0%であったことに、主催者としてはとても遣り甲斐を感じている。

② 次回講義の受講希望調査結果

「次回に同じような講義があれば受講希望するか」という問いには、全員が賛同し、アンケート用紙に連絡先を記入いただけた。

③ 有料となった場合の受講希望調査結果

「レベルアップした授業が有料で開講される場合、受講するか」という問いに対しては、38%が受講希望し、54%が授業料次第などと返答した。尚、「有料なら受講しない」は8%(1名のみ)であった。(残りは、欠席による未回答)

④ 「日本語コミュニケーション・ボランティア」登録希望調査結果

今回の「日本語ボランティア入門」の開講主旨の1つでもある、主催者の希望する条件の揃ったボランティア募集の趣旨をご理解いただき、「大学側の趣旨にそってボランティアを行いたい」と最終日に登録してくれたのが、14人中5人(36%)と期待以上の数値で有った。

以上の様に結果的には、どの項目においても期待以上の数値となったことに驚きと責任を感じている。

2.3 2章のまとめ

2章では全体の流れを通して、主催者の講座開講意図・内容の紹介。そしてアンケートにみる全体を通した調査結果をまとめた。

3 日本語コミュニケーション・ボランティア養成に関する考察

講座最終日に、今回の講座開設目的について説明を加え、その場で修了者の中から「日本語コミュニケーション・ボランティア」募集に関する情報を提供した。結果は、早速その場での(苫小牧会場14名中5名)登録希望者が出た。内訳は1・2における属性番号の4・5・7・8・9番の方々であり、10代から60代と幅広い年代層を得ることが出来た。

3.1 日本語コミュニケーション・ボランティアに対する諸条件

- 1) 基本的に当方で提供するボランティア入門講座修了者であること

2) 以下の諸規定を守れる人

- ①大学側の指定された時間で行えること（9：00 から 17：00 の間とする）
- ②大学側の指定する場所で行えること（食堂横のフリースペース、および図書館）
- ③同時に以下の条件を守ること
 - ・上記指定時間と場所を守ること
 - ・その他の時間や場所では行わないこと
 - ・特別な事情でキャンパス外や指定時間外に行う場合は、届け出を行い許可を得ること（この場合も、学生が必ず2名以上の複数であること。個人接触は禁止）
 - ・学習内容や活動内容を毎回、必ず指定の様式に記入すること
 - ・その他、上記以外は必要に応じ双方が相談すること

を条件とした。

これらは想定できるトラブルを避け、善意が善意に留まる範囲として規定するもので、決して善意を制限しようとするものではない。そのための多文化共生の現実、日本語指導の難しさのさわりを学ぶ「日本語ボランティア入門講座」であったのだ。

3.2 今後の日本語ボランティア養成との関わり

日本語教育界において日本語ボランティアは、その80%にも達すると言われている。そしてその殆どが、地域日本語教育に欠かせない存在である。しかし、その待遇や環境は決して良くならないままである。一方で日本語教育推進法（2019年）に基づき、日本語教育の質の向上と維持がクローズアップされ、その一つに日本語教師の国家資格化が決定した。その結果、一番迷惑なのがボランティアではないだろうか。日本語ボランティアをするのに難しい勉強や国家資格が必要になるという錯覚を与える要因になっているからだ。

日本語教育推進法のメリットは、留学生以外の日本語教育にも目を向け、明文化したことにある。しかし同時に欠点として、頭でっかちな法律となり、従来からの念願である日本語教師の地位保全と生活の向上に関しては、むしろ「労多くして益少なし」となるばかりか若者の選択肢から遠ざかる懸念すら伺える。

現在の様に留学生数よりも、その他、多種多様な外国人が増加している中では、日本語ボランティアにも細分化が要求されていることも自明の事実である。つまり児童・生徒に対する日本語支援と難民や技能実習生に対するそれぞれの職種別・環境別日本語支援は大きく異なり、同時に広く海外における異文化の中での日本語教育も国内のそれとはまったく異なるからである。

ここでは、最もオーソドックスというべき留学生への日本語ボランティアに関する試論を以下にのべることにする。

3.3 北洋大学が求める日本語ボランティア像について

現在、北洋大学でも例にもれず定員割れをきたしている。そしてその穴埋めを、留学生

で補おうとしている。これはどこでも行う通常の手段の1つであるが、特に本校の場合は、最も安易な3年時編入生を大量にとることで当面の人数確保を行うと同時に、留学生別科の開設を並行して行っている。

3年時編入生の特徴は、2つある。1つ目は、日本での滞在期間が短いので特に会話力が著しく低い。2つ目に、母国での日本語学習時間と学習内容が不足しており、3年時必須となる、ゼミや卒論に著しく日本語力のおぼつかない学生が急増している点である。

これらの状況を鑑みて、日本語補習を2023年度秋クラス3年時編入生の一部にテストコースとして始めている。内容的には月曜から金曜日に1時間目(9:00から10:30分)に日本語補講として2名対象に始めている。当初の約束通り、2名の出席率は100%であるが、成果は期待するほど目に見えないのが2か月の結果である。一人は日本語能力試験N2に合格しているもののヒアリングが出来ず、語彙力も少なく基礎文法における運用上のミスが目立つ。また他方は、未だに語彙数自体が少なく、聞き取りが最大の課題であり、毎回友達に中国語で確認するのが常である。尚、教材はN3からN2レベルであるが、思いのほか文法の基礎力不足が目立つ。問題回答にスマホ使用を認めているが、尚かつ不十分であることから能力が測定できる。

そこで、北洋大学ではこの様な特に3年時編入および留学生別科の日本での学習並びに生活経験が浅い理由による会話力不足の学生、並びに母国での日本語学習環境の十分でなかった学生に対し、「日本語コミュニケーション・ボランティア」を育成する必要性に至った次第である。

ボランティアに期待する内容が明白であるので、特に無秩序なボランティア募集ではなく、目的遂行のためのボランティア育成を心掛けている。

3.4 3章のまとめ

この章では、北洋大学が求める日本語ボランティア像に関して言及した。その内容は以下の通りである。

- ① 日本語教育に関する基本事項の学習
(日本語を必要とする人々の現状把握、指導に関するアプローチと基本)
- ② 多文化共生の必要性と基本概念
- ③ その他(求められるボランティアへの心得)

4 今後の課題(ボランティア)と方策

今回は、大学内で必要とする日本語ボランティアに関して、単に募集してボランティアとするのではなく、希望するボランティアの在り方を、まず講習会で習得・理解してもらうことから始めた。勿論、1回75分×6回の短い時間帯では、希望する全てを網羅することはできない。しかし、無秩序に集めてからどうこう言うのも失礼になるので、先ずは当の方針と色々な基本的知識の伝達から始めることとした。

受講後の感想欄のフリースペースには、「日本語指導は、易しくない事が分かった」というのが20%程度見受けられたことから、一般的に母語である日本語ボランティアは「日本人なら誰でも簡単に出来るはず」と考えるのが常らしいことも見受けられた。

しかし現実には、相手が義務教育も文化も習慣も共有せず、まず日本語自体が通じないという現実の中で、どのように対処していくのかという視点に気づき、その為の方策の一つを学んでいただけたことは、開催者としてはまずまずの出来だったと感じている。

今後の課題は、2つある。1つは、今回の「日本語ボランティア入門」講座修了者を「大学の「日本語コミュニケーション・ボランティア」に登録し、実際に会話のできない学生を対象にコミュニケーションを行ってもらい実践記録と効果を図りたい。2つ目は、「コミュニケーション・ボランティア」に相応しい基礎知識（音声学の発音矯正力、標準語的アクセントおよびイントネーションの確認、対象留学生の日本語力把握に役立てるための日本語能力試験並びに日本留学試験の内容吟味）などボランティア活動の手助けとなる学習やブラッシュアップ講座の機会を充実させたい。

謝辞

今回も筆者以外の4人の教員の方々にボランティア養成に相応しく、ボランティアで講座開設にご参加いただき、熱弁を払って頂きました。お陰で開催者としては企画通りの成果を得ることが出来ました。ここに改めて皆様のご助力に感謝いたします。今後も、このような地域貢献と国際貢献を主とした取り組みが行われることにより、大学が地域に溶け込み、空気や水の様に自然ではあるが、日常生活に必要な不可欠なものの一つになればと願う次第です。

参考資料等

御館 久里恵「地域日本語教育に関わる人材の育成」日本語教育 2019年 172巻 3-17

久野 弓枝「地域日本語ボランティア教室の限界と可能性」

北海道大学大学院教育研究科紀要, 2002年 86, 251-264

中井延美『必携! 日本語ボランティアの基礎知識』大修館 2018年

中川 祐治「地域の日本語ボランティアに求められる能力とは何か」

福島大学地域創造第 2018年 30巻 131-42

宮崎 里司「外国にルーツのある少年院在院者向け社会適応プログラム開発：日本語教育の観点から」
基礎教育保障学 2023年 7巻 149-155

義永 美央子「日本語教師の資質・能力観の変遷と今日的課題」社会言語科学 2020年 23巻 1号 21-36

奥村 訓代 (k_okumura@hokuyo.ac.jp)

身体化された文化資本についての一考察

— 眼鏡産業振興の視点から —

瀧波 慶信
北洋大学

A Study of the Embodied Cultural Capital
— From the Perspective of Promoting the Eyeglass Industry —

TAKINAMI Yoshinobu
Hokuyo University

提要

2000年,日本老年人口的比例达到17.4%,这是世界上屈指可数的高比例,预计到2065年将达到38.4%。人口老龄化要求所有社会制度发生变革。如今,随着老龄化,人口绝对数也在减少,这种少子老龄化的现状意味着所谓的“现役世代”的劳动年龄人口大幅缩减。应对日本面临的少子老龄化这种劳动人口减少的问题,迫切需要一个能够创造出新的创造力的体系。本文运用法国社会学家皮埃尔·布迪厄(Pierre Bourdieu)提出的文化资本概念来寻找解决问题的线索。本文通过对眼镜产业的现场采访,将从事眼镜产业的“职人(手艺人)”的技能作为身体化文化资本,并探索其重要性,同时,提出身体化文化资本是眼镜产业振兴不可或缺的要素。

1. はじめに

我が国における高齢者人口比率は、2000年には17.4%という世界でも有数の高率に達しており、2065年には38.4%に達するとの予測もある¹。さらに高齢化の進行も速く、高齢化社会に到達したのは1970年であり、高齢社会に到達したのは1994年であった。この間わずか24年であり、四半世紀で高齢化社会を通過したのは、我が国が世界初であった。

このような高齢化の進展は、社会保障、福祉、医療はもとより、あらゆる社会システムに対して変革を要請している。

高齢化とともに、絶対数的にも人口減少が起こるといふ少子高齢社会の今日の状況は、いわゆる現役世代と言われる生産年齢人口の著しい縮小を意味する。すなわち我が国を支える労働力が絶対的に減少するのである。今日2024年問題もとりざたされている。中でもドライバー不足問題は、日本が直面している少子高齢社会という労働人口減少に、運送ビジネスが抱える構造的な問題が作用し、自然発生した課題である。このように、あらゆる分野の企業にとって解決しなくてはいけない問題がある。たとえば、これまでモノづくりの現場を支えてきた高い技能を持つベテラン社員が担ってきた、高いモノづくり水準を維持していくためには、早急に若手を育成・強化していくことが必要となり、高い技能を次世代に引き継がせる作業、つまり身体化された文化資本を組織的に伝承し、新たな創造を生み出すことができるような、体系的なシステムの構築が急務となっている。

身体化された文化資本とは、1973年に、フランスの社会学者であるピエール・ブルデューによって提起され、人が世代を超えて継承する教育・文化・スキル・知識・信頼関係など、世代から世代への受け渡しを通じて人によって体得された無形の資産のことである。この概念を、モノづくりの現場に応用すれば、現場におけるベテラン社員の持つ高い技能は身体化された文化資本であると考えることができる。

ピエール・ブルデューは、身体化された文化資本を、無形資産として文化資本の核心に位置付けている。彼は、人の持つスキル、熟練、技巧などの人的能力を身体化された文化資本に含めており、スキルなどと文化を総合的に把握している。

以上のような現状を見たとき、考えられる課題とは何か。第一に身体化された文化資本とは何かを理論的に明らかにする。第二に身体化された文化資本を伝承することが、あらゆる産業の振興にとって、いかに重要な要素であるかを検討していく。

「私たちは労働によって財を蓄積するのと同様に、学習や経験を通して知識を積み上げ、教養を獲得する。それらはじゅうぶんな摂取過程を経て身体の一部と化すのでなければ、ただの一次的な知的装飾に終わってしまうだろう。しかしそれらが社会生活においていつでも動因できる状態にまで咀嚼され消化された時、つまり文字通りに当人の「血肉と化した」時、私たちはその知識や教養を「身体化された」ものとみなすことができる。生物学的限界をもった身体と不可分であるという性質上、この作業は本来的に個人的レベルでしかかなされえず、代理・代行を許容しないし、そのままの形で他人に譲渡・伝達することもできない。また、身体へのとりこみは必然的に、ある程度の時間の消費を要求する。ちょう

ど労働と引き換えに蓄財が可能になるように、私たちは、時間という代価を支払って文化資本を体内に蓄積するのである。こうして吸収され身体化された知識や教養は、あらゆる財産と同じく、なんらかの市場（たとえば学校市場、社交市場、労働市場など）において投資することができ、その結果として一定の利潤－物質的利潤だけでなく、他人の尊敬や評価といった「象徴的利潤」も含む－を生み出すことも期待できる。』²と石井洋二郎は言う。さらに、「いずれにせよ、個人の身体に同化され組みこまれた文化資本は、そのままでは目に見えないので、それが実際に動員されるためには、意見表明などの形で言説化されたり、試験などの機会に発揮されたり、日常的なしぐさの中に具体化されたりといった具合に、なんらかの外在化がなされなければならない。逆に言えば、この種の外在化がなされない限り不可視の状態にとどまるのが身体化された文化資本の特徴。』³と述べている。

身体化された文化資本は、身の振る舞いや生活習慣といった身体と不可分に結びついた形態である。これは、日々繰り返される生活や、周囲の人々との接し方によって、ほぼ無意識的に身体に蓄積されるものである。

本稿では、福井県鯖江市の代表的な伝統産業である眼鏡産業の現場の取材を通して、眼鏡産業に携わる職人の技能を身体化された文化資本ととらえて、その重要性を探るとともに、身体化された文化資本が眼鏡産業の振興に欠くことのできない要素であることを提言する。

鯖江の眼鏡を取り上げた理由は、鯖江の眼鏡産業の特徴として分業制が挙げられる。一人の人間がすべての作業を行うのではなく、各工程を受け持つ専門の職人たちによって眼鏡が完成する。腕に誇りを持ったそれぞれのプロフェッショナルが熟練の技を駆使することで、細部にまで妥協のない、質の高い鯖江の眼鏡が完成する。つまりは、多種の工程毎に身体化された文化資本をもつ多くの専門の職人を観察・取材できると考えたからである。

2. 技能についてのこれまでの研究

明鏡国語辞典によると、技能とは、物事を行うときの技術上の能力と説明されている。ここでは、技能とは何かについて理論的に考察する。

浅井紀子は、「ひとくちに技能といっても、論者により視点は多岐にわたる。』⁴と述べ、技能を「量産技能」と「卓越技能」の二つに分類して検討している。「『量産技能』とは、『日々の生産量の変動や生産品目の変化、突発事象に対応し高品質・高精度・高生産性を確保しながら安定した量産を実現する製造現場の技能』である。『卓越技能』とは、『試作部門に代表される新素材・新工法の確立に向けてのブレイクスルーを支えるために欠かせない技能』である。』⁵と言う。

猪木武徳は、「技能や知識には異なる二種のもが存在するという認識には長い歴史がある。』⁶と言う。そのことの意味を正しく知るために、猪木武徳は、「この区分は明晰な数理的な分析を許さない。それゆえその存在の証明や把握には、どうしても従来の経済学の概念やレトリックは主要な役割を果たし得ない。このような知識の種類の区別と新しいレト

リックの必要性について、経済学の分野では従来あまり取り上げられることはなかった。したがってここではひとつの新しいレトリックを準備するために筆者のささやかな経済学批判としての問題を論じてみたい。まずは歴史的に展望することが必要なことを意味する。』⁷と述べている。

ここで強調される点は、技能と言う知識の一部のものが、「語ることができず」「言葉で表現できる以上のもの」を持っているということである。「語るができず」「言葉で表現できる以上のもの」を持っている知識の一つが技能である。

稲田勝幸は、次のように説明する。「現在、多くの企業で技能伝承の試みが行われている。その場が、『〇〇道場』と呼ばれることが多い。その際に、高度熟練技能者から共通して語られる言葉がある。『自分たちが働いて技能を身につけていた時には、先輩の職人たちは、自分の技を教えてくれるようなことはなかった。自分たちは先輩の技を盗むようにして身につけざるをえなかったものだ。』⁸と。稲田勝幸は、「昔の職人さんは、自分の技を他人に教えないことで自分自身の地位を守ろうとしていたということもあろうが、教えないことが生徒の側の、技を盗もうとするような積極的・能動的知識獲得努力を引き出すのであろう。」⁹と言う。

小関智弘は、次のように述べている。「建築鳶工の山梨與志雄さんも、父親から鳶の仕事の習いました。やはり口ではなにも教えてくれず、『身体で覚える』と教えられたそうです。でも山梨さんはそれは意地悪ではなかったと回想しています。鳶の仕事は高所作業など危険が多いからでしょう。いざという時に自分で対処していかなければ役に立ちません。またお父さんは、山梨さんが失敗すると、他人がいるときはガミガミ大声で怒鳴ったけど、いないときはガミガミ言わなかったそうです。人前で恥をかかされる。それがつらいから必死になって憶えたそうで、それも父親の教育法でした、と語っています。」¹⁰と。

現在の日本の製造業は、生産現場で不可欠な技能の維持と継承を行う必要性が急務である。それは、技能を持った熟練技能者が大量に定年を迎える今日、早急に技能の伝承を行わなければならない事態を迎えているということである。

3. モノづくり現場における身体化された文化資本としての技能

現在、モノづくりに関わる多くの企業が、技能の伝承の重要性と緊急性に気付き、技能の伝承のシステム化を含めいろいろな工夫をし、伝承活動に取り組んでいる。

企業が伝承しようとしている技能とは何か。

ここでは、技能を、技術と比較しながらその性質を明確にしていく。技術は、今日概念によれば形式知に分類できる。形式知とはマイケル・ポランニーにより定義されたもので、彼は、知識を伝達が容易な「形式知」と、伝達の困難性をもつ「暗黙知」に分類したが、この考え方を知識の認識論と言う。

紺野登は、次のように述べている。「知識資産は、ノウハウやマニュアル、ドキュメント化されたもの、あるいは企業内の情報システムを通じて共有されるもの、さらには法的に

保護された知的財産まで含めて、視覚的に理解できるものだけでも膨大である。ただし知識が暗黙的な部分と明示的な部分から構成されている限りは、知識資産にも『暗黙的な』要素が含まれることになる。この領域には、熟練の知識、経験の知識など、個人的なレベルのものから、組織文化の形態をとった共有のノウハウや経験の知識なども含まれる。暗黙知はわかりにくいから排除すべきである、というのは一見合理的だが、きわめて危険な考えである。』¹¹と。

稲田勝幸は、「技能は、技能者の持つモノづくりの知恵やノウハウで、その一部は形式知化できるが、その肝心要の点は暗黙知に属し、それゆえ『ヒト』から『ヒト』へ『伝承』するしかないのである。』¹²と言う。

この技能の内実を明らかにすることは、容易なことではない。そこで、この技能に関して、小池和男は、これまでの研究はあまり技能の内容にいたらないと考え、その内容に関して、「また各国の自動車メーカーを比較し、実務経験が多いと効果があることを示した研究もある」¹³としている。また、技能の内実を明らかにする方法は、「技能の内容の解明には、あとで説明するように、職場のベテランにじっくり話を聞くほかない」¹⁴と言う。以上のように、技能の内容を理解することは容易ではない。

したがって、職場の熟練作業者に、実際に聞き取り調査を行うことにより、問題解決の糸口をつかみたい。

今回の調査は、はじめでも述べたが福井県鯖江市の伝統産業である、眼鏡産業について行った。(2023.8～9 調査実施)

4. 技能の伝承に取り組む企業の実際（眼鏡産業の調査を基に）

紺野登は、次のように述べている。「知的熟練とは、『問題と変化をこなすノウハウ』である。モノ作りであれば、それは機械についての知識、生産の知識を吸収しつつも、主に経験知として得られるものである。その働きによって、メンタルな問題解決のモデルが働き、変化やトラブルに際しても柔軟に適応できるものである。特に日本の製造業が培ってきたのは、こうした『知的』要素を強く持つ、ブルーワーカーとはいえない知的熟練工であった。ホワイトカラーであっても、この不確実性への対処能力は当然重要である。知的熟練が十分に潜在し、共有されている組織は、確かに暗黙の領域が大きい。』¹⁵と。さらに、「知識プロセスは暗黙知と形式知の相互作用によってとらえられる。形式知だけの知識変換はスピードに勝るが、暗黙知を含む知識創造がなければ疲弊・陳腐化する。』¹⁶と述べている。

浅井紀子は、経験知に着目し、表層理解と深層理解という二つの理解について説明している。「表層理解とは、経験がなく、初期段階の情報だけに基づく具体的可能性の把握という意味での理解にすぎない。深層理解とは、実際に自ら経験することにより、情報としてだけでなく、現地で、現物で、現実で、実践の結果として自らの五感により明確に理解していくことである。つまり、自らの実際の体験のあるなしにより、理解のレベルが異なってくる。』¹⁷と。

ここで、経験が果たす役割とその重要性について考えてみる。先述したが、昔の職人の言葉にもあるように、いわゆる技は本来、盗むものであると考える。若者が、ベテランと呼ばれる経験の長いヒトと仕事を一緒に体験する中で、あるいは食事をも一緒にすることなどを通じて、表現できない、表現されない部分を感覚的に体得していく。浅井紀子は次のように言う。「実践から体得することと文書を暗記することの間には、現場で関係性全体に触れながら五感で現物を把握し、現象を見極め、現実の理解を深めるか否かという決定的な相違がある。」¹⁸と。

考えられることは、日本の企業において、生産現場では生産の機械化・自動化が進行しても、熟練技能の重要性は増大することはあっても減少することはないということである。

今回、福井県鯖江市の伝統産業としての眼鏡産業に携わる、株式会社田中眼鏡を訪ねて聞き取り調査を行った。担当者は、社長の田中幹也氏。

福井県鯖江市は100余年の歴史を持つ国内唯一の眼鏡枠の産地である。1980年代に世界で初めて、軽くて丈夫な金属チタンを用いた眼鏡枠の製造技術を確立した。金属アレルギーを起こしにくいチタン製の眼鏡は一世を風靡した。その後世界のスタンダードとして広まった。福井県鯖江市は日本の眼鏡枠生産90%強の一大集積地で、「世界が認める高い技術を持つ鯖江産地は、高いデザイン力とブランド力を持つイタリア、そして低コストでの大量生産を得意とする中国とともに世界三大産地の一つとして確たる地位を築いている。

鯖江の眼鏡産業は長年、供給先ブランド名で売り出される製品の受注生産（OEM）で生産量を伸ばしてきたが、近年は、低価格の中国に受注がシフト、国内でも低価格ショップが増えるなど、厳しい環境に直面している。1992年をピークに出荷額・従業者数は約3割、事業所数は約4割減少した。また、鯖江では企業間分業による生産体制が形成されている点が特徴である。特定の工程を請け負う中間加工業、部品製造業、眼鏡関連機械等製造業、材料供給業、レンズ・加工製造業間の分業によって眼鏡が完成する。このような状況にある眼鏡産業について、生産工程をたどることにより、身体化された文化資本としての技能をいかにして後世に伝えるかについて検討していく。眼鏡産業は眼鏡枠生産業と眼鏡枠の部品生産業、眼鏡レンズ生産業、およびそれぞれの加工業から成り立っている。

以下、眼鏡枠生産業に焦点を絞って考察する。

鯖江の眼鏡産業は、眼鏡枠の生産がその中核をなしている。その生産構造をみると、眼鏡枠生産業者を中核に、多くの部品製造業者や中間加工業者が地域内に存在する、産地内分業構造でできている。

眼鏡枠の工程

①板抜き

チタン金属の板材から、材料として必要な量（形状）を「プレス加工」により打ち抜く。



近代的な機械を使って職人が作業している。ここで注目すべきは、機械を操作する際に、職人の勘や感覚が求められることである。同じ機械を使っても、それを操作する「ヒト」の技能が無いと部品は完成しない。

写真1 (田中氏提供)

②バレル研磨＋熱処理

樽型の回転研磨機（バレル研磨機）で表面を研磨したのち、高温で熱することで金属組成を変化させる。（硬度を変えるため）

③曲げ加工（1回目）

④曲げ加工（2回目）

⑤跡付けプレス＋焼鈍＋離型処理

大まかな形状を出すためのプレス加工を行った後、材料を熱処理し、次工程の為に材料表面に離型処理を行う。

⑥プレス（1回目）

⑦プレス（2回目）

2回に分けてプレスすることで、金属の割れを防止すると共に、精細な形状を生み出す。プレス工程の間に焼鈍加工を施してある。

⑧バリ抜き

上記プレス加工ではみ出た不要な部分をプレスにて打ち抜く。

⑨バレル研磨

樽型の回転研磨機（バレル研磨機）で状態を見ながら一定時間かけて表面を綺麗に研磨する。



写真2 (田中氏提供)

金属パーツを磨く作業。
金属を仕上げるまでに各加工が施されて形になる。その形になったら、メッキなどの仕上げ、無垢仕上げ、共に艶々であることが重要である。バフ磨きは、バフの硬さ、回転数、磨き粉をどの様に組み合わせるのが重要である。微妙な感覚が必要。

⑩焼鈍+離型処理+中プレス

さらに繊細で立体的な形状を出すためのプレス加工を行う。

⑪バリ抜き、バレル研磨

プレス加工により、はみ出た不要な部分をプレスで打ち抜いた上で、バレル研磨を施す。

以下の写真は眼鏡枠の形が出来上がる上記工程の一部を確認できる。一枚の板から眼鏡枠になる変化が理解できる。



写真3 (田中氏提供)



写真4 (田中氏提供)



写真5 (田中氏提供)

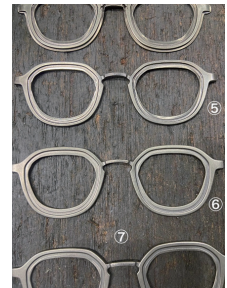


写真6 (田中氏提供)

眼鏡産業の現場においては、生産性を追求するがゆえに次第に採用されなくなった製法も少なくない。職人の高齢化もあいまって、もはや失われかけている製法も出てきている。このことは、眼鏡産業の伝統が失われつつあることを意味していると言える。

各工程の中で各工程のエキスパートである職人（ロー付け職人・メタルパーツ磨き職人・プロト職人）が仕上げた部品を組み立てたものが眼鏡枠となり、その中でも量産スタイルから外れ、いわゆる昔ながらの職人として連綿と受け継がれる技能が大変重要であり、積み重ねられた経験知、感覚、人間特有の個性が結果に大きく左右される。たとえばメタル枠の切削では、小さなキズを1つでも見逃さないよう、「最低でも誤差 1/100 mm 以内」といわれる精密なチェックが職人の目と手で行われる。700 度以上の高温で部品同士を接

合する、ろう付けでは、熱せられた部品の光り方を見て、部品ごとに異なる適切な温度を確認する。型から抜く工程では、タイミングを、職人はわずかな音の違いで判断している。また最後の仕上げでは、職人自身が納得いくまで、時間をかけて磨きが行われる。どの工程にも共通して言えることは、職人がそれぞれ培ってきた熟練の技にプライドをもち、使命感をもって作業に当たっているということである。それゆえ眼鏡についてのモノづくりの基準が必要であるが、各パーツの善し悪しを評価する基準がなく、完成品を簡易的な稼働テストで評価するのみになっている。眼鏡が使われる環境が非常に劣悪であり体内から分泌される成分との相性、反応、さらには予測の範囲を超えた負担などを考慮して完成するのが眼鏡枠である。しかし、熟練の技と評す経験知などが生み出す結果として非常に堅牢な美しい眼鏡枠が仕上がっていることに、伝統工芸士などの評価認定をし、その職人の技を後世に伝承することをしっかり行っていくことが必要であると考え。熟練の技をもつ職人による手仕事品と、機械による量産品の違いを見分けるような享受能力の存在が必要である。

5. 身体化された文化資本としての技能の重要性

モノづくりの分野において、若年層の確保・育成は重要な課題である。近年の求人情報を見ても、新規高卒者に対する求人充足率は高く、また、男子を中心に就職者に占める製造業への入職者の割合も高いことから、良質な製造業求人が増えることによって、入職率の向上が期待できるところである。ハローワークを通じて申し込んだ新規高卒者に対する求人は、インターネットを通じて全国の高校からも閲覧可能になっている。一方で、地元高校との日頃からの相互理解がより円滑な就職の近道となることも多い。地元高校生の職場体験の受入れ等は、高校生の就職意識啓発の効果とともに、相互理解の促進に役立つ。特に、工業高校等の専門高校の役割は大きいと考える。

しかしながら、現在の教育では、工業高校は偏差値教育の末端に置かれ、生徒たちは希望を失っているところもある。日本の製造業の海外移管や国内産業の空洞化もじわじわ進んでいる。今一度モノづくりを支える人材育成の場の一つである学校教育の現場について見直すべき課題は多いのではないかと考える。また、1990年代には、普通科からの製造業への入職者は、数の上では工業化を上回っており、現在においても工業化からの入職者数と大きな差はない状況にある。こうしたことを踏まえると、工業化のみとの関係ではなく、普通科との関係も築いていくことが望ましい。

若者にとって、魅力ある職場とはどのようなところなのか。初任給も重要な要素ではあるが、それにも増して、職場では、必要とされる技能の熟練に応じた処遇がなされることが重要である。技能労働者としてのキャリア形成の方向性が明確となることによって、若者にとって、より魅力のある職場と映ることが考えられる。賃金だけでなく、魅力ある職場作りに努力することは、単に、若年労働者の確保にとどまらず、現場力の向上につながっていく。

近年の、成熟社会あるいは豊かな社会と呼ばれる今日では、若者は3K（キツイ・キタナイ・キケン）と揶揄される職場には入ろうとしない傾向が出来て久しい。後継者となるべき人材が、著しく少なくなっている。さらに、豊かな社会ゆえに、若者の仕事に対する考え方が変化してきている。若者がモノづくりに関心を抱く社会の構築が求められている。現場で熱中し、工夫を重ねながらモノづくりに従事し、モノをつくる行為に関心を抱き、創造性を意識しながら輝かしい未来を築いていってほしい。

我が国の産業・文化の発展を支え、豊かな国民生活の形成に大きく貢献してきたモノづくりを着実に伝承し、さらに発展させるためには、製造現場のモノづくり中核人材や、伝統的な技能を受け継ぐ人材が必要であり、とりわけ、今後を担う若年世代の存在が重要である。

また技能を受け継ぐ人材を増やすためには次のことも考えることが求められる。

福井県の伝統工芸品一覧

- ・越前焼
- ・越前漆器
- ・若狭塗
- ・越前打刃物
- ・越前和紙
- ・若狭めのう細工
- ・越前箆筒

(<https://www.fuku-e.com/feature/dentoukougei>)

上記の伝統工芸品の中に眼鏡が無いことも眼鏡産業振興の面から解決すべき問題と考える。伝統工芸士とは、一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会が、経済産業大臣指定の伝統的工芸品の製造に従事されている技術者のなかから、高度の技術・技法を保持する者を「伝統工芸士」として認定している。これからは、評価や基準など、世界での品質基準にも日本製としての眼鏡の価値を見出す必要性が求められる。伝統工芸士の認定制度は、1974年に誕生した。背景にあるのは、後継者不足等により伝統工芸産業が低迷していることがあげられる。

伝統工芸士に認定されると、産地それぞれの伝統工芸を保存、振興に務めることになる。

そして、次の世代へ伝えていくという責務を果たすこと。そのための重要な認定制度である。国家資格であるということ、つまり知識や技能を認められているという「信頼」として、大きな意味を持つ。

さて、眼鏡枠の素材には、以下のように多種多様なものが使われている。

- ・金属枠 チタン、サンブラチナ、ステンレス、鉄、合金（亜鉛、ニッケル、銅）、銀、金、

サンコバルトなど

- ・樹脂枠 セルロイド、アセテート、TR90、ウルテムなど
- ・その他 レザー、木、石、カーボン、繊維など

上記のそれぞれの素材の特性が眼鏡レンズとの相性や耐久性に大きな差が生じ、また素材によっての手間や素材の価格が商品価格に反映されることが多い。素材の中でも1930年に加藤信太郎により開発されたニッケル85%、クロム11%、銀3%、その他1%を含む白金色合金である眼鏡枠は、身体との親和性に優れ、耐食性にも優れ染色にも強く、チタンが主流になるまでは、日本製眼鏡枠に多く使われていた。チタン加工技術が中国などで大きく波及し産業として日本製の眼鏡の世界シェアが2割あったところから減産傾向にある中で、量産体制が確立したチタン眼鏡枠より歴史の古いサンプラチナ素材を使った眼鏡枠を作る職人も現在では激減している。眼鏡枠も使用する素材により生産における職人に求められる技能は異なる。しかし、その価値への評価が見えにくいのが現状である。手間や継承されてきた技能やテクノロジーとしての集積が「信頼と価値」として評価されるためにも伝統工芸品として位置づけられることは必須である。

歴史ある素材を使った眼鏡枠の職人が今後も存在し続けるために、様々な素材から創られる眼鏡枠がそれぞれ評価されることが必要である。

6. おわりに

昭和20年代には、今ではほとんどなくなってしまった徒弟制度が見られた。モノづくりの場に入って、10年、15年とそこで日稚奉公をして、一人前の職人になるのが徒弟制度の原点である。人を育てるということは非常に難しく、教育のなかで、人を、自分が思うように一人前に育て上げることは、至難の業である。

今回、鯖江の伝統産業である眼鏡産業を取材し、実に多くのことを得た。今日では、作業の大部分がマニュアル化されており、それを参考にしながら仕事が進められるが、それだけでは不十分である。

例えば料理であるならば、実際に鍋の中に手を付けてなめてみて、加減をみながら料理する。ここにはマニュアルでは確認しきれないものがある。つまりは「ヒト」から「ヒト」への伝承が求められる。

かつて、日立製作所の取締役会長である庄山悦彦は、2007年10月に行った、「わが国のイノベーション政策と成長戦略」と題した福井講演のなかで、「今、人材に陰りが見えており、人材育成は最重要課題」¹⁹と捉えている。庄山悦彦は、2007年6月、日立総合計画研究所の取締役社長である八丁地隆と行った対論のなかで次のように語っている。「日立は創業と同時に『徒弟制度』をつくって人材を育ててきました。それが、今日の技能五輪の選手養成にもつながっていて多くの金メダルに結実しています。教育においては、こうした高い志や倫理観を伝えることが絶対必要です。そして、頭で理解するだけでなく、行動に表

れるようにしないといけないと思います。まさしく人財だと思います。」と。さらに「技術開発やモノづくりは、手間と時間をかけるしかありません。また、技術の伝承に時間を要することもあります。種をまいても、水もやらず、日にも当てずでは、枯れるしかないわけです。失敗もあるし、苦勞もある。」と述べている。

上述の、技能五輪は、正式には国際技能競技大会という。この大会は、1950年にスペインの職業青年団が提唱して、隣国ポルトガルとの間で、競技を競ったことにその源を発している。大会の目的として、参加各国における職業訓練の振興と、青年技能者の国際交流や親善を図ることが挙げられる。日本からも出場しており、2007年静岡県沼津市において開催された、第39回国際技能競技大会においては、メダル24個を獲得し、金メダル獲得数では16個で、世界一位に輝いた。溶接や構造物鉄工・建築大工・洋菓子製造などの、さまざまな職種で技が競われた。

特に抜き型と呼ばれる金型の部に参加した22歳の若者は、勤務する会社に於いて6年間技能を磨いてきた。この間は、実際の作業工程に入ることなく、ひたすら技能を磨いてきた。実際にドリルなどの機械を操作する際には、金属の削りくずや機械の音を聞いての微妙な操作を行っている。

ポリメカニクスと呼ばれる精密機器組み立ての部に出場した若者は、セイコーエプソンという精密機械メーカーの社員である。同社では、「ものづくり塾」という修業の場を設けて技能の伝承を行っている。今回出場した若者も、「ものづくり塾」において修業をしてきた11人のなかの1人である。同社取締役会長の草間三郎は、今日では、企業の生産拠点が海外にシフトしており、日本国内においての生産活動が希薄になってきていることを指摘し、今後のことを考えるとき、ものづくりの伝承の必要性を語っている。第46回大会の結果は以下のようになっている²⁰。

第46回2022年

日本を含む15の国・地域による分散開催 出場選手59人、金8銀5銅5 1位中国(21)、2位韓国(11)、3位日本(8)
--

(https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_29342.html)

実際に行った聞き取り調査のなかで、文書化・マニュアル化できる部分の文書化・マニュアル化の重要性も指摘されている。そしてなお、機械化・自動化の時代であっても、高度な技能が必要であることを明らかにした。

同じマニュアルからすべての状況に対応することはできない。つまりマニュアルを基礎に、状況を見極め判断し、仕事を遂行することが求められる。身体化された文化資本は、専門的な知識理解と実践経験に基づいて、熟達した結果として、さらには失敗し苦勞を重ねた結果として、彼らの頭の中に、独自の判断基準が確立される。いわゆるベテランの知恵

の確立である。小関智弘が語っている、「記号や数値で表現することのできる技術とはちがって、技能は常に人の体温と共に存在している」²¹ とのことは、特に考えさせられることばである。

株式会社福井銀行は2022年3月に、株式会社日本政策投資銀行との共同調査「福井県鯖江市における眼鏡産業の維持・発展に向けた提案」において次のように提案している。

- ・国内の眼鏡枠出荷額の9割以上は福井県により担われる。しかしながら、福井県において眼鏡枠製造の中核を担う鯖江市においては、2003年以降、眼鏡関連事業所数及び従業者数が減少傾向にあり、特に完成品製造業やロー付け・研磨加工等の中間加工業にて減少が目立つ。背景には、後継者不足や中国製眼鏡の競争力が強くなったことが考えられる。
- ・産地でのインタビューによると、競争力が劣る企業の淘汰が進んだため、現在も経営を続けている企業は一定の強みを有しており、生産性は高まっているとの見方も聞かれた。しかしながら、今後も眼鏡産業を維持するためには、事業所数や従業員数の減少傾向に歯止めをかけることが必要だと考えられる²²。

ここでも、後継者不足や従業員数の減少傾向という指摘がある。眼鏡産業の現状を見ても、事業所数や製造品出荷額など、量的に縮小傾向にあることは間違いのない事実である。

鯖江の眼鏡産業を取り巻く市場環境は、次第に厳しくなり、自助努力だけでは対応できない事態も多く生起している。鯖江の眼鏡産業の歴史は長く、これまで、さまざまな市場環境の影響を受け、現在も受け続けている。鯖江の眼鏡産業は、各工程を専門の工場が担う分業制が主流である。眼鏡は完成までの工程数は200以上に及び、一つひとつの専門性が高い。

今回は、技能に焦点を絞り考察した。つまりは身体化された文化資本としての技能こそが、これからの時代にはますます必要である。技能を持つ人々が地域で安心して暮らし、新たな生産物を生み出す環境が存在することが眼鏡産業の振興、ひいては、地域経済の持続的発展につながる。

謝辞

本研究に対して、ヒヤリングおよび資料収集について、福井県鯖江市の株式会社田中眼鏡社長の田中幹也氏には多大なるご協力をいただいた。今日の眼鏡産業の状況や眼鏡産業振興に関して独自の考えを現場の視点から語っていただいた。ここに記して感謝したい。

注

- 1 <https://resemom.jp/article/2017/04/11/37546.html> (2023.9.25 検索)
- 2 石井洋二郎 (1993) 『差異と欲望』藤原書店 p. 27
- 3 同書 p. 34
- 4 浅井紀子 (2006) 『モノ作りのマネジメント』中央経済社 p. 81
- 5 同書 p. 81
- 6 猪木武徳 (1993) 「経済と暗黙知」『リーディングス 日本の企業システム』第3巻『人的資源』有斐閣 p. 105
- 7 同書 pp. 105–106
- 8 稲田勝幸 (2007) 「2007年問題と技能伝承」『修道商学』第47巻 pp. 14–15
- 9 同書 p. 15
- 10 小関智弘 (2003) 『職人ことばの「技と粋」』東京書籍 p. 10
- 11 紺野登 (1998) 『知的資産の経営』日本経済新聞社 p. 79
- 12 稲田勝幸 前掲書、pp. 16–17
- 13 小池和男、中馬宏之、大田聡一 (2001) 『もの造りの技能』東洋経済新報社 p. 1
- 14 同書 p. 1
- 15 紺野登 前掲書 pp. 81–82
- 16 同書 p. 164
- 17 浅井紀子 (2002) 『スキルの競争力』中央経済社 pp. 97–98
- 18 同書 p. 90
- 19 『福井新聞』2007年10月20日号
- 20 https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_29342.html (2023.10.24 検索)
- 21 小関智弘 前掲書 p. 185
- 22 https://www.fukuibank.co.jp/press/2022/report_dbj_sabae.pdf (2023.9.6 検索)

参考文献・資料

- ・浅井紀子 (2002) 『スキルの競争力』中央経済社
- ・浅井紀子 (2006) 『モノ作りのマネジメント』中央経済社
- ・飯田辰彦 (2004) 『匠たちの系譜』河出書房新社
- ・石井洋二郎 (1993) 『差異と欲望』藤原書店
- ・井上理津子 (2023) 『師弟百景 “技” をつないでいく職人という生き方』辰巳出版
- ・池上 惇、小暮宣雄、大和 滋 (2000) 『現代のまちづくり』丸善ライブラリー
- ・石倉洋子 (2003) 『日本の産業クラスター戦略』有斐閣
- ・稲田勝幸 (2007) 「2007年問題と技能伝承」『修道商学』第47巻
- ・猪木武徳 (1993) 「経済と暗黙知」『リーディングス 日本の企業システム』第3巻『人的資源』有斐閣
- ・今村仁司・福井憲彦・塚原史・港道隆 (1990) 『実践感覚2』みすず書房
- ・岡田知弘 (2012) 『地域づくりの経済学入門——地域内再投資力論』自治体研究社
- ・門脇 仁 (2003) 『熟練技能をナレッジ化せよ』日刊工業新聞社
- ・小池和男、中馬宏之、大田聡一 (2001) 『もの造りの技能』東洋経済新報社
- ・小関智弘 (2003) 『職人ことばの「技と粋」』東京書籍

- ・小峰隆夫 (2007) 『人口減少社会の人づくり』日本経済評論社
- ・紺野登 (1998) 『知的資産の経営』日本経済新聞社
- ・産経新聞経済部 (2003) 『達人の世界』産経新聞社の本
- ・塩野米松 (2007) 『最後の職人伝』平凡社
- ・志村幸雄 (2001) 『技術立国・日本の原点』アスペクト
- ・関 満博、及川孝信 (2006) 『地域ブランドと産業振興』新評論
- ・関 満博 (2007) 『地域産業振興の人材育成塾』新評論
- ・関 満博、富沢木実 (2000) 『モノづくりと日本産業の未来』新評論
- ・西田 安慶 (2003) 「わが国眼鏡産業の現状と今後の展望 —— 福井産地を中心として ——」『東学学園大学学術研究紀要』第8巻第1号
- ・橋本久義 (2000) 『町工場の底力』PHP 研究所
- ・吉田秀明 (2006) 『ものづくり・ひとづくり』法律文化社
- ・NHK (2003) 「ジャパンインパクト」プロジェクト編『ジャパンインパクト』NHK
- ・Bourdieu, P. (1980) 『Le sens pratique. — Les editions de minuit —』
- ・<https://www.nippon.com/ja/views/b00601/> (2023.10.24 検索)
- ・https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_29342.html (2023.10.24 検索)

瀧波 慶信 (y_takinami@hokuyo.ac.jp)

中国語非母語話者による中国語の方言のイメージ

— 中国語学習歴のある日本語母語話者を対象とした聴取調査から —

陳 曦
北洋大学

Non-Native Speaker's Evaluations of Chinese Dialects:
— Auditory Survey of Native Japanese Speakers Studying Chinese —

CHEN Xi
Hokuyo University

Abstract

This study focuses on pleasantness to the ear of some Chinese dialects based solely on their phonetic features. Specifically, this study conducted an auditory experiment, in which native Japanese speakers who had studied Standard Chinese listened to sentences in 18 Chinese dialects and evaluated their degree of pleasantness to the ear.

The experiment revealed that the respondents felt more comfortable listening to dialects from southeast China than others, and that there were considerable differences in their evaluation of the subdialects of Mandarin Chinese, which is a dialect spoken in northeast China.

In addition, the results were compared with those of a previous study, in which native Chinese speakers evaluate some Chinese dialects, revealing that the evaluation of pleasantness to the ear was different between native Chinese and Japanese speakers. This fact suggests that knowledge of the social background of dialects influences listeners' auditory evaluation.

1. はじめに

1.1. 研究背景

人々は特定の言語・方言に対して特定のイメージを持つ、ということが知られている。例えば、日本では、フランス語は「美しい」、中国語は「騒々しい」、英語は「かっこいい」などと言われることがある。実際、宮本（2008）の日本人大学生に対する言語評価の調査の結果においても、7言語中、中国語は、「うるさく聞こえる」「早口」において1位、「上品」「優しい」「柔らかい」「細やか」「都会的」「静かに聞こえる」「温かい」では7位という評価順位となっている。その一方、フランス語は、「上品」「美しい」において1位、「うるさく聞こえる」において7位という結果である。また、中国語の方言についても、北方の方言は「豪快」「素朴」という評価が下される一方、南方の方言は「美しい」「柔らかい」という大まかな認識がなされることがある。このように、言語や方言に対して特定のイメージがあるのは確かであろう。

しかし、それらは純粋に音声だけで判断しているのだろうか、それともその言語を話している人・社会・文化へのイメージで判断しているのだろうか。

先行研究によると、特定の言語・方言に対するイメージには社会的な要因が関係していると言われている。実際に、冉・孫（2019）の中国語の方言のイメージに対する調査では、方言に対する印象とその方言を話す話者に対する印象との間には相関関係があり、両者を切り分けることが難しいことが明らかにされている。また、宮本（2009）も中国語諸方言の調査を例に、「言語評価にはその言語が母語として話される地域が持つ経済的地位、文化的背景や歴史的背景、心理的要因が密接に関わっている」と指摘している。

一方で、堀井（1988）は、言語に対する印象はその言語を使用する民族に対する感情、言語使用者との接触状況、風習や社会への志向などの外的条件に左右されるが、言語そのものに内在する物理的性質、機能的性質も無視できないと述べている。

音声と言語イメージとの関係を実際に調査した研究として、郡（1998）が挙げられる。この研究では17言語を対象とし、「どのくらいメロディアスであるか」を日本語母語話者に判断させている。その際、元の音声と、聞こえてくる音声が何語のものであるか直接わからないように処理した「フィルター音声」の2種類の音声を使用している。その結果、例えばフランス語は、元の音では最もメロディアスであるという評価であったが、フィルター音声では5位であった。このことは、言語に対する言語外的なイメージを排除し音声のみをもとに判断した場合、評価が異なることを意味している。

以上のように、言語に対するイメージについての研究はあるが、社会的なイメージを排除し音声のみをもとに評価した場合の聴覚印象・言語イメージについてはほとんど研究されていない。

1.2. 本稿の目的

本研究は音声の聴取の面から中国語各方言に対する非母語話者の聴覚印象を調べる。中

国語の方言について知識のない話者にとって、中国語諸方言の音声のみをもとに、それぞれの方言に対してどういった印象と評価があるのか、方言間に差があるのか、また、そうした印象・評価は中国語諸方言に対して様々な知識やイメージを持っている中国語母語話者とどんな共通点・相違点があるのか、を明らかにしたい。

2. 研究方法

2.1. 調査用音声

聴取調査は『現代漢語方言音庫（現代汉语方言音庫）』（侯精一（編））所収の諸方言の「北風と太陽」の音声を用いて行われた。具体的に調査に使用した方言は表1に示す18方言である。

表1 聴取調査に使用した方言および音声の収録時期

方言区分		『現代漢語方言音庫』の音声での名称	音声の収録時期
1	官話方言	① 北京	1998年8月
2		② 哈爾濱	1997年8月
3		③ 鄭州	1998年6月
4		④ 成都	1997年10月
5		⑤ 太原	1998年10月
6		⑥ 歙県	1997年4月
7	呉方言	① 上海	1993年8月
8		② 蘇州	1995年9月
9	粵方言	① 広州	1995年2月
10		② 香港	1999年3月
11	閩方言	① 台北	1999年4月
12		② 廈門	1995年10月
13		③ 福州	1996年6月
14	湘方言	① 長沙	1996年11月
15		② 湘潭	1997年5月
16	贛方言	南昌	1997年7月
17	客家方言	① 梅県	1997年7月
18		② 桃園	1999年6月

また、今回調査した18方言について、聴覚的印象に影響する可能性のある音声的特徴を、『現代漢語方言音庫』（侯精一（編））に基づいて、表2にまとめている。

表2 今回調査した18方言の音声的特徴
 (『現代漢語方言音庫』(侯精一(編))に基づく)

方言	声調の種類	声母の種類	そり舌音の有無	有声阻害音の有無	韻母の種類	鼻音韻尾の種類	閉鎖音韻尾の有無	成節子音の有無	鼻母音の有無
北京	4 陰平 55 陽平 35 上声 214 去声 51	22	あり	なし	38	2 (n ŋ)	なし	なし	なし
哈爾濱	4 陰平 44 陽平 24 上声 213 去声 53	22	あり	なし	38	2 (n ŋ)	なし	なし	なし
鄭州	4 陰平 24 陽平 42 上声 53 去声 312	22	あり	なし	42	2 (n ŋ)	なし	なし	なし
成都	4 陰平 55 陽平 31 上声 53 去声 13	20	なし	なし	36	2 (n ŋ)	なし	なし	なし
太原	5 平声 11 上声 53 去声 45 陰入 2 陽入 54	21	なし	あり (v z y)	36	1 (ŋ)	あり (?)	なし	あり
欽県	6 陰平 31 陽平 44 上声 35 陰去 324 陽去 22 入声 21	19	なし	なし	40	0	あり (?)	あり (m ŋ)	あり
上海	5 陰平 53 陰去 35 陽去 13 陰入 5 陽入 1	28	なし	あり (b v d z dz z g fi)	43	2 (n ŋ)	あり (?)	あり (m ŋ ŋ)	あり
蘇州	7 陰平 55 陽平 13 陰上 51 陰去 513 陽去 31 陰入 5 陽入 3	27	なし	あり (b v d z dz z g fi)	49	2 (n ŋ)	あり (?)	あり (m ŋ ŋ)	あり

方言	声調の種類	声母の種類	そり舌音の有無	有声阻害音の有無	韻母の種類	鼻音韻尾の種類	閉鎖音韻尾の有無	成節子音の有無	鼻母音の有無
広州	9 陰平 53/55 陽平 21 陰上 35 陽上 23 陰去 33 陽去 22 上入 5 中入 3 陽入 2	20	なし	なし	53	3 (n ɲ m)	あり (p t k)	あり (m ɲ)	なし
香港	9 陰平 55 陽平 21 陰上 35 陽上 13 陰去 33 陽去 22 上入 5 中入 3 陽入 2	20	なし	なし	53	3 (n ɲ m)	あり (p t k)	あり (m ɲ)	なし
台北	7 陰平 44 陽平 24 上声 53 陰去 11 陽去 33 陰入 32 陽入 44	14	なし	あり (b g)	67	3 (n ɲ m)	あり (p t k ?)	あり (m ɲ)	あり
厦門	7 陰平 55 陽平 35 上声 53 陰去 21 陽去 22 陰入 32 陽入 5	17	なし	あり (b g)	82	3 (n ɲ m)	あり (p t k ?)	あり (m m ? ɲ ɲ ?)	あり
福州	7 陰平 44 陽平 53 上声 32 陰去 212 陽去 242 陰入 23 陽入 5	15	なし	なし	46	1 (ɲ)	あり (?)	なし	なし
長沙	6 陰平 33 陽平 13 上声 41 陰去 55 陽去 11 入声 24	23	あり	なし	41	2 (n ɲ)	なし	あり (m ɲ)	あり

方言	声調の種類	声母の種類	そり舌音の有無	有声阻害音の有無	韻母の種類	鼻音韻尾の種類	閉鎖音韻尾の有無	成節子音の有無	鼻母音の有無
湘潭	6 陰平 33 陽平 12 上声 42 陰去 55 陽去 21 入声 24	29	あり	あり (b d dz dz dz g ɦ)	37	1 (n)	なし	あり (m)	あり
南昌	7 陰平 42 陽平甲 24 陽平乙 45 上声 213 去声 21 陰入 25 陽入 22	19	なし	なし	65	2 (n ŋ)	あり (ʔ)	あり (m ŋ ŋ)	なし
梅県	6 陰平 44 陽平 11 上声 31 去声 53 陰入 1 陽入 5	17	なし	なし	73	3 (n ŋ m)	あり (p t k)	あり (m ŋ)	なし
桃園	6 陰平 24 陽平 11 上声 31 去声 55 陰入 22 陽入 55	21	なし	あり (v)	60	3 (n ŋ m)	あり (p t k)	あり (m ŋ ŋ)	なし

2.2. 調査対象者

中国語の各方言については、少なくとも中国大陸部では普通話が標準変種として社会的に威信がある。中国語母語話者は、中国語が使われている社会で育つ中で普通話および各方言に対して固有の言語印象を形成していくため、中国語母語話者は純粋に音声的特徴のみをもとに各方言の聴覚印象を評価することが難しい。

そこで、本研究では中国語非母語話者を聴取調査の対象者とする。中国語の方言に関する知識のない中国語非母語話者には、中国語の各方言がどのように聞こえ、各方言に対してどのような言語評価をするのかを解明する。

今回は中国語を学習したことのある日本語母語話者に対して調査を行った。北海道・沖縄県・兵庫県で生まれ育った19～36歳の10名が参加した。調査協力者の情報を表3に示す。

表3 調査協力者の情報

	調査協力者	年齢	第一言語を身につけた場所	中国語（普通話）の学習歴
1	OM	21	沖縄県	2年半
2	SN	20	北海道	半年
3	SR	21	北海道	3か月
4	SJ	21	北海道	2年
5	TK	21	北海道	2年
6	HM	20	北海道	2年半
7	KS	19	北海道	1年8か月
8	UN	36	兵庫県	1年
9	DA	20	北海道	半年
10	SI	20	北海道	半年

2.3. 聴取調査

計18方言の音声をランダムな順で1音声につき1回聞かせ（文字・音声記号・日本語訳を提示せず）、その方言の聞き心地の程度を4段階（1.非常に聞き心地が悪い 2.やや聞き心地が悪い 3.やや聞き心地が良い 4.非常に聞き心地が良い）で評価してもらった。

3. 結果と考察

今回は18方言の聞き心地の程度について、10名の調査協力者に評価してもらったため、総評価回数は $18 \times 10 = 180$ 回となる。

3.1. 各方言に対する評価

各方言音声における聞き心地の程度の評価の分布を図1に示す。また、図2は評価点数

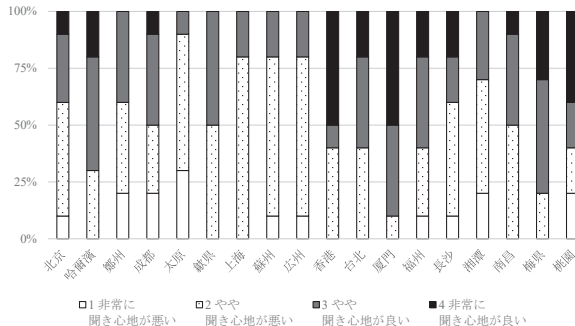


図1 各方言音声の聞き心地の程度の評価の分布

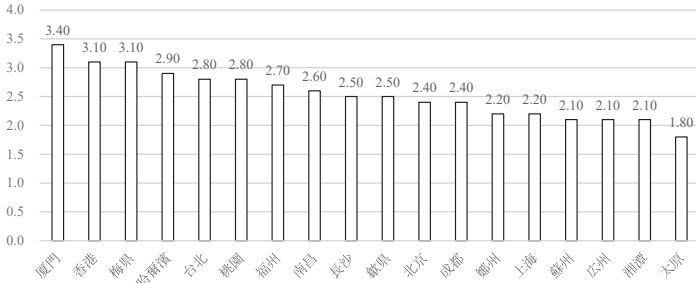


図2 各方言音声の聞き心地の程度の評価点数の平均値

の平均値を高い順に表している。評価点数は「1. 非常に聞き心地が悪い」「2. やや聞き心地が悪い」「3. やや聞き心地が良い」「4. 非常に聞き心地が良い」をそれぞれ、1、2、3、4点に換算している。そして、18方言の聞き心地の程度の評価点数の平均値に基づいた順位を表4にまとめた。

18方言の中で最も聞き心地が良いという評価を得たのは廈門方言であった。廈門方言は閩方言に所属しているが、閩方言に属している3方言については、廈門方言(1位)と台北方言(5位)は上位グループ、福州方言(7位)は中間グループにあり、すべて順位の前半に

表4 18方言の「聞き心地の程度」の評価の平均値と順位

	順位		評価の平均値
上位グループ	1	廈門	3.40
	2	香港 梅鼎	3.10 3.10
	4	哈爾濱	2.90
	5	台北 桃園	2.80 2.80
中間グループ	7	福州	2.70
	8	南昌	2.60
	9	長沙 歙鼎	2.50 2.50
	11	北京 成都	2.40 2.40
下位グループ	13	鄭州 上海	2.20 2.20
	15	蘇州 広州 湘潭	2.10 2.10 2.10
	18	太原	1.80

あった。

同率2位となったのが香港方言と梅県方言であった。梅県方言と同じく客家方言に属している桃園方言(5位)も上位グループにあった。ただ、同じく粵方言に所属している、香港方言(2位)と広州方言(15位)とでは評価が大幅に離れている。この点について、今後さらに検討する必要がある。4位となったのが哈爾濱方言であった。今回使用した6つの官話方言のうち、哈爾濱方言のみが上位グループにあり、他の5方言については、歙県方言(9位)と北京方言(11位)と成都方言(11位)は中間グループ、鄭州方言(12位)と太原方言(18位)はが下位グループにあった。このように、官話方言の内部で評価の差が大きかった。

最下位は太原方言(18位)であった。最下位から2番目は蘇州方言、広州方言、湘潭方言であった(15位)。蘇州方言と同じく呉方言に所属している上海方言も13位と下位グループにあった。また、湘潭方言と同じく湘方言に所属している長沙方言も9位と中間グループにあった。そして、南昌方言は8位と中間グループにあった。

聴取調査で収集したこの18方言の聞き心地評価のデータに対して、聞き心地評価に影響する可能性がある音声特徴(表2)のうち、そり舌音(RetroflexPresence)の有無、有声阻害音(VoicedObstruentPresence)の有無、閉鎖音韻尾(StopCodaPresence)の有無、成節子音(SyllabicConsonantPresence)の有無、鼻母音(NasalVowelPresence)の有無(いずれも有りを1、無しを0とする)を固定効果、方言の番号(Language)と調査対象者(Speaker)をランダム効果とする一般化線形混合モデルを作成した。パラメータ推定には統計ソフトウェアRのlmer関数を用いた。以下の(1)にRにおけるモデルの構成を示す。Scoreは自然度評価の点数、LanguageIDは方言の番号、SpeakerIDは調査対象者番号を表す。

$$(1) \text{ lmer} (\text{Score} - \text{RetroflexPresence} + \text{VoicedObstruentPresence} + \text{StopCodaPresence} + \text{SyllabicConsonantPresence} + \text{NasalVowelPresence} + (1|\text{LanguageID}) + (1|\text{SpeakerID}), \text{data})$$

推定結果を表5に示す。

表5 非融合発音と融合発音それぞれの一般化線形混合モデルのパラメータの推定結果

	推定値	標準誤差	t値	P値
RetroflexPresence	0.1214	0.4243	0.286	0.7795
VoicedObstruentPresence	-0.5384	0.2117	-2.544	0.0186*
StopCodaPresence	0.1201	0.4330	0.277	0.7861
SyllabicConsonantPresence	0.3508	0.2370	1.480	0.1637
NasalVowelPresence	-0.0658	0.2217	0.297	0.7709

表5から、聞き心地評価に対して、5つの固定効果のうち、有声阻害音

(VoicedObstruentPresence) の効果は有意水準 5% で有意差が認められ、聞き心地評価の点数に有意に寄与することを示している。推定値がマイナスであることから、有声阻害音がある方言より、有声阻害音がない方言のほうが聞き心地の評価が高いことがわかる。

図3と図4はそれぞれ、有声阻害音無しの方言(12方言)及び有声阻害音有りの方言(6方言)の聞き心地評価の平均値、有声阻害音無しの方言(12方言)及び有声阻害音有りの方言(6方言)の聞き心地評価の分布を表している。いずれの図からも、有声阻害音のない方言のほうが聞き心地の評価が高いことが窺える。

以上のように、中国語学習歴のある日本語母語話者にとって、有声阻害音がない方言の方が聞き心地が良いことが示唆された。

川原(2017)によると、有声阻害音は汚いイメージがある。今回の結果も、こうしたイメージによるものではないかと考えられる。

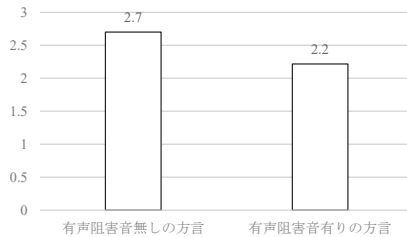


図3 有声阻害音無しの方言(12方言)及び有声阻害音有りの方言(6方言)の聞き心地評価の平均値

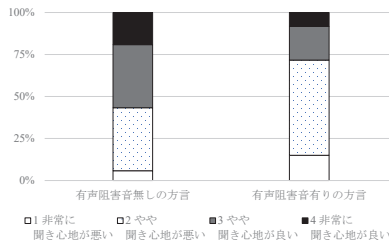


図4 有声阻害音無しの方言(12方言)及び有声阻害音有りの方言(6方言)の聞き心地の程度の評価の分布

3.2. 七方言別に見た場合

中国語の方言について、「七方言」や「十方言」などいくつかの分け方がある。本研究では、官話方言、吳方言、粵方言、閩方言、湘方言、贛方言、客家方言の「七方言」という考え方を採用する。

「七方言」による、中国語方言の分布のイメージ図を図5に掲載する。

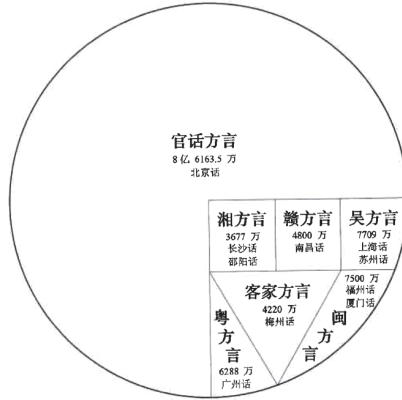


図5 中国語方言の分布のイメージ図(李・項(2020)のp.15の図3)

七方言の考え方で今回の調査に使用している18方言を分類した場合、各方言における聞き心地の程度の評価点数の分布を図6に示す。また、図7は評価点数の平均値を高い順に表示している。

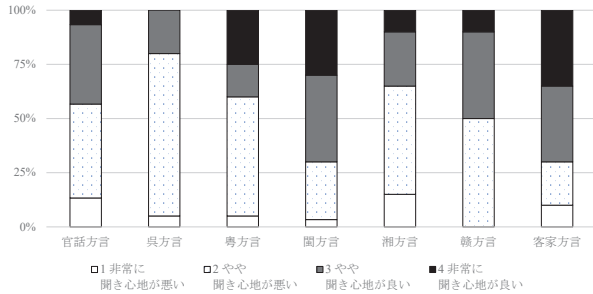


図6 七方言別の音声の聞き心地の程度の評価の分布

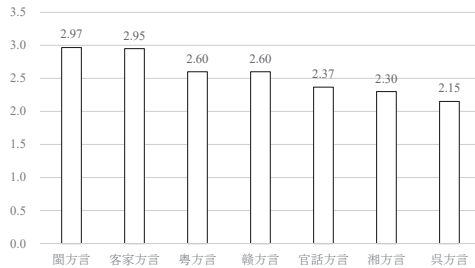


図7 七方言別の音声の聞き心地の程度の評価点数の平均値

七方言別で見ると、聞き心地の程度の評価点数の平均値は上から順番に、閩方言、客家方言、粵方言・贛方言、官話方言、湘方言、吳方言となった。

方言の地理的分布については、図7の順位と図5の方言分布図を併せて見ると、全体的には東南部で話されている方言は、日本語母語話者にとって聞き心地が良いという傾向があるようである。

3.3. 冉后斌・孙越 (2019) との比較

冉・孙 (2019) は、中国語の8つの方言 (普通話、瀋陽方言、鄭州方言、上海方言、成都方言、広州方言、台北方言、長沙方言) の「聞き心地の良さ (好聴度)」について中国語母語話者を対象に聴覚調査を行った。具体的には、聴取調査の協力者は8つの方言の音声を聞いてから、8方言の中から最も聞き心地の良い方言 (1つのみ) を選ぶ形であった。なお、聴取調査に用いられた音声は同一内容の短い会話 (2人) の各方言バージョンであった。冉・孙 (2019) の結果を表6に示す。8つの方言のうち、広州方言が1位であり、長沙方言が最下位であった。

表6 冉・孙 (2019) の聴取調査の結果

順位	方言	当該方言を「一番聞き心地の良い方言」と判断した割合
1	広州	30.2%
2	普通話	17.7%
3	瀋陽	12.5%
4	上海	11.4%
5	鄭州	11.2%
6	台北	6.9%
7	成都	6.4%
8	長沙	3.7%

本研究の聴取調査における、冉・孙 (2019) の使用している8方言の「聞き心地の程度」評価の平均値を表7に示す。ただし、本研究で用いた『現代漢語方言音庫』には、普通話と瀋陽方言の音声が含まれていない。冉・孙 (2019) における普通話に北京方言・哈爾濱方言が最も似ており、冉・孫 (2019) における瀋陽方言に哈爾濱方言が最も似ていると考えられるため、表7には北京方言と哈爾濱方言の結果を示している。

冉・孙 (2019) の結果と今回の調査の結果を比較してみる。

まず、相違点について見ていく。最も大きな違いは、広州方言は冉・孫 (2019) では1位であった一方、今回の調査では最下位であった¹。その他の相違点として、冉・孫 (2019) では長沙方言と成都方言がそれぞれ最下位と後ろから2番目であったが、今回の調査ではそ

表7 本研究の聴取調査における、冉・孫(2019)の
使用している(あるいは似ていると思われる)
8方言の「聞き心地の程度」の評価の平均値と順位

順位	方言	評価の平均値
1	哈爾濱	2.90
2	台北	2.80
3	長沙	2.50
4	北京 成都	2.40 2.40
6	鄭州 上海	2.20 2.20
8	広州	2.10

れほど評価が低いわけではなく、それぞれ3位と4位となった。そして、冉・孫(2019)では台北方言が6位であったが、今回の調査では大幅に順位が上がり、2位となった。また、上海方言は冉・孫(2019)では順位が上位グループにあったが、今回の調査では順位が下位グループにあった。

次は、共通点について見ていく。共通点は以下の(2)の2点が挙げられる。

(2) 冉・孫(2019)と本研究の結果の共通点：

- a. 普通話(および普通話に似ていると思われる哈爾濱方言、北京方言)と瀋陽方言(および瀋陽方言に似ていると思われる哈爾濱方言)は順位が上の方にある。
- b. 鄭州方言がやや下の方にある。

なお、冉・孫(2019)と本研究が使用している『現代漢語方言音庫』の音声の大きな相違点は、(3)に示されている、スタイルと音声の収録時期の2点が考えられる。これらが何らかの形で調査の結果に影響している可能性は否めない。

(3) 冉・孫(2019)と本研究の使用音声の相違点：

- a. スタイル：
 - ・冉・孫(2019)：会話(道を尋ねる場面、普通話で書かれた台詞をもとに方言話者が方言に直して発音)(2人による・日常的)
 - ・『現代漢語方言音庫』：朗読(各方言による『北風と太陽』)(1人による・やや固い)
- b. 音声の収録時期：
 - ・冉・孫(2019)：2019年あたり(比較的新しい)
 - ・『現代漢語方言音庫』：1993～1999年(やや古い)

このように、聴取調査の参加者が中国語の各方言の社会的背景などについて知識がほぼない日本語母語話者と、中国語の各方言の社会的背景などについて知識を持っている中国語母語話者とは、聞き心地の評価が異なることが分かった。

3.4. 官話方言の内部に注目した場合

3.2 で見たように、七方言の考え方で今回調査した 18 方言を分類した場合、官話方言は評価が 7 方言中 5 位と中間的な位置に位置している。しかし、3.1 で見たように、官話方言の内部で評価の差が大きかった。

そこで、官話方言の内部に注目してみる。表 8 は今回調査した 6 つの官話方言の評価点数の平均値を高い順に表示している。

聞き心地の程度の評価点数の平均値は上から順番に、哈爾濱方言、欽県方言、北京方言・成都方言、鄭州方言、太原方言となった。

表 8 調査した 6 つの官話方言の「聞き心地の程度」の評価の平均値と順位

順位	18 方言中の順位	方言	評価の平均値
1	4	哈爾濱	2.90
2	9	欽県	2.50
3	11	北京	2.40
	11	成都	2.40
5	13	鄭州	2.20
6	18	太原	1.80

哈爾濱方言が 6 方言の中で 1 位となったという結果について、調査協力者の感想によると、哈爾濱方言の音声は普段聞く中国語教科書の音声である普通話と一番似ていることが影響している可能性がある。また、太原方言が最下位となったという結果について、調査協力者の感想によると、太原方言は短い間に音の上げ下げが激しいことと関係がある可能性がある。

4. まとめ

本研究は言語の音声的特徴のみをもとに各方言の聴覚印象を評価する場合の言語評価に焦点を当てた。具体的には、中国語学習歴のある日本語母語話者を対象に、中国語の 18 方言の音声を聞いてどのくらい聞き心地が良いかを判定する聴覚調査を行った。

その結果、中国東南部で話されている方言は、日本語母語話者にとって聞き心地が良いという傾向があること、官話方言の内部で評価の差が大きいことがわかった。

また、中国語母語話者を対象とした先行研究と比較した結果、聞き心地の評価が異なることがわかった。このことから、各方言（言語）の社会的背景などについて知識があるか否

かが、聴覚印象に影響していることが示唆された。

5. 今後の課題

今後は中国語学習歴のない日本語母語話者にも調査を行い、今回の中国語学習歴のある日本語母語話者の結果と比べて検討したい。

また、調査に使用した音声の音声の特徴、主にピッチレンジ、文レベルのピッチの動き、文の終わりのピッチの動きなどについて、音響分析を通して調べていく予定である。

さらに、評価者の母語によって評価が異なることが考えられるため、日本語母語話者のみならず、さまざまな言語を母語とする話者に対しても調査を行いたい。母語を問わず聴覚印象に影響する音声の特徴があるのであれば、それはどんなものであるかを明らかにする。

謝辞

調査にご協力いただいた皆様ならびにこの研究を始めるきっかけを提供してくださったゼミの皆様へ御礼申し上げます。本研究はJSPS科研費21K13018の助成を受けたものです。

注

- 1 ただし、同じ粵方言に所属している香港方言は評価の平均値が3.13と非常に高い。

参考文献

- 川原繁人 (2017) 『「あ」は「い」より大きい!? : 音象徴で学ぶ音声学入門』ひつじ書房。
 郡史郎 (1998) 「最もメロディアスな言語」, 『言語』27 (5), 18–21。
 堀井令以知 (1988) 「語感・言語意識・言語感覚」, 『日本語学』7 (8), 4–10。
 宮本大輔 (2008) 「日本人学生の言語評価 — 神奈川大学で行った予備調査に基づいて —」, 神奈川大学大学院外国語学研究所『言語と文化論集』14, 51–74。
 宮本大輔 (2009) 「中国人の言語評価 — 北京・天津・上海・杭州の大学生を対象に —」, 『社会言語科学会『社会言語科学』11 (2), 55–68。
 侯精一 (編) (1994–1998) 現代汉语方言音庫, 上海教育出版社。
 李小凡・項夢冰 (2020) 汉语方言学基础教程 (第二版), 北京大学出版社。
 冉启斌・孙越 (2019) 语言印象与语言态度 — 8种汉语方言好听度的调查分析 —, 中国语音学报 12, 92–103。

陳 曦 (g_chin@hokuyo.ac.jp)

日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語について

馮 一峰
北洋大学

On Syntactic Reduplication in Japanese and Noun Reduplication in Hokkien

FENG Yifeng
Hokuyo University

提要

本文在简单地回顾了日语结构性重叠式和闽南语名词重叠式的基本特征的基础之上，针对闽南语名词重叠式的特征进行了重新审视。另外，本文将日语结构性重叠式和闽南语名词重叠式进行了简单的比较，阐明了两者之间的异同。两者的语义功能基本相同，基式受到的语义限制也基本相同。除此之外，两者之间也存在类似的句法特征。但是，两者之间也存在很多差异。首先两者的形态特征不同，其次闽南语名词重叠式和日语结构性重叠式的基式还受到不同的音韵上的限制，另外闽南语当中还存在日语当中观察不到的“AAA”式名词重叠式，闽南语的名词重叠式与日语结构性重叠式的形成过程也基本不同。

1. はじめに

日本語と中国語においては、様々な重複語があり、それについての研究が多くなされている。名詞重複語の意味的特徴に関しては、基本的に複数性を含意するとよく指摘されている。

- (1) a. 山々、木々、人々、家々
- b. 彼は、月々5万円で暮らしている。
- c. ヨーロッパの国々では失業率が高い。

(田村 1991: 43-44)

田村(1991)は、日本語の名詞重複語が複数性を含意する場合、(1a)のように不特定多数指示機能を果たすこともでき、(1b, c)のように個別性指示機能を果たすこともできると主張している。また、この二つの機能は独立したものというよりは相補的なものであり、片方の意味が強くなれば、もう片方の意味が表向き弱くなると指摘している。

しかしながら、大塚(2021)、小野(2015)、清海(2020)、定延(2015)、徐(2016)では、日本語では複数性を含意しない「XXした/している」の形をとる構文的重複語があると指摘されている。¹

- (2) a. 女の子の子した女
- b. 子供子供する女
- c. このスープ、野菜野菜してるね。
- d. 大阪大阪した街並み

(小野 2015: 463 一部改変)

(2)に示すように、日本語の構文的重複語の語基となっているのは、主に名詞または名詞句であり、語基の重複は、「した/している」が付加する場合のみ容認される。構文的重複語の意味機能に関しては、藤田・馮(2023)は先行研究を踏まえて再検討を行い、構文的重複語は基本的に語基が表している意味の典型性を高める役割を果たしていると主張しており、「モノを表す名詞」が語基となる構文的重複語の場合、モノの量が話者の想定した量を超えていることを意味することもできると主張している。形態的特徴と意味的特徴から見れば、構文的重複語が一般的な名詞重複語と大きく異なっていることが分かる。

一方、馮・藤田(2023)は、標準中国語では日本語の構文的重複語に類似しているものが観察されないと指摘している。(3)に示すように、「XX着」の形をとる名詞重複語は、標準中国語において容認されない。²したがって、馮・藤田(2023)は、日本語の構文的重複語を標準中国語に訳す場合、重複語という形で訳すことができないため、ほかの可能な限り近い意味を持つ表現を用いて訳す必要があると主張している。

- (3) a. * 女孩儿女孩儿着女人³ (訳例)⁴
 b. * 小孩儿小孩儿着女人 (訳例)
 c. * 这个汤蔬菜蔬菜着。 (馮・藤田 2023: 122)
 d. * 大阪大阪着街道 (訳例)⁵

標準中国語では、日本語の構文的重複語のような重複語が観察されないが、中国の方言の中の閩南語においては、日本語の構文的重複語に類似している意味機能を果たしている名詞重複語が観察される。⁶

- (4) a. 阿兄生遭猴猴。
 お兄さんは猿猿している。⁷
 b. 即种物件食起来水水。
 この食べ物は水水している。
 c. 米碎糜食起来沙沙。
 碎米で作られたお粥は砂砂している。
 d. 即碗面煮遭汤汤。
 この麺はスープスープしている。

(陈 2009: 80)

(4) では、名詞の「猴」(猿)、「水」(水)、「沙」(砂)、「汤」(スープ) は閩南語の名詞重複語の語基となっている。表している意味に関しては、(4a) の名詞重複語「猴猴」は、お兄さんの見た目は猿の典型性を備えていることを表している。(4b) の名詞重複語の「水水」は、食べ物に含まれる水分が多いことを表している。(4c) の名詞重複語の「沙沙」は、お粥の食感が砂の食感に似ていることを表している。(4d) の名詞重複語の「汤汤」は、麺の見た目または食感がスープに似ていることを表している。表している意味から考えれば、閩南語の名詞重複語においては、日本語の構文的重複語に類似しているものがあることが窺える。

本稿の目的は、日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語を比較し、両者の共通点と相違点を明らかにすることである。第2節では、先行研究を踏まえて日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語の特徴を概観する。第3節では、閩南語の名詞重複語の特徴を再検討する。第4節では、日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語を比較し、両者の共通点と相違点を明らかにする。第5節では、本稿の結論をまとめる。

2. 先行研究

2.1. 日本語の構文的重複語の特徴

構文的重複語の形態的特徴について、小野 (2015) は、構文的重複語の語基の重複は、「し

た／している」が付加する環境でのみ許されると指摘している。構文的重複語の語基となる要素について、大塚 (2021)、小野 (2015) は形式的な縛りがある一方で語基が名詞であれば構文的重複語に語彙的制限はほとんどなく生産性が極めて高いとの見解を示している。しかし、大塚 (2021)、小野 (2015) の語彙的制限がほとんどないという主張について、藤田・馮 (2023) は、大塚 (2021)、小野 (2015) の説明が不足していると指摘し、形式名詞のような実質的な意味を持たない表現、抽象概念を表す表現、時間と数量に関する表現、「万物」のようなあらゆる事物が該当する表現が構文的重複語の語基にはなれないと主張している。

構文的重複語の意味的特徴に関して、大塚 (2021) は、構文的重複語と意味的に類似している「ばい」、「らしい」との比較を行った。また、構文的重複語の語基がモノを表す名詞である場合、「たまご」などのような食べ物を表す名詞の例を挙げて「最大値、極限の多さ」を意味すると指摘している。しかし、藤田・馮 (2023) は、量的な意味を表す際に「最大値」という表現を用いる点については疑問が残ると指摘し、構文的重複語が比較の格助詞「より」と程度副詞の「最も」のような表現と共起することに基づき、構文的重複語は量的意味を表すことができるが、少なくとも「絶対的な最大値」と判定することはできないと主張している。さらに、食べ物を表す名詞が構文的重複語の語基になる場合、その食べ物の特徴をどの器官で強く感じとるかによって解釈が変わってくることを示唆した (表 1)。

表 1 食べ物を表す名詞が語基となる構文的重複語の解釈の分類と判断基準

a. 視覚情報からの判断	その食べ物を想起させる色や形状、食べ物の一部または全部が見えているなど、外見からその食べ物が話者の想定する基準値よりも多く含まれていると判断できるもの。 例：たまごたまごしているサンドイッチ
b. 味覚情報からの判断	その食べ物特有の味が強く感じられるもの。 例：アンコアンコしているあんパン
c. 嗅覚情報からの判断	その食べ物を想起させる香りが強く感じられるもの。 例：いちごいちごしている香水

(藤田・馮 2023: 148 一部改変)

構文的重複語の形成過程について、小野 (2015) は、既存の重複語の中でもオノマトペの重複語との形式的な共通性があることを指摘し、これらが構文的重複語の形成過程を考えるうえでの重要な要素の一つであると主張している。定延 (2015) は、構文的重複語について、非オノマトペの完全反復型動詞と捉えながらも、小野 (2015) と同様にオノマトペとの類似性を指摘している。徐 (2016) は、名詞重複語が擬態語的な意味を表す現象について、コーパス調査を行った。その結果、語基として人の年齢や身分と関連する名詞が、特に近代小説の中に多く使用されていることが明らかになった。この現象について、元々は名詞

重複語とオノマトペがそれぞれ独立しており、それがやがて名詞重複の形でオノマトペの意味を表すように変化したという見解は小野（2015）と一致している。しかし、藤田・馮（2023）は、構文的重複語はオノマトペから多くの影響を受けているが、後から発生してきた量的意味は通常の名詞重複語から影響を受けて発生してきたと主張している。

2.2. 閩南語の名詞重複語の特徴

陈（2009）は、標準中国語と閩南語の名詞重複語の比較を行った。赵（1979）は、標準中国語の名詞重複語はよく親族呼称に用いられると指摘している。それに対し、陈（2009）は、閩南語の名詞重複語は基本的には親族呼称に用いられず、閩南語の親族呼称は基本的に親族を表す名詞の前に「阿」を付けると指摘している。

- (5) 爸爸（お父さん）、妈妈（お母さん）、哥哥（お兄さん）（赵 1979: 107）
 (6) 阿爸（お父さん）、阿母（お母さん）、阿兄（お兄さん）（陈 2009: 80）

陈（2009）は、閩南語の名詞重複語を「AA」型、「AAA」型、「ABB」型という三つの種類に分けた。標準中国語では「AA」型名詞重複語しかないため、陈（2009）はこれが標準中国語と閩南語の名詞重複語の一つの違いであると主張している。

(7) 「AA」型

- a. 肉着煮遘胶胶则有补。
 肉は膠のように調理しなければならない。
 b. 驱风油食起来冰冰。
 ハッカ油を食べたら氷を食べたように涼しく感じる。

（陈 2009: 80）

(8) 「AAA」型

- a. 伊是阿猴猴猴。
 彼は猿のように非常に痩せている。
 b. 排阿尾尾尾。
 列の最後尾に並んでください。

（陈 2009: 81）

(9) 「ABB」型

- a. 阿嫂水吻吻。
 義理の姉はとてもきれいだ。
 b. 镜面磨遘光焱焱。
 鏡はピカピカに磨き上げられた。

（陈 2009: 81 一部改変）

陳 (2009) は、(5) のような標準中国語の「AA」型名詞重複語については語基の「A」と重複形の「AA」が表している意味はほとんど変わらないと指摘しており、(7) のような閩南語の「AA」型名詞重複語については重複形「AA」が表している意味は語基の「A」が表している意味と異なっており、内在的な関連性がないと主張している。また、名詞は重複した後、品詞が形容詞になっているという見解も示している。閩南語の「AA」型名詞重複語の意味的及び統語的特性に関しては、陳 (2009) は、閩南語の「AA」型名詞重複語はモノの状態と性質を表しており、一般的に連用修飾として、たまに連体修飾や述語として用いられると指摘している。

閩南語の「AA」型名詞重複語の統語的特性に関しては、陳 (2009) は、一般的に連用修飾として、たまに連体修飾や述語として用いられると指摘しているが、本稿は、閩南語の「AA」型名詞重複語がよく「様態補語」として用いられると考える。(4) においては、閩南語の「AA」型名詞重複語はいずれも動詞の後ろに来ており、状態や特性を表している。陳 (2009) では、閩南語の「AA」型名詞重複語の例は合計 10 例がある。そのうち、8 例の名詞重複語は「様態補語」として用いられており、80% を占めている。したがって、閩南語の「AA」型名詞重複語がよく「様態補語」として用いられると考えられる。

閩南語においては、「AA」型名詞重複語以外、(8) に示すような「AAA」型名詞重複語もある。「AAA」型名詞重複語は標準中国語においては許容されない。「AAA」型名詞重複語の意味機能について、陳 (2009) は、(8a) に示すように程度を高めることもでき、(8b) に示すように「最も」の意味を表すこともできると主張している。

(4a) の名詞重複語「猴猴」は、お兄さんの見た目は猿の典型性を備えていることを表している。(8a) の名詞重複語「猴猴猴」は彼が非常に猿に似ており、非常に痩せていることを表している。(4a) より (8a) のほうが程度は深まっている。一方、(8b) の名詞重複語「尾尾尾」は列の最後尾を表しているため、そこには「最も」の意味が含まれている。

閩南語においては、(9) に示すような「ABB」型名詞重複語も許容される。「ABB」型名詞重複語について、陳 (2009) は、よく述語や補語として用いられ、場合によって連体修飾として用いられると指摘している。⁸

陳 (2009) は、形態的な特徴に基づいて閩南語の名詞重複語を下位分類し、それぞれのタイプの名詞重複語の意味的および統語的な特徴を考察したが、閩南語の「AA」型名詞重複語の重複形「AA」が表している意味は語基の「A」が表している意味との間に内在的な関連性がないという主張には問題があると考えられる。また、閩南語の名詞重複語の語基となる要素が制限されているかどうかについて触れていなかったため、次節でこれらの問題について詳しく考察していく。

3. 閩南語の名詞重複語の再検討

3.1. 閩南語の名詞重複語の意味的特徴の再検討

まず、陳 (2009) は、(7) のような閩南語の「AA」型名詞重複語について重複形「AA」が

表している意味は語基の「A」が表している意味と異なっており、内在的な関連性がないと主張しているが、本稿は、閩南語の「AA」型名詞重複語の重複形「AA」が表している意味は語基の「A」が表している意味との間に内在的な関連性があると考ええる。

(4)と(7)では、名詞の「猴」(猿)、「水」(水)、「沙」(砂)、「汤」(スープ)、「胶」(膠)、「冰」(氷)が閩南語の名詞重複語の語基となっている。重複形が表している意味に関しては、(4a)は、お兄さんの見た目は猿の典型性を備えていることを表している。(4b)は、食べ物に含まれる水分が多いことを表している。(4c)は、お粥の食感が砂の食感に似ていることを表している。(4d)は、麺の見た目または食感がスープに似ていることを表している。また、(7a)は、肉の食感が膠に似ていることを表しており、(7b)は、ハッカ油は水のように冷たいことを表している。(4)と(7)から閩南語の名詞重複語の語基の名詞はモノを表しており、重複形が状態や特性を表していることが分かる。

閩南語の名詞重複語の語基「A」と重複形「AA」が表している意味は違うタイプであるが、語基「A」の意味と重複形の「AA」の意味との間にはまったく内在的な関連性がないわけではない。上記の意味分析から見れば、(4)と(7)の閩南語の名詞重複語が表している状態や特性はすべて名詞重複語の語基となる名詞が表している意味に基づいている。したがって、本稿は先行研究とは異なり、閩南語の「AA」型名詞重複語の重複形「AA」が表している意味は語基の「A」が表している意味との間に内在的な関連性があると考ええる。

本稿の主張が正しいと仮定した場合、閩南語の「AAA」型名詞重複語の重複形「AAA」が表している意味は語基の「A」が表している意味との間に内在的な関連性があることが予測される。(8)のような例を考察すると、この予測は正しいと考えられる。(8a)は、彼の見た目は猿の典型性を十分備えていることを表している。猿の典型性はやはり語基となる名詞「猴」が表している意味に基づいている。また、(8b)は、最後尾のことを表している。最後尾のこともやはり語基となる名詞「尾」(尾)が表している意味に基づいている。したがって、本稿は、閩南語の「AA」型、「AAA」型名詞重複語の重複形「AA」、「AAA」が表している意味は語基の「A」が表している意味との間に内在的な関連性があると考ええる。

次に、陈(2009)は、閩南語の名詞重複語が基本的に状態や特性を表していると指摘しているが、名詞重複語が表している量的意味には言及しなかった。本稿は、閩南語の名詞重複語は状態や特性を表すことができるのみならず、「モノを表す名詞」が語基となる名詞重複語の場合、モノの量が話者の想定した量を超えていることを意味することもできると考える。

(4b)の名詞重複語の「水水」は食べ物に含まれる水分が多く、話者の想定した量を超えていることを表している。同じ量的意味を表すことができる閩南語の名詞重複語は「毛毛」(毛)などのようなものがある。「毛毛」は基本的に毛の量が話者の想定した量を超えて生えていることを表している。これを踏まえて、閩南語の名詞重複語は状態や特性を表すことができるのみならず、「モノを表す名詞」が語基となる名詞重複語の場合、モノの量が話者の想定した量を超えていることを意味することもできると考えるのは妥当であると考え

られる。

最後に、本稿はモノを表す名詞が閩南語の名詞重複語の語基になる場合、そのモノの特徴をどの器官で強く感じとるかによって解釈が変わってくると考える。(4d)の可能な意味解釈に基づいて説明する。(4d)は意味的には曖昧である。話者が視覚情報から「この麺」の特徴を判断した場合、(4d)の名詞重複語の「汤汤」は麺が溶けてしまい、まるでスープのようなものになっていることを表すことができる。一方、話者が味覚情報から「この麺」の特徴を判断した場合、(4d)の名詞重複語の「汤汤」は麺が柔らかすぎてすでに麺としての食感がなく、スープのような食感になっていることを表すことができる。したがって、本稿はモノを表す名詞が閩南語の名詞重複語の語基になる場合、そのモノの特徴をどの器官で強く感じとるかによって解釈が変わってくると考える。しかし、具体的にどのような解釈になるのかについては文脈や使用場面に依存していると考えられる。

3.2. 閩南語の名詞重複語の語基となる要素の制限について

先行研究では、閩南語の名詞重複語の語基となる要素の制限について言及したものはなかった。この節では、閩南語の名詞重複語の語基となる要素の制限について見ていく。

- (10) a. *万物万物(万物)、*万事万事(万事)
 b. *爱爱(愛)、*恨恨(恨み)、*情情(感情)

(10a)では、「万物」(万物)と「万事」(万事)が閩南語の名詞重複語の語基となっている。(10a)の名詞重複語はいずれも容認されない。したがって、「万物」(万物)、「万事」(万事)のようなあらゆる事物が該当する表現が閩南語の名詞重複語の語基にはなれないと考えられる。(10b)では、「愛」(愛)、「恨」(恨み)、「情」(感情)のような抽象概念を表す表現が閩南語の名詞重複語の語基となっている。(10b)の名詞重複語はいずれも容認されないため、抽象概念を表す表現が閩南語の名詞重複語の語基にはなれないと考えられる。また、閩南語には実質的な意味を持たない形式名詞はないが、名詞重複語の意味は語基となる表現の意味に基づいているため、実質的な意味を持たない名詞表現が名詞重複語の語基にはなれないと予測できる。

意味的な制約だけではなく、閩南語の「AA」型名詞重複語の語基は音韻的な制約も受けていると考えられる。

- (11) a. *乌鸦乌鸦(カラス)、*蔬菜蔬菜(野菜)
 b. *番大麦番大麦(トウモロコシ)、*菠仑菜菠仑菜(ほうれん草)

ここまで見てきた閩南語の「AA」型名詞重複語の例は、すべて1音節の名詞の重複語であった。本稿は、これらの例に基づき、閩南語の「AA」型名詞重複語の語基となる要素は1

音節の名詞に限られていると示し、閩南語の「AA」型名詞重複語の語基は音韻的な制約も受けていると主張する。

(4a, d) に示すように、「猴」(猿) や「汤」(スープ) などのような動物や食べ物を表す名詞は、閩南語の「AA」型名詞重複語の語基になることができる。それに對し、(11a) に示すように、「乌鸦」(カラス) や「蔬菜」(野菜) などのような動物や食べ物を表す名詞は、閩南語の「AA」型名詞重複語の語基になることはできない。(11a) の名詞の共通の特徴は、二つとも2音節であるということである。また、(11b) では、3音節の食べ物を表す名詞「番大麦」(トウモロコシ)、「菠仑菜」(ほうれん草) が閩南語の「AA」型名詞重複語の語基になっている。(11b) の例もいずれも容認されない。したがって、(4a, d) と(11) の対比から見れば、閩南語の「AA」型名詞重複語の語基となる要素は1音節の名詞に限られていると考えられる。

もし上記の主張が正しければ、閩南語の「AAA」型名詞重複語の語基となる要素も1音節の名詞に限られていることが予測される。次の例に示すように、この予測は正しいと考えられる。

(12) a. * 乌鸦乌鸦乌鸦 (カラス)、* 蔬菜蔬菜蔬菜 (野菜)

b. * 番大麦番大麦番大麦 (トウモロコシ)、* 菠仑菜菠仑菜菠仑菜 (ほうれん草)

(12a) では、2音節の動物や食べ物を表す名詞「乌鸦」(カラス) や「蔬菜」(野菜) が閩南語の「AAA」型名詞重複語の語基になっている。(12b) では、3音節の食べ物を表す名詞「番大麦」(トウモロコシ)、「菠仑菜」(ほうれん草) が閩南語の「AAA」型名詞重複語の語基になっている。(12a, b) の例はいずれも容認されない。(8a) に示すように、一般的には動物を表す名詞が閩南語の「AAA」型名詞重複語の語基になることができる。しかし、(12a) に示すように、2音節の「乌鸦」(カラス) は閩南語の「AAA」型名詞重複語の語基になることはできない。また、3音節の食べ物を表す名詞「番大麦」(トウモロコシ)、「菠仑菜」(ほうれん草) が閩南語の「AAA」型名詞重複語の語基になることはできないため、閩南語の「AAA」型名詞重複語の語基となる要素も1音節の名詞に限られると考えられる。

この節では、閩南語の名詞重複語の語基となる要素の制限について見てきた。本稿は、実質的な意味を持たない表現、抽象概念を表す表現、「万物」(万物)、「万事」(万事) のようなあらゆる事物が該当する表現が閩南語の名詞重複語の語基にはなれないと考える。また、閩南語の名詞重複語の語基となる要素は、音韻的な制約も受けており、1音節の名詞に限られていると考える。

4. 日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語との比較

4.1. 日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語との共通点

この節では、日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語との共通点について詳しく考

察していく。まず、日本語の構文的重複語は閩南語の名詞重複語と同じ意味機能を果たしていると考えられる。日本語の構文的重複語の意味機能に関しては、藤田・馮（2023）は先行研究を踏まえて再検討を行い、構文的重複語は基本的に語基が表している意味の典型性を高める役割を果たしていると主張しており、「モノを表す名詞」が語基となる構文的重複語の場合、モノの量が話者の想定した量を超えていることを意味することもできると主張している。3.1 では、閩南語の名詞重複語の意味機能について見てきた。閩南語の名詞重複語は、「複数性」を表せるだけでなく、日本語の構文的重複語のように語基が表している意味の典型性を高めることもできる。また、「モノを表す名詞」が語基となる閩南語の名詞重複語の場合、モノの量が話者の想定した量を超えていることを意味することもできる。

更に、藤田・馮（2023）は、食べ物を表す名詞が構文的重複語の語基になる場合、その食べ物の特徴をどの器官で強く感じとるかによって解釈が変わってくることを示唆した。モノを表す名詞が閩南語の名詞重複語の語基になる場合、そのモノの特徴をどの器官で強く感じとるかによって解釈も変わってくるため、この点においても日本語の構文的重複語は閩南語の名詞重複語と共通していると考えられる。したがって、本稿は、日本語の構文的重複語が閩南語の名詞重複語と同じ意味機能を果たすことができると考える。

次に、実質的な意味を持たない表現、抽象概念を表す表現、「万物」(万物)、「万事」(万事)のようなあらゆる事物が該当する表現が構文的重複語の語基にも閩南語の名詞重複語の語基にもなれないため、日本語の構文的重複語の語基となる要素と閩南語の名詞重複語の語基となる要素は同じ意味的制約を受けていると考えられる。

最後に、藤田・馮（2023）は、日本語の構文的重複語の統語的特徴について、よく連体修飾や述語として用いられると指摘している。陳（2009）は、閩南語の名詞重複語は連体修飾や述語として用いることができると指摘している。これも日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語との一つの共通点であると考えられる。

4.2. 日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語との相違点

この節では、日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語との相違点について詳しく考察していく。まず、日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語との形態的特徴は異なっていると考えられる。日本語の構文的重複語の語基の重複は、「した／している」が付加する環境でのみ許される。それに対し、閩南語の名詞重複語はほかの要素を付け加える必要はない。

そして、日本語の構文的重複語の語基となる要素と閩南語の名詞重複語の語基となる要素は同じ意味的制約を受けているが、異なる音韻的な制約を受けている。3.2 で議論したように、閩南語の名詞重複語の語基となる要素は、1音節の名詞に限られている。それに対し、日本語の構文的重複語の語基となる要素は1モーラを超える必要がある。

「この魚は血血している」、「この動物は毛毛している」のような例は、基本的には容認されない。⁹ また、(2) の日本語の構文的重複語の語基となる要素は、いずれも1モーラを超え

ている。小野(2015)は、構文的重複語においては、2モーラの語基の繰り返しが基本パターンとなっており、「木木した家が好きの人」のような例において語基が「きーきー」と発音されると指摘している。また、次のような連体修飾を含む名詞句も構文的重複語の語基として成立しようという見解を示した。

- (13) a. あの人の演技は、関西の劇団出身関西の劇団出身している。
 b. 今日の天気は、盤梯山から吹き降ろす風盤梯山から吹き降ろす風している。
 (小野 2015: 468)

(13a) では、名詞「出身」は連体修飾の「関西の劇団」によって修飾されている。(13b) では、名詞「風」は連体修飾の「盤梯山から吹き降ろす」によって修飾されている。(13) の例の容認度は人によって異なるが、少なくとも容認可能であると判断する人がいる。¹⁰ (13) のいずれの例においても日本語の構文的重複語の語基となる要素は1モーラを超えている。

本稿は、日本語の構文的重複語も閩南語の名詞重複語も音韻的な制約を受けていると考える。しかし、異なる音韻的な制約を受けていることは日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語との大きな違いであると考えられる。

次に、構文的重複語は基本的に語基が表している意味の典型性を高める役割を果たしている。しかし、その典型性の程度をさらに高めたい場合、ほかの程度を表す副詞と共に用いる必要がある。それに対し、閩南語の「AA」型名詞重複語は語基が表している意味の典型性を高める役割を果たしており、更にその典型性を高めたい場合、「AAA」型名詞重複語を用いることができる。

- (14) a. 彼はとても男男している。
 b. すごく大阪大阪したおばちゃん came。
 c. 彼が売っているカレーは非常に水水している。
 d. *彼はとても男男男している。
 e. *すごく大阪大阪したおばちゃん came。
 f. *彼が売っているカレーは非常に水水水している。

(14a, b, c) の構文的重複語は、いずれも「彼」、「おばちゃん」、「カレー」が「男」、「大阪」、「水」の典型性を備えていることを表している。しかし、さらにその典型性の程度を高めたい場合、「とても」、「すごく」、「非常に」のような程度を表す副詞と共に用いる必要がある。(14d, e, f) に示すように、日本語の構文的重複語は「XXX した／している」という形で典型性の程度を高めることはできない。それに対し、閩南語の名詞重複語は「AAA」という形で典型性の程度を高めることができる。(8a) に示すように、閩南語では、「猴」(猿)を

「AAA」という形で用いることによって、「彼」が非常に猿に似ていることを表すことができる。この点も日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語との一つの大きな違いであると考えられる。¹¹

また、藤田・馮 (2023)、陈 (2009) が指摘しているように、日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語はよく連体修飾や述語として用いられる。しかし、本稿は、2.2 で議論したように、閩南語の「AA」型名詞重複語は「様態補語」として用いることもできると考える。この点も日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語との一つの違いであると考えられる。

構文的重複語の形成過程について、小野 (2015)、徐 (2016) は、元々は名詞重複語とオノマトペがそれぞれ独立しており、それがやがて名詞重複の形でオノマトペの意味を表すように変化したと主張している。しかし、藤田・馮 (2023) は、構文的重複語はオノマトペから多くの影響を受けているが、後から発生してきた量的意味は通常の名詞重複語から影響を受けて発生してきたと主張している。閩南語の名詞重複語が同じような形成過程を経ているとは考えにくい。閩南語の名詞重複語は一般的な名詞重複の形で典型性を高めることができ、語基となる要素によって量的意味を表すこともできるからである。本稿は、形成過程が異なっていることも日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語との一つの違いであると考えられる。¹²

5. おわりに

本稿は、日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語の特徴を概観し、閩南語の名詞重複語の特徴の再検討を行った。また、日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語を比較し、両者の共通点と相違点を明らかにした。

日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語の意味機能は基本的に同じであり、両者の語基となる要素は基本的に同じ意味制限を受けている。また、両者はある程度の共通の統語的特徴を共有している。一方、両者には様々な相違点もある。両者は形態的には異なっており、異なる音韻的な制約を受けている。また、閩南語の名詞重複語には日本語において観察されない「AAA」型名詞重複語があり、閩南語の名詞重複語の形成過程は日本語の構文的重複語の形成過程と基本的に異なっている。

日本語の構文的重複語と閩南語の名詞重複語を比較し、両者の共通点と相違点を明らかにすることで両言語への理解を深めることができた。しかし、本稿の研究は記述の段階にとどまっており、なぜそのような共通点と相違点があるのかについて現段階では説明できない。これを今後の研究課題としたい。

注

1 本稿においては、小野 (2015) の定義に則り、「XX した／している」の形をとるものを構文的重

複語と呼称する。

- 2 馮・藤田(2023)は、日本語の「している」に対応する中国語には、「正在」や「着」などのような表現はあるが、構文的重複語における「した／している」は状態を表しているため、(3c)のような標準中国語としては「着」が対応すると指摘している。
- 3 本稿では、「*」は、非文法的であることを表す。
- 4 (3a, b, d)は筆者が(2a, b, d)をそのまま標準中国語に翻訳したものである。本稿は馮・藤田(2023)の考えを踏襲し、構文的重複語における「した／している」を「着」とすることで対応している。
- 5 (3)に用いられている名詞は、標準中国語の一般的な名詞重複語の語基になれない。
- 6 中国の閩語の中にも様々な方言がある。閩南語においては、日本語の構文的重複語に類似している意味機能を果たす名詞重複語は容認されるが、莆仙語においては、日本語の構文的重複語に類似している意味機能を果たす名詞重複語は容認されない。本稿は、閩語の中の閩南語を研究対象とする。閩語に該当するものの中で、どのような方言において日本語の構文的重複語に類似している意味機能を果たす名詞重複語が容認され、どのような方言においてそれが容認されないのか。またなぜそうなっているのかについては現時点では答えられない。今後の研究に譲りたい。
- 7 本稿の日本語訳はすべて筆者による翻訳であり、日本語母語話者によって確認されている。
- 8 日本語の構文的重複語とは異なり、閩南語の「ABB」型名詞重複語では二種類の名詞が使われているため、本稿の研究対象としない。
- 9 査読者による作例である。
- 10 藤田・馮(2023)は、(13)の容認度調査を行った。いずれの例においても「使える」寄りの回答が0件であったことから、回答者にとってこれらの語基は不自然なものであったことを指摘され、語よりも大きな文法単位が構文的重複語の語基になった場合、日本語母語話者の容認度は非常に低くなるという主張がなされている。詳しい議論は藤田・馮(2023)を参照されたい。
- 11 大塚(2021)は、構文的重複語の語基がモノを表す名詞である場合、「最大値、極限の多さ」を意味すると指摘している。しかし、藤田・馮(2023)は、構文的重複語が比較の格助詞「より」と程度副詞の「最も」のような表現と共起することに基づき、構文的重複語は量的意味を表すことはできるが、少なくとも「絶対的な最大値」と判定することはできないと主張している。(8b)に示すように、語基となる要素によって、閩南語の「AAA」型名詞重複語には「最も」の意味が含まれている場合もある。この事実は、量的意味を表している「AA」型名詞重複語は「最大値」を表していないことを示していると考えられる。したがって、本稿は、「最も」という意味が含まれる閩南語の「AAA」型名詞重複語が存在することは藤田・馮(2023)の主張を裏付ける根拠になると考える。
- 12 閩南語の名詞重複語が表している量的意味は名詞重複に由来しているため、これが藤田・馮(2023)の日本語の構文的重複語の形成過程についての主張を裏付けていると考えられる。

参考文献

陈燕玲(2009)〈泉州方言名词、动词及形容词的重叠式〉《龙岩学院学报》27-6: 80-84.

- 馮一峰・藤田航輝 (2023) 「構文的重複語の中国語訳について」『さいたま言語研究』7: 121-135.
- 藤田航輝・馮一峰 (2023) 「構文的重複語の再検討 — 日本語母語話者を対象とした容認度調査を通して —」『東アジア国際言語研究』4: 143-153.
- 清海節子 (2020) 「日本語の疊語 — 名詞の疊語が表現する意味の可能性 —」『駿河台大学論叢』60: 13-27.
- 小野尚之 (2015) 「構文的重複語形成 — 『女の子の子した女』をめぐって —」由本陽子・小野尚之 (編) 『語彙意味論の新たな可能性を探って』463-489. 東京: 開拓社.
- 大塚望 (2021) 「『重複語 (疊語) している / した』について — 形容詞性接尾辞『ばい』『らしい』との比較 —」『日本語日本文学』31: 11-29.
- 定延利之 (2015) 「遂行的特質に基づく日本語オノマトベの利活用」『人工知能学会論文誌』30-1: 353-363.
- 田村泰男 (1991) 「現代日本語における疊語について — 数概念からみた疊語 —」『広島大学留学生センター紀要』1: 41-47.
- 徐一平 (2016) 「日本語の名詞が疊語の形で擬態的な意味を表す問題について — コーパスの役割も同時に考える —」『日本語・日本学研究』6: 153-162.
- 赵元任 (1979) 《汉语口语语法》北京: 商务印书馆.

馮 一峰 (i_hyo@hokuyo.ac.jp)

現代日本社会における敬語の誤用に対する考察

— 1990年代の敬語に関する実用書の例を通して —

福本 達也
北洋大学

A Study on The Misuse of Honorifics in Modern Japanese Society
— Through Examples from Practical Books on Honorific Language from the 1990s —

FUKUMOTO Tatsuya
Hokuyo University

Abstract

This article has been researched and discussed example sentences of honorific language that appear to be used in real society among the example sentences of honorific language published in practical books on honorific language published in the 1990s. And it also has been investigated and considered examples of misuse, focusing on the honorific form of honorifics. As a result, it was found that most forms of honorific language have examples of deviations or misuse of honorific language. Examples of misuse include: First, there is a mixture of three types of honorific language (honorific language, humble language, and polite language). ① Mixed use of honorific language and humble language. ② Mixing honorific and polite language. ③ Mixed use of humble and polite language. Next, we see an example of excessive honorific language. ① Honorific language + excessive honorific language. ② Excessive polite language + polite language. ③ Overuse of “o”. There are also other misuses. ① Mixed use of “o” and “go” can be seen. ② There are also cases where some honorific words are omitted or only part of the word is made into honorific language. There is a theory that it is not a misuse in this case, and there are also cases where there are pros and cons.

1. はじめに

現代日本社会において人間関係は複雑になっていて、社会的規範も複雑になっている。その中でも言葉使いの規則や規範が特にそうである。日々の生活において様々な人と会い会話をしているのだが、相手に対してどのように話せば良いのか悩んだり難しく思っている人はかなりいる。相手に対する言葉使いの中で大きな問題の一つが敬語使用についての問題である。相手によって時と場合によって敬語を使い分けなければならないし、また敬語そのものだけでなく話し方や態度や表情などにも気を使わなければならない。適切な敬語使用をする必要があるが、社会情勢や教育などの影響なのか最近では敬語使用のゆれや誤用の問題が大きくなっている。敬語のゆれや誤用にはどのようなものがあるのだろうか。それらを知ることは、敬語の教育をする上でも重要になってくる。そのために、まず、実際の社会で敬語のゆれや誤用がどのようなものなのかを調べる必要があり、いわゆる文法上の敬語形式全般の中でどれがどのように誤用されているのかなどを具体的に調べる必要があると考える。それと時代別社会での敬語使用についての考察で、まず第1番目に平成時代初期の社会の敬語のゆれや誤用について考察することにする。

本稿では平成時代初期の実際の社会における敬語の誤用を考察する手段として、平成初期の1990年代に出版された敬語に関する実用書や専門書¹をテキストとして使用し、実用書の中にある実際に使われている敬語の例を調査し結果をまとめてみた。いわゆる文法上の敬語形式全般の中でどれがどのように誤用されているのかなどを具体的に調べ、何が問題なのか、ゆれと誤用の問題について敬語の実用書の中ではどのように言っているのかを調べてみた。

2. 先行研究

菊地康人は敬語の誤用に関して、敬語の誤りのタイプを次のように示している²。

- (1) 〈語形〉の単純な誤り
 - ①「お／ご」の使い分けの誤り
 - ②二重敬語
 - ③「お／ご～される」は規範的には正しい敬語とされていない
 - ④ナル敬語の〈語形〉の不適切
- (2) 謙讓語を尊敬語のように、聞手や然るべき第三者を主語として使う誤り—〈機能〉の誤り
 - ①「お／ご～する」を尊敬語のように使う
 - ②「お／ご～して下さる(ください)/いただく」は一般的には誤りとされる
 - ③「お／ご～できる」を尊敬語のように使う
 - ④その他、各種謙讓語を尊敬語のように(あるいは丁寧語や美化語のつもりで)使う
 - ⑤謙讓語と尊敬語を組み合わせる誤り

- (3) 謙讓語A・ABが補語を高めることを知らないための誤り—(機能)の誤り
- (4) とくに「いただく」に関する文法上の誤り
 - ①「いただく・くださる」と助詞の関係の誤り
 - ②「…(さ)せていただく」の「せる・させる」の使い分けの誤り
- (5) 身内を高める誤り(〈適用)の誤り・不適切
 高める意味のない人物を高める誤り
- (6) 過剰敬語
 - ①美化語の過剰使用
 - ②「…(さ)せていただく」の過剰使用
- (7) アンバランスな敬語
- (8) 聞手や然るべき第三者について「ございます」を使う
 また、八重機幸孝は敬語の誤用の分類として、次のような分類をしている³。

(1) 語形上の誤用

語形上の誤用とは、その語形が敬語として規範的ではない表現のことである。例として、「お使いになられる」「お召しになられる」のように二重敬語となってしまうものや、「さ付き言葉」「れ足す言葉」などである。

(2) 運用上の誤用

運用上の誤用とは、語形は正しいが、発話に関わる人物間の社会的関係と整合しない表現のことである。ここで多く見られたのが、謙讓表現を相手側に用いてしまっているものだ。例として、「お持ち帰りできます」「お話ししてください」「ご賞味ください」などが挙げられる。

(3) 許容されると考えられる型

誤用と考えられているものの中には、広く用いられて許容されるようになったものや、見方によっては正用とすることができるものもある。例として、「ら抜き言葉」「親愛語」「確認形(よろしかったでしょうか等)」などである。

上のように分類し考察している。

文化庁は「敬語の指針⁴」の中で敬語の誤用については、尊敬語と謙讓語の混同の問題と二重敬語について言及している。尊敬語と謙讓語の混同の例として「担当者に伺ってください」の「伺う」は謙讓語なので、誤用となるとしている。二重敬語は一般に適切ではないとされているが、語によっては習慣として定着しているものもあるとしている。習慣として定着している二重敬語の例として、「お召し上がりになる、お見えになる」「お伺いする、お伺いいたす、お伺い申し上げます」などを挙げている。

また、丸元聡子、白土保、井佐原均⁵は敬語誤用の例文を自分たちで作成し統計的分析を試みている。

近藤雅之⁶は敬語の誤用に関して主に「おられる」について様々な文献などを通じて考察

している。

これらの先行研究では実際の社会で使用されている具体的な誤用例を取り上げてどうなっているのかを詳しく表していない。そこで本稿ではこれらの先行研究を踏まえながら、具体的に現代社会において実際使われている敬語の誤用と敬語のゆれがどうなっているのかを調べて行きたいと思う。

3. 研究方法

本稿では時代別敬語使用と誤用に関する研究の第一歩として、平成時代初期の1990年代の敬語使用と誤用に関して考察することにする。当時の敬語使用と誤用例を調査する方法・手段として1990年代に出版された敬語に関する実用書をテキストとして使用し、実用書の中にある实际社会で使われている敬語の誤用例を調査し分析することにする。今回は、敬語使用において敬語のいわゆる文法上の敬語形式全般の中でどれがどのように誤用されているのかなどを具体的に調べ、何が問題なのか、ゆれと誤用の問題について敬語の実用書の中ではどのように言っているのかを調べて行くことにする。

例文を挙げた実用書は次のとおりである。

1. 原加賀子 (1993) 「美しいオフィスレディの敬語の48章」大和出版
2. 原加賀子 (1993) 「いつでもどこでもすぐに使える敬語の本」大和出版
3. 野元菊雄 (1994) 「敬語の使い方」梧桐書院
4. 奥秋義信 (1994) 「ビジネスマン敬語ハンドブック」リベラル社 (星雲社)
5. 金井良子 (1995) 「この相手・この場所これが正しい敬語です」中経出版
6. 永崎一則 (1997) 「正しい敬語の使い方」PHP 研究所
7. 頼陽子 (1997) 「丸覚えで使いこなす敬語の本」日本実業出版社
8. 矢橋昇 (1997) 「この一冊で『敬語』がわかる」三笠書房
9. 金井良子 (1999) 「簡単マスター敬語のマナー」PHP 研究所
10. 井上史雄 (1999) 「敬語はこわくない」講談社

これらの実用書の中に掲載されている例文の中から、実社会で使われている敬語の誤用例を選び、著者が個人的に作成した例文は選ばないことにする。

敬語の乱れ・誤用を分けるとパターン(形式)の乱れとTPOの乱れがある⁷⁾。パターンの乱れは敬語形式の誤用へとつながり、TPOの乱れは敬語形式以外の要素の誤用につながると言える。

今回は敬語のパターン(形式)の乱れ・誤用に絞って考察する。調査・考察する順序としては、まず、敬語形式の3つの種類(尊敬語、謙譲語、丁寧語)の混用の例を調べる。次に、過剰敬語や二重敬語の例を調べる。そして、その他の誤用の例を調べる。各誤用例の例文を挙げた後に、どこが間違いか、正しい形式は何かなどについて考察して行くことにする。

実際の人々の対話時の特徴として目立つのは特に言葉使いや敬語使用の誤用である。実用書にもその誤用の例が多く出てくる。そこでこの章では各基準に対する誤用の例や問題点を挙げながらその誤用に対する解決策や正しい言い方や対話時の基準や規則について見ていくことにする。

4. 実用書の中にある敬語の誤用例

4.1. 敬語形式の混同・混用

人との対話時には相手が誰であるか、また時と場合によって適切な敬語形式の使用が求められる。しかし実際の社会においては時々間違った敬語形式の誤用例が見られる。ここではまずどんな誤用例があるのかを見て、その誤用例を見ながら基準と規則について考えて見ることにする。誤用例を通して何が適切な形式かを考えてみる。敬語の形式を考える時にはまず規範的敬語の形式を考える必要があるだろう。そしてその次に規範的な見解から見れば誤用であるが、最近使われている形式についてもその形式の普及度によって認めていく必要があると思う。敬語のゆれや誤用の問題で曖昧なのは広く使われているから認めても良いと言う意見があるからである。その問題については、本稿では辻村敏樹の学説の見解の立場をとることにする⁸。これから敬語形式の誤用例について見ていこう。

4.1.1. 謙譲語と尊敬語の混用

(1) 尊敬語を使わなければならないところで間違って謙譲語を使っている場合

例1：課長、まいりませんか（正しい敬語の使い方、P. 39）

2：外国へまいりまして・・・（アナウンサー→ゲスト、放送局にて）（正しい敬語の使い方、P. 40）

3：Aさん、奥様がお迎えに参っております。（正しい敬語の使い方、P. 40）

4：課長、行って参りましたか（ビジネスマン敬語ハンドブック、P. 44）

5：部長がさっき申されたことに・・・（正しい敬語の使い方、P. 38）

6：社長が申されています。（これが正しい敬語です、P. 47, 48）

7：課長の申されること、よくわかりました（ビジネスマン敬語ハンドブック、P. 26）

8：先生が先ほど“今後の方針”を申されておりましたので…（丸覚えで、P. 24）

9：お名前を申していただけませんか（簡単マスター、P. 157）

10：課長が申していらっしゃいました。（簡単マスター、P. 160）

11：よろしく申し上げます。（この一冊で敬語がわかる、P. 32）

12：お菓子を・・・いただきますか（正しい敬語の使い方、P. 39）

13：このお菓子をいただいでください（丸覚えで、P. 211）

14：温めると一層おいしくいただけます（簡単マスター、P. 42）

15：このたびは賞を頂かれたそうで、おめでとうございました（この一冊で、P. 44）

目上の人が主語の時には尊敬語を使わなければならないが、誤って謙譲語を使っている場合が時々見られる。「まいる」「申す」「いただく」は謙譲語である。例1-4は「まいる」の代わりに「いらっしゃる」を使わなければならない例である。この「まいる」の誤用もかなり多い。例4は「行って参りましたか」の代わりに「行っていらっしゃいましたか」を使わなければならないとされる。例5-11は「申す」の代わりに「おっしゃる」を使わなければならない場合である。この「申す」の誤用もかなり多い。例7は「申される」の代わりに「おっしゃる」を使わなければならないとされる。例12-14は「いただく」の代わりに「召し上がる」を使わなければならない場合であり、例15は「いただく」の代わりに「お受けになった」を使わなければならない場合である。

例16：切符をお持ちでない方は…（正しい敬語の使い方、P.41）

17：お客さまがみんなおそろいでしたら…（正しい敬語の使い方、P.41）

18：あちらでお尋ねしてください。（これが正しい敬語です、P.48）

19：あなたも御一緒しませんか（ビジネスマン敬語、P.42）

20：課長、私にもご紹介してください（ビジネスマン敬語、P.46）

21：今宮さまがご休憩しております。（簡単マスター、P.34）

22：実験をご観察する皇太子殿下です（簡単マスター、P.35）

23：そちらへ、お座りしてお待ちください（簡単マスター、P.41）

24：お届けのご印をご持参しましたか（簡単マスター、P.156）

25：…、手軽にお求めできますよ。（正しい敬語の使い方、P.42）

26：気軽にご参加できる料理教室へどうぞ。（正しい敬語の使い方、P.42）

27：ご自由にお積み立てできる…（正しい敬語の使い方、P.42）

28：会員の方はご利用できます（ビジネスマン敬語、P.82）

29：簡単にお使いできます（簡単マスター、P.39）

30：ここはお入りできません（簡単マスター、P.39）

31：多くのお客さまが、お座りできますようにお詰めください（簡単マスター、P.39）

32：特急券をお持ちでない方は、ご乗車できません（簡単マスター、P.174）

33：お好きな品物をお選びしていただくように…（正しい敬語の使い方、P.42）

34：弊社はお気軽にご利用していただくように…（正しい敬語の使い方、P.42）

35：次回こちらをお持ちしていただくと…（簡単マスター、P.155）

36：受付でお聞きしてください。（敬語はこわくない、P.126）

37：玄関先までお出ししてください（敬語はこわくない、P.125）

38：お求めやすいお値段です（ビジネスマン敬語、P.76）

39：御社がご説明いたしました場合には…（ビジネスマン敬語、P.70）

「お（ご）-する」「お（ご）-できる」「お（ご）-していただく」「お（ご）-してください」

「お(ご) - やすい」「お(ご) - いたす」は謙讓語の形式である。例 16-24 のように「お(ご) - する」の誤用は現代の日本語の敬語のシステムの根幹をゆるがすかもしれない事態であると言える⁹。例 16 は「お持ちしてない」の代わりに「お持ちでない」を、例 17 は「おそろいしましたら」の代わりに「おそろいでしたら」または「おそろいになりましたら」を、例 18 は「お尋ねしてください」の代わりに「お尋ねください」を、例 19 は「ご一緒しませんか」の代わりに「ご一緒にいかがですか」を、例 20 は「ご紹介してください」の代わりに「ご紹介ください」を、例 21 は「ご休憩しております」の代わりに「お休憩になっていらっしゃいます」を、例 22 は「ご観察する」の代わりに「ご観察になる」を、例 23 は「お座りして」の代わりに「お座りになって」を、例 24 は「ご持参しましたか」の代わりに「ご持参になりましたか」を使わなければならない場合である。例 25-32 のように「お- できる」の誤用は数多く、かなり認められるようになってきたと言えるだろう¹⁰。例 25-32 は全て「お- できる」の代わりに「お- になれる」を使わなければならない場合である。例 28 は「ご利用できます」の代わりに「ご利用になれます」を使わなければならないとされる。例 33-35 のように「お- (して) いただく」の誤用は「お- する」の誤用の例とも言えるが、別のものとして分類してみた。この例もかなり多く見られる。例 33 は「お選びしていただく」の代わりに「お選びいただく」を、例 34 は「ご利用していただく」の代わりに「ご利用いただく」を、例 35 は「お持ちしていただく」との代わりに「お持ちいただく」とを使わなければならない場合である。例 36、37 のように「お- してください」の誤用もかなり多い。例 36 は「お聞きしてください」の代わりに「お聞き(になって)ください」を、例 37 は「お出ししてください」の代わりに「お出し(になって)ください」を使わなければならない場合である。前の例 18、20 もこの「お- してください」の誤用例とも言える。例 38 は「お- やすい」の代わりに「お- になりやすい」を使わなければならない場合であるとされ、「お求めやすい」ではなく「お求めになりやすい」が良いとされる。この「お- やすい」の誤用はかなり多くて一般化していくものと見られる¹¹。例 39 は「お(ご) - いたす」の代わりに「お(ご) - になる」または「お(ご) - なさる」を使わなければならない場合であるとされ、「ご説明いたしました」ではなく「ご説明になった」「ご説明なさった」が良いとされる。

例 40: お客さまはホットにいたしますか、アイスにいたしますか。(正しい敬語の使い方、P. 43)

41: 宮さまが乗ったお車が今奈良に到着いたしました(簡単マスター、P. 34)

42: 部長はいたされないのでですか(簡単マスター、P. 166)

43: 社長はおりますか→社長はいらっしゃいますか(ビジネスマン敬語、P. 106)

44: 部長さんはおられますか(簡単マスター、P. 163)

「いたす」「おる」は謙讓語である。例 40-42 は「いたす」の代わりに「なさる」を使わなければならない場合である。例 41 は丁寧語化した丁重語としての用法であるとも言える

かもしれない¹²。例 41 は主語が車なのでただ「到着しました」とすべきかもしれない。例 42 は謙譲語の「いたす」に尊敬の助動詞「れる」をつけて間違っただ二重敬語になっている。例 43、44 のように「おる」の誤用はとても多い。特に例 44 のように「おられる」は地域によっては尊敬語扱いをしている地方（西日本）もあるので、少しずつ一般化していく傾向にあると言えるだろう¹³。しかし例 43、44 は今のところ「おる」の代わりに「いらっしゃる」を使わなければならないとされる。例 43 は自分の会社の社長について言っているのであれば正しい敬語使用になるが、ここでは相手の社長のことを言っているので間違いとなった場合である。

例 45：－さまもうかがいますか（美しいオフィスレディの敬語 48 章、P. 86）

46：その件でしたら、隣の窓口で伺ってください（この一冊で敬語がわかる、P. 30）

47：このお味はすでにご存じ上げでしょうけど、今日はお安くなっていますよ（簡単マスター、P. 176）

48：（客に）どうぞ拝見なさってくださいませ（簡単マスター、P. 162）

「うかがう」「存じ（あげ）る」「拝見する」は謙譲語である。例 45、46 のように「うかがう」の誤用もかなり多い。例 45 は「うかがいますか」の代わりに「いらっしゃいますか」を使わなければならない場合である。例 46 は「伺ってください」の代わりに「お聞き（になって）ください」を使わなければならない場合である。例 47 は「ご存じ上げでしょうけど」の代わりに「ご存じでしょうけど」を使わなければならない場合である。例 48 は「拝見なさる」の代わりに「ご覧になる」を使わなければならない場合である。

(2) 謙譲語を使わなければならないところで間違っただ尊敬語を使っている場合

例 49：私の提案として一つおっしゃりたく思います（丸覚えで使いこなす敬語の本、P. 24）

50：私も召し上がりますから（丸覚えで、P. 211）

51：係長が持っていらっしゃることになっていますので…（簡単マスター、P. 127）

52：（同じ職場の人が）今日は一日〇〇支店のほうにいらっしゃいますけど…（簡単マスター、P. 152）

53：（客に）部長は間もなくお見えになりますので…（簡単マスター、P. 153）

54：（客に）課長はただ今、お出掛けになっております（簡単マスター、P. 161）

55：はい、お調べになってみます（簡単マスター、P. 168）

56：（客に）お間違いくださると、私共がお困りになるんですけど（簡単マスター、P. 175）

主語が自分で相手が目上の人である場合謙譲語を使わなければならないが、誤って尊敬

語を使っている場合である。「おっしゃる」「召し上がる」「いらっしゃる」「お見えになる」「お-になる」は尊敬語の形式である。例49は「おっしゃる」の代わりに「申す(申し上げる)」を使わなければならない場合である。例50は「召し上がる」の代わりに「いただく」を使わなければならない場合である。例51、52は自分と同じ職場の人という自分の身内の人に間違っ「いらっしゃる」を使った例であり、この場合「いらっしゃる」の代わりに「まいる」を使わなければならないであろう。例53は自分と同じ職場の人という自分の身内の人に間違っ「お見えになる」を使った例であり、この場合も「お見えになる」の代わりに「まいる」を使わなければならないであろう。例54、55、56は自分や自分の身内の人に間違っ「お-になる」を使った例である。これら「お-になる」を使わないで話さなければならない場合である。例54は「お出掛けになって」の代わりに「出掛けて」を、例55は「お調べになって」の代わりに「調べて」を、例56は「お間違いしてくださる」の代わりに「お間違いになる」を、「お困りになるんですけど」の代わりに「困るのですが」を使わなければならないだろう。

4.1.2. 丁寧語と尊敬語の混用

(1) 丁寧語を使わなければならないところで間違っ尊敬語を使っている場合

例57：○○さんのお宅でいらっしゃいますか(この一冊で、P.49)

上の例のような場合、「-でございます」の方が規範であるとされているが、「-でいらっしゃる」の方がもっと丁寧であると考えている人も多く、賛否両論と意見が分かれているようである¹⁴。

(2) 尊敬語を使わなければならないところで間違っ丁寧語を使っている場合

例58：みなさま、お元気でございますか(簡単マスター、P.92)

59：奥様でございますか…(簡単マスター、P.93)

上の例のような場合、「(-で) ございます」よりも「-でいらっしゃる」の方がより丁寧に相手を尊敬する意味が強ク「-いらっしゃる」を使わなければならないとされる。

4.1.3. 丁寧語と謙譲語の混用

(1) 謙譲語を使わなければならないところで間違っ丁寧語を使っている場合

例60：○○には洗い替えが一枚ついてございます(簡単マスター、P.43)

61：こちらには味がついてございます(簡単マスター、P.43)

62：座席番号は荷物棚のところに付いてございます(簡単マスター、P.91)

63：本日はたくさん賞品を用意してございます(ビジネスマン敬語、P.108)

上の例のような場合は「-てございます」よりも「-ております」の方が適切であるとされる。例 60、61、62 は「ついてございます」ではなく「ついております」を、例 63 は「用意してございます」よりも「用意しております」を使わなければならないだろう。

(2) 丁寧語を使わなければならないところで間違っ謙讓語を使っている場合

例 64：私、銀行にお勤めしています (美しいオフィスレディの敬語 48 章、P. 91)

65：明日は、おやすみします (美しいオフィスレディの敬語 48 章、P. 92)

上の例は「お-する」を間違っ使った例であり¹⁵、この場合「-ている (おる)」を使わなければならないとされる。例 64 は「お勤めしています」よりも「勤めています (勤めております)」を、例 65 は「おやすみします」よりも「やすんでいます (やすんでおります)」を使わなければならないだろう。

(3) 謙讓語の丁寧語化

例 66：まもなく電車がまいります (敬語はこわくない、P. 134) → 謙讓語の丁寧語化

上の例のような場合、従来「まいる」の使い方が間違っしているとされていたが、最近謙讓語が丁寧語化して「丁寧語」として使われるようになった場合であると見なされるようになった¹⁶。

4.1.4. 「お」と「ご」の混用

例 67：お葬儀どこでなさいますか (簡単マスター、P. 36)

68：奥様とてもご似合いです。こちらは奥様のようなお年配の方には… (簡単マスター、P. 86)

上の例は「お (ご)」を間違っ使った例であるが、「お (ご)」の使い方を良く知らないのか、または緊張したからなのか、「お (ご)」の使用方法を間違っしている場合である。普通固有語には「お」が、漢字語には「ご」が付くとされ、「似合い」は固有語で「お」が、「葬儀」「年配」は漢字語なので「ご」が付かなければならないのである。例 67 は「お葬儀」よりも「ご葬儀」が、例 68 は「ご似合い」よりも「お似合い」が良いとされる。

4.2. 過剰敬語

4.2.1. 尊敬語+尊敬語

(1) 添加形式+添加形式

例 69：お読みになられますか (美しいオフィスレディの敬語 48 章、P. 78)

70：あんなにお喜びになられるとは思わなかったわ (簡単マスター、P. 167)

上の例は一つの形式だけで充分であるのにより丁寧に言わなければならないという意識が働いたのか、添加形式の「お-になる」に添加形式の「られる」が付き「お-になる+（ら）れる」という過剰（二重）敬語となった例であるが、こういう例は多く見られる。例69は「お読みになれますか」ではなく「お読みになりますか」を、例70は「お喜びになられる」ではなく「お喜びになる」を使わなければならないとされる。

(2) 交代形式+添加形式

例71：山田さんがお見えになりました（敬語の使い方、P.54）

72：お召し上がりになってください（美しいオフィスレディの敬語48章、P.82）

73：おっしゃられるとうりです（ビジネスマン敬語、P.28）

74：何時にご出発になれますか（簡単マスター、P.168）

75：おかあさん、一人で山形にいらっしゃられるのでしょうか（簡単マスター、P.169）

76：部長、……、何をお召し上がりになれますか（三重敬語）（簡単マスター、P.170）

上の例も一つの形式だけで充分であるのにより丁寧に言わなければならないという意識が働いたのか、交代形式に添加形式の「（ら）れる」が付き「敬語の交代形式+（ら）れる」という過剰敬語となり間違いだとされる例である。例71、72は「見える」「召し上がる」に「お-になる」が付き、さらに「られる」が付いて「お見えになられる」「お召し上がりになられる」という三重敬語となった例である。例73、74、75、76は「召し上がる」「おっしゃる」「ご出発になる」「いらっしゃる」に「られる」が付いて過剰（二重）敬語となった例である。例71、72、73、76の「お見えになられる」「お召し上がりになる」「おっしゃられる」等は普及しており、慣用として認めるしかないという学者もいる¹⁷。例73で敬語表現ではないが、「とうり」は間違いで「とおり」が正しいとされる。

4.2.2. 丁寧語+丁寧語 -ます+です

例77：手前どもでさせていただきますでございます（ビジネスマン敬語、P.125）

78：こちらにはございません（丸覚えで、P.218）

79：明日こちらの者がお伺いすることになってございます（簡単マスター、P.94）

上の例は「（ご）さい ます（ません）+です」という二重丁寧語で間違いだとされる例であるが、その場で緊張したりより丁寧に言わなければならないという意識が働くのか過剰（二重）敬語を使っている例が多く見られる。例77は「ます+ございます+です」という三重丁寧語が現れている場合である。

4.2.3. お(ご)の使いすぎ

例 80：おコーヒーはいかが(？) (ビジネスマン敬語、P. 88)

81：こちらはおセールになっております (簡単マスター、P. 35)

82：部長はお電話でご出張のご相談をなさっていらっしゃいます(丸覚えで、P. 217)

83：詳しくは、ご販売店でおたずねください (簡単マスター、P. 41)

84：おパーマね。おシャンプーはしてある？お痒いところある？…(簡単マスター、P. 88)

85：お召し上がってください (簡単マスター、P. 110)

86：お嬢様は、今日高校をご卒業されるのですね (簡単マスター、P. 171)

87：お歌いになるのをご拝聴したいですわ (簡単マスター、P. 171)

上の例は「お(ご)」を過度に使った例であるが、より丁寧に言おうとしてなのか、上品に言おうとしてなのか、「お(ご)」を過剰に使用した例である。「お(ご)」の使用に関して使い過ぎは間違いであるとされるようである。例 80 の「おコーヒー」、例 81 の「おセール」、例 83 の「ご販売店」、例 84 の「おパーマ」「おシャンプー」「お痒い」、例 85 の「お召し上がって」は「お(ご)」をつける必要はない、またはつけるとおかしいとされる。例 82 は自分の会社の部長なら敬語を使うべきではないとされ、「お電話」「ご出張」「ご相談」「なさっていらっしゃいます」は全て不適切であるとされる。例 86 の「お嬢様」は過剰敬語だとされるが、「お」ではなく「様」が過剰敬語になり、「お嬢さん」なら良いとされるようである。

4.2.4. その他の過剰敬語

例 88：したがいまして (バカ丁寧すぎる) (ビジネスマン敬語、P. 126)

89：課長さん (簡単マスター、P. 96)

上の例はより丁寧に言わなければならないという意識が働くのか丁寧すぎるとされる過剰敬語で間違いだとされる例であるが、例 88 は「したがいまして」の「-まして」は過剰丁寧語であり、「したがつて」で充分であると言う人がいる一方、「したがいまして」のように別に「-まして」をつけて言っても構わないという人も見られ、賛否両論があるようである。例 89 は「課長」が役職名を表わし、これ自体が敬意を表わす語であり、特に自社の人に「さん」をつけるのは間違いだとされる。しかし「さん」をつける会社もみられることから、その言い方は普及しているので別に使っても構わないという人もいて、賛否両論のようである。

4.3. その他の敬語形式の誤用について

4.3.1. 敬語不足

(1) 省略、(最後まで言わない) 不完全文

例90:「どうも…」(美しいオフィスレディの敬語48章、P.70)

91:申したんですけど…(簡単マスター、P.128)

上の例は最後まではっきり言わないとか敬意を表す表現が足りないので、相手に敬意が伝わらない場合である。例90は「どうも」の後、何も言わないのは失礼に当たるので敬語の不使用や誤用になり、最後まで敬語を使って丁寧に言わなければならないとされる。例91の「申したんですけど」のように縮約形や会話体を使うのは敬語の誤用になるとされ、「申し上げましたが」のように敬語の完全形を使わなければならないとされる。

(2) 敬意不足表現(もっと丁寧に言う必要がある表現)

例92:「おたくの〇〇を教えてください」(美しいオフィスレディの敬語48章、P.74)

93:〇〇は、ただ今席をはずしております…(沈黙)(いつでもどこでも、P.36)

例92は相手に頼み事をする場合であるから、もっと丁寧な敬語を使わなければならないとされ、「恐れ入りますが」などのクッション言葉をつけるべきだとされる場合である。例93は客に対して丁寧に、またわかりやすく言わなければならない場合であるが、途中で沈黙をしてしまっているので良くないとされ、「申し訳ございませんが、〇〇はただ今席をはずしております」のようにクッション言葉をつけ最後まで敬語を使って丁寧に言う必要があるとされる場合である。

(3) 文全体の敬語の敬意が不一致

例94:雅子さまが出てきました(簡単マスター、P.33)

95:もしもし、あの、だれですか(簡単マスター、P.99)

96:(他会社の部長に)ボクシングやるんですか。…ボクシングするんですか(簡単マスター、P.113)

97:長谷川さん。〇〇してくれた(簡単マスター、P.114)

98:(客に)はい、いますけど…あなたはだれですか(簡単マスター、P.126)

上の例は文全体で敬語の敬度のバランスがとれていない場合である。主語や話題の人、聞き手と述語などの文全体の敬度が一致しなければならないとされる場合である。例94は皇室の「雅子さま」に対しては「出てきました」ではなく「出ていらっしゃいました」を、例95は電話の相手に対して「だれ」ではなく「どなた」を、例96は相手が他会社の部長なので「やるんですか」「するんですか」ではなく「なさるのですか」を、例97は「〇〇してくれた」ではなく「〇〇していただきました」を、例98は相手が客なので「いますけど」ではなく「おりますけど」を、「あなたはだれですか」ではなく「どちらさまですか」をそれぞれ使わなければならないのである。

4.3.2. 敬語化の誤り

例 99：お力になってください (ビジネスマン敬語、P. 116)

100：お気をつけて (ビジネスマン敬語、P. 78)

101：とんでもございません (この表現は大丈夫だと言う人もいる) (ビジネスマン敬語、P. 80)

102：はい、私がお作りです (簡単マスター、P. 112)

103：課長がおっしゃっちゃいました (簡単マスター、P. 112)

上の例はよく見かけるような例であるが、文法的に敬語として成立しないものとされている場合である。例 99、100 は「力になる」「気をつける」は一つの動詞のような表現なので敬語化した時に「お力になって」「お気をつけて」とするのは文法的に誤りとされ、「お力になってください」ではなく「お力添えください」が、「お気をつけて」ではなく「お気をつけになって」が良いとされる。しかし最近では「お気をつけて」はかなり使われているようなので、賛否両論になっているようだ。例 101 は「とんでもない」の「ない」を「ございません」と変えて「とんでもございません」と言う人がいるが、これは文法的に間違いで、「とんでもない」が一つの (表現) 単語なので「とんでもないことです」と言うのが正しいとされる。しかしこの「とんでもございません」は大丈夫だと言う人もいる¹⁸ ので、賛否両論あるようだ。例 102 の「お作りです」は緊張してうっかり出た言葉であるが、自分に対して尊敬語を使ったり文法的には成立しない表現なので間違いとされる表現である。例 103 の「おっしゃっちゃいました」は「おっしゃってしまいました」の縮約形で文法的におかしい表現であるとされ、「おっしゃっていらっしゃいました」が良い表現であるとされているようだ。

5. おわりに

本稿では、1990 年代に出版された敬語に関する実用書に掲載されている例を調べて、現代日本社会において人々の対話時の基準や規則について、特に敬語使用に関する色々な規則や注意点・問題点について考察した。対話時の基準や規則について、今回は適切な敬語形式の面に絞って考察してみた。敬語形式については、問題となっている敬語のゆれや誤用の例が敬語形式のほとんどの形式に見られるのがわかった。誤用の例として次の事例が挙げられる。まず、敬語の 3 つの種類 (尊敬語、謙譲語、丁寧語) の混用が見られる。①尊敬語と謙譲語の混用。尊敬語を使うべき時に誤って謙譲語を使ったり、逆に謙譲語を使うべき時に誤って尊敬語を使ったりした誤用が多い。②尊敬語と丁寧語の混用。尊敬語を使うべき時に誤って丁寧語を使ったり、逆に丁寧語を使うべき時に尊敬語を使っている例である。③謙譲語と丁寧語の混用。謙譲語を使うべき時に誤って丁寧語を使ったり、逆に丁寧語を使うべき時に謙譲語を使っている例が多い。この場合の謙譲語は丁寧語であるとされているようである。次に、過剰敬語の例が見られる。①尊敬語 + 尊敬語の過剰敬語。尊敬語に

別の尊敬語を加えて、過剰（二重）敬語になっている例が多い。②丁寧語＋丁寧語の過剰敬語。丁寧語に別の丁寧語を加えて、過剰（二重、三重）敬語になっている例が多い。③「お（ご）」の使いすぎ。お（ご）をたくさんつけて言えばより丁寧になる・上品になるという認識を持って、過剰に「お（ご）」をつけて話す例が多く見られる。また、その他の誤用も見られる。④「お」と「ご」の混用が見られる。「お」をつけるべき語に「ご」を付けたり、逆に「ご」をつけるべき語に「お」をつける例が多い。⑤敬語の一部を省略したり、語の一部だけ敬語化したりする例も見られる。この場合は誤用でないとする説もあり、賛否両論になっている例も見られる。

こういった敬語形式の誤用の問題は現代日本の社会的な問題になっていると言えるであろう。

以上のことから、敬語の形式使用の誤用はほとんど敬語形式の混用であり、敬語形式の種類（尊敬語・謙譲語・丁寧語）のそれぞれの特性や適切な使用方法などに関する認識不足・誤解が原因であると言えるだろう。

今回は1990年代出版の敬語の実用書の例を通して敬語形式の誤用について考察したが、今後は他の年代・時期での敬語形式の誤用について、また、敬語形式以外の誤用（例えばTPOに応じた・TPOに合う敬語使用の誤用など）について考察して行きたいと思う。

注

- 1 2023年現在購入できるものだけに絞った。
- 2 菊地康人(1996)「敬語再入門」丸善P.134～136
- 3 八重機幸孝(2014)「現代日本語における敬語の誤用について」岩大語文19P.24～27 岩手大学語文学会
- 4 文化庁(2007)『敬語の指針』文化審議会答申
- 5 丸元聡子、白土保、井佐原均(2001)「敬語表現の誤用に関する統計的分析」言語処理学会第7回年次大会発表論文集
- 6 近藤雅之(2020)『いわゆる「敬語の誤用」について：「おられる」という表現を中心に』千葉大学文学部日本文学会語文論叢35P.72-38
- 7 奥山益郎1994年『正しいようで正しくない敬語』講談社P.80
- 8 辻村は「規範は守りつつも現代社会の傾向を認めていかなければならないとし、ただし教育観点に立てば、変化の先取りをすることは危険であり、現時点で最も妥当なものを取り上げることが良い」としている。国立国語研究所1990年『日本語教育指導参考書17 敬語教育の基本問題(上)』P.153
- 9 菊池康人 前掲書P.151
- 10 井上史雄1999年『敬語はこわくない』講談社P.127
- 11 辻村敏樹 国立国語研究所1990年『日本語教育指導参考書17 敬語教育の基本問題(上)』P.153

- 12 井上史雄 前掲書P.134
- 13 井上史雄 前掲書P.128～132
- 14 矢橋昇 1997年『この一冊で敬語がわかる』三笠書房P.49
- 15 奥山益郎 前掲書P.382「おーする」の形式が使える動詞は相手に自分の動作が及ぶ場合に限り、自分だけの行為・動作には使えない
- 16 井上史雄 前掲書P.134
- 17 井上史雄 前掲書P.74～75
- 18 井上史雄 前掲書P.197

参考文献

- 井上史雄(1999)『敬語はこわくない』講談社
- 奥山益郎(1994)『正しいようで正しくない敬語』講談社
- 菊池康人(1996)『敬語再入門』丸善
- 菊池康人(1997)『敬語(講談社学術文庫)』講談社
- 国立国語研究所(1990)『日本語教育指導参考書17 敬語教育の基本問題(上)』
- 国立国語研究所(1992)『日本語教育指導参考書18 敬語教育の基本問題(下)』
- 近藤雅之(2020)『いわゆる「敬語の誤用」について:「おられる」という表現を中心に』千葉大学文学部
日本文化学会語文論叢 35 P.72-38
- 文化庁(2007)『敬語の指針』文化審議会答申
- 丸元聡子、白土保、井佐原均(2001)「敬語表現の誤用に関する統計的分析」言語処理学会第7回年次大会発表論文集
- 南不二男・林四郎編(1974)『敬語講座第1巻敬語の体系』明治書院
- 南不二男・林四郎編(1973)『敬語講座第6巻現代の敬語』明治書院
- 八重樫幸孝(2014)「現代日本語における敬語の誤用について」岩大語文 19 P.24-27 岩手大学語文学会
- 矢橋昇(1997)『この一冊で敬語がわかる』三笠書房

福本 達也 (t_fukumoto@hokuyo.ac.jp)

一般中高年ランナーの貧血における一考察

山中 慎・小林 愛子*・杉山 喜一*
北洋大学・*北海道教育大学

A Study on Anemia in Middle-aged and Elderly Runners

YAMANAKA Shin・KOBAYASHI Aiko*・SUGIYAMA Kiichi*
Hokuyo University・*Hokkaido University of Education

Abstract

This study investigated the anemia of middle-aged and elderly marathon runners and their blood components after a full marathon race. The results revealed that female runners are particularly susceptible to iron deficiency anemia, and that their red blood cell and Ht levels tend to decline with age. Furthermore, after the marathon race, the number of white blood cells decreased significantly. It is suggested that the marathon race seems to be stressful and a huge burden for the immune system. Based on the knowledge obtained from this survey, we would like to conduct a more detailed analysis in relation to training content and lifestyle habits (especially dietary habits) to prevent and improve anemia.

1. はじめに

貧血とは、赤血球およびヘモグロビン（以下、Hb）の減少によって、酸素を運搬する機能が低下し、身体機能に様々な不調をきたす症状のひとつである。赤血球は血流に乗って酸素を身体の細部まで運搬する役割を持つ。そのため赤血球の生産量が低下することや、破壊量が増加するなどしてその数が減少すると、酸素の運搬能力は低下する。また、赤血球中に含まれるHbは、おもな成分である「ヘム」と「グロビン」が酸素と結合して全身へ運ぶ重要な役割を果たしている。鉄やたんぱく質の栄養状態が悪化するとヘモグロビンの生産量の低下、および赤血球の働きが低下することから、Hbの量も貧血症状に大きく影響している。このように貧血は、スポーツ選手にとってパフォーマンスを著しく低下させる障害であり、川原（2003）・白井ら（1998）は、軽度の貧血でも最大酸素摂取量の低下によるパフォーマンスの低下を報告している。

スポーツ選手の貧血は「運動性貧血」や「スポーツ貧血」とも呼ばれ、その原因から、「希釈性貧血」・「溶血性貧血」・「鉄欠乏性貧血」に大別される。なかでもスポーツ選手に最も多く発現するといわれているのが鉄欠乏貧血であり、その原因は鉄栄養状態の不良によって引き起こされることや、運動によって発汗量が増加することで汗とともに失われる鉄が増加することなどが挙げられる。身体活動が増加することで、より多くの酸素を運搬する必要があり、鉄の需要が増加する。

貧血が多くみられる競技のひとつとして、陸上競技（中・長距離種目）やマラソンが挙げられる。近年日本陸上競技連盟では、2009年の第64回国民体育大会の強化選手である中学生・高校生・成人170人のHb値を測定し、その25.3%が「鉄欠乏性貧血」であることが判明したことに加え、貧血改善のために鉄剤注射を用いるなどの鉄の過剰摂取における誤った治療法の改善が急がれていることを報告しており、貧血による問題の深刻化が指摘されている。このような問題は、若者だけでなく近年増加している中高年マラソンランナーにおいても大きい問題になりつつある。しかしながら、中高年マラソンランナーにみられる貧血の実態に関する資料はあまりみられない。また、マラソンレースによる激しいストレスの影響やその貧血症状の改善のための鉄剤に頼らない対応策についても検討する意義は大きい。また、内田ら（2003）による、食生活状況と運動などの生活習慣を把握し貧血について検討したものなど、貧血が起こる原因を研究したものが多くある。

そこで本研究では、一般市民ランナーの中高年者を対象に、中高年マラソンランナーの貧血の実態を調査するとともに、マラソンレースに伴う貧血への影響ならびに、貧血の実態から改善のための基礎的知見を得ることを目的とした。

2. 方法

2.1. 対象

被験者は、第30回北海道マラソン大会（42.195km）並びに、第31回北海道マラソン大会（42.195km）参加者で、マラソンレースに向けて日常的にトレーニングを行っている一般市民

民ランナー114名(男子56名、女子58名)である。最終的には、調査期間中に自己都合により棄権した4名(男子3名、女性1名)を除く110名のデータに基づいて分析を行った。

2.2. 調査期間

本調査は、2016年の第30回北海道マラソン大会に向けた6月下旬から8月下旬の北海道マラソンのレース開催日にかけて並びに、2017年の第31回北海道マラソン大会に向けた6月下旬から8月下旬の北海道マラソンのレース翌日までの計4カ月間にわたって実施された。

2.3. 血液検査実施項目

貧血の指標となる主な血液成分である、血清鉄(以下、Fe)、白血球(WBC)、赤血球(RBC)、ヘモグロビン(以下、Hb)、ヘマトクリット値(以下、Ht)、平均赤血球容積(以下、MCV)、平均赤血球ヘモグロビン量(以下、MCH)、平均赤血球ヘモグロビン濃度(以下、

表1. 貧血の指標となる血液成分基準表

略称	検査項目	基準値	単位	解説
		(一般成人)		
Fe	血清鉄	男：54～181	μg/dL	血液中の鉄、鉄栄養状態の指標。
		女：43～172		
WBC	白血球	38～89	×100/μL	生体防御に働く。
RBC	赤血球	男：440～580	×10,000/μL	酸素を運搬する。
		女：380～520		
Hb	ヘモグロビン	男：13～18	g/dL	鉄を構成要素に持ち、酸素を運ぶ。
		女：12～16		
Ht	ヘマトクリット値	男：40～52	%	血液中に含まれる赤血球の割合。
		女：34～45		
MCV	平均赤血球容積	83～98	fL	赤血球の1個あたりの容積。
				赤血球の大きさを判断する。
MCH	平均赤血球ヘモグロビン量	27～32	pg	赤血球の1個あたりのHb量。
MCHC	平均赤血球ヘモグロビン濃度	32～36	%	赤血球の容積に対するHbの比。
PLT	血小板	13～35	×10,000/μL	出血を止める成分。
Fer	フェリチン	男：39.4～340	ng/mL	肝臓での貯蔵鉄の指標。
		女：3.6～114		

(桑島 実：臨床検査項目辞典、医歯薬出版、pp.43-46、2003より引用一部改変)

MCHC)、血小板 (PLT)、フェリチン (Fer) の計 10 項目において分析を行った。また、貧血を判断する基準値を以下の表 1 に示した。なお、貧血予備群 (reserve) として、基準値の最高値から最低値を引き、その数値の 10% を基準値の最低値に足し、算出した値を表 2 に示した。なお、本試験は、ヘルシンキ宣言の主旨に沿った北海道教育大学の倫理特別委員会 の承認 (北教大研倫 2017055001) を受けて、血液検査は専門家の医師のもとで実施された。

表 2. 貧血予備群の指標となる血液成分値

略称	検査項目	貧血予備群値	単位
Fe	血清鉄	男: ~66.7	μg/dL
		女: ~55.9	
WBC	白血球	~431	× 10/μL
RBC	赤血球	男: ~454	× 10,000/μL
		女: ~394	
Hb	ヘモグロビン	男: ~13.5	g/dL
		女: ~12.4	
Ht	ヘマトクリット値	男: ~41.2	%
		女: ~35.1	
MCV	平均赤血球容積	~86	fL
MCH	平均赤血球ヘモグロビン量	~28	pg
MCHC	平均赤血球ヘモグロビン濃度	~32.8	%
PLT	血小板	~17.4	× 10,000/μL
Fer	フェリチン	男: ~99.5	ng/mL
		女: ~25.7	

2.4 分析方法

貧血の指標となる 10 個の分析項目で、各血液成分の基準値を参考に 4 つのカテゴリ (High・Normal・reserve・Low) に分類し、各条件間 (性別・年齢別・レース前後) の影響を明らかにするために、カイ二乗検定 (独立性の検定) を用いて統計的に処理した。なお、有意水準は 5% 以下を有意、10% 以下を有意傾向とした。

3. 結果

3.1. 中高年マラソンランナーの貧血の実態について

10 個の分析項目 (血液成分) から貧血の判定に最も密接に関わっていると考えられる 4 項目を抽出し、項目ごとに貧血の頻度を算出した。なお、算出方法は、分析項目をそれぞれの基準値と比較し、4 つのカテゴリ (High・Normal・reserve・Low) に分類した結果の

Low 群の割合を「貧血」とした。(北村 (2003) 日本臨床検査医学会によると、Hb 値において男子で 13g/dl 以下、女子で 12g/dl 以下を貧血の判定に用いると定義されている。)

3.2 中高年マラソンランナーの貧血の発生頻度

1) Fe 値における貧血の発生頻度

Fe 値でみた貧血の割合は男子 3%、女子 28% であった。また、貧血予備群を含め算出すると、男子 24%、女子 56% であり、貧血予備群を含めると女子においては半数以上が低い値を示した。以下図 1 に男女別に基準値と比較し分類したものを示した。

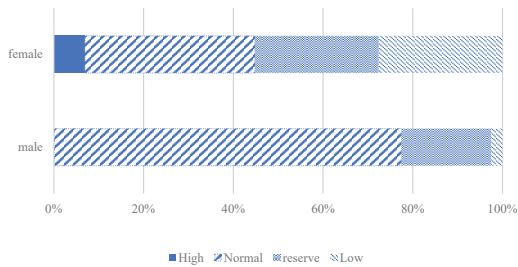


図 1. Fe の分類結果

基準値以上ものを「High」、正常値のものを「Normal」、貧血予備群として算出したものを「reserve」、基準値以下のものを「Low」とし分類した。

2) 赤血球数における貧血の発生頻度

赤血球数でみた貧血の割合は、男子 25%、女子 3% であった。また、貧血予備群を含め算出すると、男子 65%、女子 7% であり、男子では半数以上が低い値を示した。以下図 2 に男女別に基準値と比較し分類したものを示した。

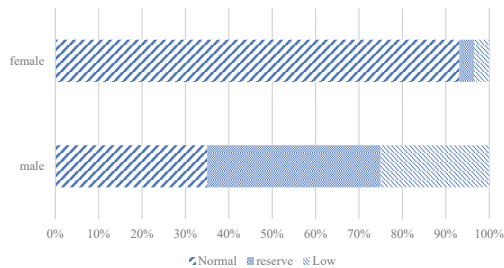


図 2：赤血球の分類結果

3) Hb 値における貧血の発生頻度

Hb 値でみた貧血の割合は男子 13%、女子 28%であった。また、貧血予備群を含め算出すると、男子 33%、女子 66%であり、女子では半数以上が低い値を示した。以下図 3 に男女別に基準値と比較し分類したものを示した。

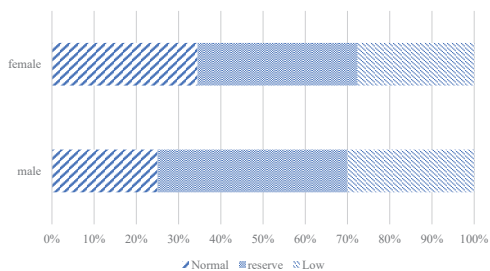


図 3：Hb の分類結果

4) Ht 値における貧血の発生頻度

Ht 値でみた貧血の割合は男子 25%、女子 10%であった。また、貧血予備群を含め算出すると、男子 60%、女子 31%であり、男子の半数以上が低い値を示した。以下図 4 に男女別に基準値と比較し分類したものを示した。

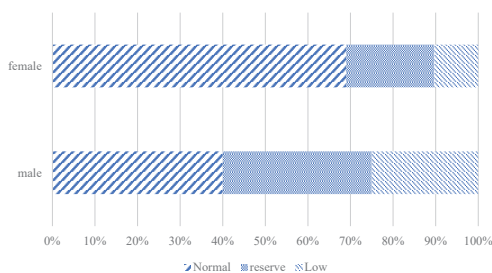


図 4：Ht 値の分類結果

以上の結果より、男女ともに貧血の発生頻度が高い傾向がみられた。

3.3 血液成分の男女比較について

2017 年北海道マラソン参加者 69 名を対象に、男女別に分析項目（血液成分）を基準値と比較し 4 つのカテゴリーに分類した。また、男女差を明らかにするために、分類結果を用い男女間でカイ二乗検定（独立性の検定）を行った。以下表 3 に分類結果および分析結果

を示した。

男女の比較では、10項目すべてに性別ならびに分類項目の間で有意（一部有意傾向）な関連性が認められた。なお Fe・Hb・MCV・MCH・MCHC の4項目について、男子において基準値の割合が高い傾向を示した。その一方白血球・赤血球・血小板・フェリチンの4項目については、女子において基準値の割合が高い傾向を示した。なお、Ht 値では、女子に高い基準値が示され、関連性において有意傾向が認められた。

分析項目により性別に基準値の割合において男女別に偏りが見られたが、貧血の判定基準でみると、男子に比べ女子に貧血の発生頻度が高い傾向が示唆された。

表3. 男女の比較結果

分析項目	分類項目	男子 (n = 40)	女子 (n = 29)	$\chi^2 =$	自由度	P 値
Fe	High	0	2	15.61	3	0.001
	Normal	31	11			
	reserve	8	8			
	Low	1	8			
白血球	High	0	0	8.85	2	0.012
	Normal	27	28			
	reserve	10	1			
	Low	3	0			
赤血球	High	0	0	23.57	2	0.001
	Normal	14	27			
	reserve	16	1			
	Low	10	1			
ヘモグロビン	High	0	0	7.41	2	0.225
	Normal	27	10			
	reserve	8	11			
	Low	5	8			
ヘマクリット値	High	0	0	5.81	2	0.055
	Normal	16	20			
	reserve	14	6			
	Low	10	3			
MCV	High	0	1	8.02	3	0.046
	Normal	37	20			
	reserve	3	5			
	Low	0	3			

分析項目	分類項目	男子 (n = 40)	女子 (n = 29)	$\chi^2 =$	自由度	P 値
MCH	High	11	3	10.74	3	0.013
	Normal	29	20			
	reserve	0	4			
	Low	0	2			
MCHC	High	0	0	7.62	2	0.022
	Normal	38	21			
	reserve	2	5			
	Low	0	3			
血小板	High	0	0	6.44	2	0.040
	Normal	35	27			
	reserve	5	0			
	Low	0	0			
フェリチン	High	0	0	16.92	2	0.000
	Normal	1	10			
	reserve	31	19			
	Low	8	0			

3.4 年齢別の比較

次に2017年北海道マラソン参加者64名を対象に、各検査項目において、分類項目と年齢別との関係を明らかにするために、カイ二乗検定（独立性の検定）を用いて分析を行った。以下表4に分類結果および分析結果を示した。

表4. 年齢別の比較結果

分析項目	分類項目	30代 (n = 12)	40代 (n = 22)	50代 (n = 25)	60代 (n = 7)	$\chi^2 =$	自由度	P 値
Fe	High	0	1	1	7	6.80	9	0.658
	Normal	7	13	12	0			
	reserve	3	5	8	0			
	Low	2	3	4	0			
白血球	High	0	0	0	0	8.01	6	0.238
	Normal	12	16	20	4			
	reserve	0	4	4	3			
	Low	0	2	1	0			

分析項目	分類項目	30代 (n=12)	40代 (n=22)	50代 (n=25)	60代 (n=7)	$\chi^2 =$	自由度	P 値
赤血球	High	0	0	0	0	19.19	6	0.004
	Normal	12	14	13	0			
	reserve	0	5	7	4			
	Low	0	3	5	3			
ヘモグロビン	High	0	0	0	0	2.93	6	0.817
	Normal	5	13	14	2			
	reserve	4	6	6	3			
	Low	3	3	5	2			
ヘマクリット値	High	0	0	0	0	12.27	6	0.056
	Normal	9	13	13	0			
	reserve	2	6	7	3			
	Low	1	3	5	4			
MCV	High	1	0	0	0	10.39	9	0.320
	Normal	7	20	21	7			
	reserve	3	1	3	0			
	Low	1	1	1	0			
MCH	High	1	7	4	2	5.63	9	0.777
	Normal	7	14	18	5			
	reserve	3	1	2	0			
	Low	1	0	1	0			
MCHC	High	1	0	0	0	7.29	6	0.295
	Normal	9	21	21	6			
	reserve	1	1	3	1			
	Low	1	0	1	0			
血小板	High	1	0	1	0	3.36	6	0.762
	Normal	10	21	23	6			
	reserve	1	1	1	1			
	Low	0	0	0	0			
フェリチン	High	0	0	0	0	8.73	6	0.189
	Normal	3	7	2	0			
	reserve	8	14	20	5			
	Low	1	1	3	2			

年齢別の比較では、赤血球において分類項目と年齢別との間で有意な連関性が認められ、年齢が高いほど赤血球の数値が低い値を示した。また、Ht 値では、連関性において有意傾向が認められ、赤血球同様年齢が高いほど低い値を示した。なお 2 項目以外の血液成分においては、有意な連関性は認められなかった。

3.5. マラソンレース前後における血液成分の比較について

2016年北海道マラソンに参加した男女40名を対象に、レース前とレース直後の血液成分について比較検討した。表5は男子を対象に、表6は女子を対象に、各血液成分別に、分類項目別のレース前後の人数に対して、カイ二乗検定(独立の検定)の結果を示した。

表5. マラソンレース前後の比較：男子

分析項目	分類項目	前 (n=13)	後 (n=13)	$\chi^2=$	自由度	P 値
Fe	High	1	1	1.05	3	0.789
	Normal	9	10			
	reserve	2	2			
	Low	1	0			
白血球	High	0	13	26.00	3	0.000
	Normal	8	0			
	reserve	4	0			
	Low	1	0			
赤血球	High	8	9	0.39	2	0.822
	Normal	3	3			
	reserve	2	1			
	Low	0	0			
ヘモグロビン	High	0	0	0.26	2	0.879
	Normal	8	9			
	reserve	3	2			
	Low	2	2			
ヘマクリット値	High	0	0	0.21	2	0.901
	Normal	7	8			
	reserve	4	3			
	Low	2	2			
MCV	High	0	0	0.25	1	0.619
	Normal	11	10			
	reserve	2	3			
	Low	0	0			
MCH	High	0	0	0.38	1	0.539
	Normal	11	12			
	reserve	2	1			
	Low	0	0			
MCHC	High	0	0	1.05	2	0.592
	Normal	10	11			
	reserve	2	2			
	Low	1	0			

分析項目	分類項目	前 (n = 13)	後 (n = 13)	$\chi^2 =$	自由度	P 値
血小板	High	0	0	1.04	1	0.308
	Normal	13	12			
	reserve	0	1			
	Low	0	0			
フェリチン	High	0	0	0.00	1	1.000
	Normal	7	7			
	reserve	6	6			
	Low	0	0			

表 6. マラソンレース前後の比較：女子

分析項目	分類項目	前 (n = 27)	後 (n = 27)	$\chi^2 =$	自由度	P 値
Fe	High	0	3	4.618	3	0.202
	Normal	16	18			
	reserve	6	3			
	Low	5	3			
白血球	High	0	24	43.385	3	0.000
	Normal	23	3			
	reserve	3	0			
	Low	1	0			
赤血球	High	0	0	1.022	2	0.600
	Normal	23	22			
	reserve	4	4			
	Low	0	1			
ヘモグロビン	High	0	0	0.365	2	0.833
	Normal	15	13			
	reserve	8	10			
	Low	4	4			
ヘマクリット値	High	0	0	0.164	1	0.685
	Normal	24	23			
	reserve	3	4			
	Low	0	0			
MCV	High	2	0	2.667	3	0.446
	Normal	21	21			
	reserve	2	4			
	Low	2	2			

分析項目	分類項目	前 (n=27)	後 (n=27)	$\chi^2=$	自由度	P 値
MCH	High	3	5	0.618	3	0.892
	Normal	18	16			
	reserve	3	3			
	Low	3	3			
MCHC	High	0	0	0.444	2	0.801
	Normal	21	21			
	reserve	4	5			
	Low	2	1			
血小板	High	1	1	0.000	1	1.000
	Normal	26	26			
	reserve	0	0			
	Low	0	0			
フェリチン	High	7	6	0.101	1	0.750
	Normal	20	21			
	reserve	0	0			
	Low	0	0			

マラソンレース前後の血液成分の変化については、男女ともに特に大きな違いは見られなかった。血液成分の中でレース前後で唯一白血球のみが男女ともに有意な連関性を示し、レース後において白血球数の上昇がみられた。それ以外の検査項目においては、特にマラソンレース前後での影響は認められなかった。

4. 考察

4.1. 中高年マラソンランナーの貧血の実態について

北村 (2003) 日本臨床検査医学会によると、貧血は、酸素運搬能力を示す Hb 濃度で判断するとされており、貧血の判断は Hb 濃度がそれぞれ成人男子で 13g/dl 以下、成人女子で 12g/dl 以下を目安にすると定義されている。西村ら (2013) は、一般市民ランナー計 380 人の貧血の発生頻度の調査において、男子 9.3%、女子 17.7% と女子に貧血の割合が高いことを報告している。そこで以上の定義に従い、本調査における貧血の発生頻度を計算すると、男子 13.0%、女子 28.0% となり、先行研究同様、男子に比べ女子の方が貧血の発生頻度が高い結果となった。しかし表 4 に示した通り 10 項目すべてに有意差は認められるものの、分析項目により男子が高い数値を示すものと女子が高い数値を示すものがあった。Fe・Hb・MCV・MCH・MCHC は男子が高い値を示し、白血球・赤血球・Ht・血小板・フェリチンにおいては、女子が高い値を示した。また、年齢差を検討した年齢別の比較においては、赤血球で有意差・Ht 値で有意傾向が認められたが、他 8 項目で違いはみられなかった。

Fe は血液中の鉄分のことで赤血球中の Hb などに含まれ、主に酸素運搬などに重要な働きをしている。体は常に鉄を必要とし、血液中に一定量を含んでいるようになっているが、

Feが減少する原因としては、鉄の摂取不足や出血、発汗とともに鉄が排出される。これらの原因から男子に比べ女子に低値がみられるのは、月経時による多量の出血などが推察され、内田ら(2003)は、月経や妊娠などの鉄の損失といった生理的要因と、栄養摂取状況が影響していることを報告している。なお、鉄不足が原因とされる貧血には「鉄欠乏性貧血」について留意しておく必要があろう。

次に、Hbは鉄を構成要素に持ち、酸素を運搬する最も重要な働きをしている。Hbは赤血球中に含まれるたんぱく質の「グロビン」と鉄を含む色素である「ヘム」とが結合した色素たんぱく質であるため、その原料となる鉄分がなくなるとHbを産生することができずHb値は低下する。また、西村ら(2013)は、男子では月間走行距離が長くなればHb値が低くなる傾向があり、一方女子に関しては月間走行距離とHb値に相関関係は認められず、走ることで生じる溶血や発汗による鉄排出の亢進よりも、女子特有の月経等の婦人科的出血がHb値の低下の大きな原因になると指摘している。今後走行距離等も含めて検討していく必要があるが、いずれにしても女子にみられるFeの低値によってHb値においても低値を示したものと推察される。

次に、赤血球はHbを持ち、酸素と二酸化炭素を運ぶガス交換の機能を果たす成分である。そこで、赤血球の詳細を示すのが、Ht値・MCV・MCH・MCHCである。Ht値は、血液中に含まれる赤血球の割合のことであり、MCVは平均赤血球容積といい、赤血球1個あたりの容積のことで赤血球の大きさを判断するものである。MCHは平均赤血球Hb量といい、赤血球1個あたりのHb量のことであり、MCHCは平均赤血球Hb濃度といい、赤血球の容積に対するHbの比のことであり、これら3つの成分は貧血の種類に大きく関与し、それぞれの基準値と比較したときの数値のあり方により3段階に分類され、貧血の種類を判別することができる。

1つは、MCV・MCH・MCHCの3項目で基準値を超えている場合、肝障害による「悪性貧血」(ビタミンB12および葉酸欠乏)が疑われる。次に、MCV・MCH・MCHCの3項目が基準値でありながら他の検査項目で貧血がみられる場合、「再生不良性貧血」(血液そのものを作る骨髄の働きが低下することで起こる)、「溶血性貧血」(赤血球の膜が本来の寿命よりも早く壊れてHbが流れ出すことで起こる)、急性出血によるものが疑われる。なお、再生不良性貧血は赤血球の他にも白血球や血小板も減少するのが特徴である。次に、MCV・MCH・MCHCの3項目で基準値を下回っている場合、「鉄欠乏性貧血」、「鉄芽球性貧血」、「サラセミア」が疑われる。江口(2016)は、鉄欠乏性貧血において、慢性出血(胃潰瘍・胃がん・大腸がんなどからの出血・月経過多など)、鉄吸収の低下(低酸症や胃全摘術後)、妊娠などにみられる鉄需要量の増加、食物中の鉄不足などが原因に挙げられると述べており、生活習慣や食生活と密接な関係にあることから、貧血のなかでも発生頻度が高いことが推察される。

そこで、本調査結果から、一般市民ランナーの貧血の種類について考えると、女子ランナーについては、赤血球値において女子が高い値を示し、3項目(MCV・MCH・MCHC)

において低い値を示していることから、鉄欠乏性貧血の傾向が認められる。一方男子においては、赤血球値が低い値であるものの、それら3項目においては正常値を示しているという点から、溶血性貧血の割合が高いものと推察される。鉄欠乏貧血および溶血性貧血はスポーツ選手に多く発現する貧血で、その原因として松本(2014)は、身体活動が増加するとより多くの酸素を運搬する必要があり、鉄の需要が増加することや、運動によって発汗量が増加すると汗とともに失われる鉄が増加すること、硬いアスファルトの上を長時間にわたって走行することによる足底への強い物理的衝撃が影響している。

また、赤血球に関する年齢別の違いは、年齢が上がるにつれて赤血球値が低下する傾向がみられ、西村ら(2013)は高齢者では鉄吸収能力の低下や、胃腸疾患に伴う吸収不足、慢性出血や鉄貯蔵組織の障害などでの過剰の喪失、感染症などでの利用の増大など基礎疾患などの条件なども重なり、鉄不足により貧血を招く場合が多いことを報告しており、加齢に伴い減少する確率が高まると推察される。なおHt値においても、性差や年齢差において、女子において高い傾向を示しており、これらは赤血球に応じた結果となった。

次に、フェリチンは肝臓での貯蔵鉄の指標であり、鉄が不足すると、貯蔵鉄であるフェリチンが利用され、正常を保っている。男子ではフェリチン値が低く示されており、これは溶血性貧血または鉄欠乏貧血と推察されたように赤血球中の鉄が不足しフェリチンが利用されたと考えられる。

以上より、中高年マラソンランナーにおいても、学生・スポーツ選手同様に貧血の頻度が高い可能性があり、加齢に伴う身体的な要因に加え、生活習慣や食習慣との関係が大いに影響していると考えられる。そこで、今後は栄養状態(食事)等の調査や練習内容における調査を通じて、貧血の原因をより明確にしていく必要がある。

4.2. マラソンレース前後における血液成分の比較について

マラソンレース前・直後の血液成分は表6・7に示した通り、男女ともに白血球以外にレース前後での変化はみられなかった。白血球は、骨髄に由来する顆粒球と単球、リンパ組織に由来するリンパ球の3種類があり、顆粒球はさらに好酸球・好中球・好塩基球に分かれ、外界から体内に侵入する細菌や異物に対して、食作用により防御の役割を果たしている。一方リンパ球はB・T細胞に分かれ、抗体を作り出す働きによって免疫に重要な役割を果たしている。また、精神的要因や身体的要因により変動しやすい成分である。本調査においても、男女ともにマラソンレース直後に白血球の過剰な増加がみられ、男子で100%、女子で83%の被験者が、出走前は基準値もしくは基準値以下であった値が、マラソンレース直後には、基準値を超える結果となった。

急性運動負荷の免疫系への影響として鈴木(2004)は、運動により白血球数が増加することは、運動の強度および持続時間に依存し、1時間以上の持久性運動では、好中球主体の白血球増多が生じ、これは早期反応(最大運動負荷時に分葉好中球主体の増加・カテコールアミン・血流の増加など)が運動中にあらわれ、後期反応(持久性運動負荷時に杆状核

好中球・コルチゾール・サイトカインなどの増加などの総白血球数の増加)が生体負担の上昇に応じて顕在化するためであるという。したがって、フルマラソンのように2時間～5時間にわたる持久性運動(激運動)では、運動中に一度白血球が増加(早期反応)し、生体負担の大きいフルマラソンでは白血球の増多(後期反応による)がみられたと推察される。また、鈴木(2004)は、白血球の増加は長時間に限らず短時間でも極端に激しい運動を行うことで高まることを示唆しており、これは、好中球の殺菌能が高まるわけではなく、生体内で組織損傷や炎症に関与する可能性が懸念され、偽足を形成し運動能の高まった好中球が血流の停滞する運動後に増加し、好中球・単球は組織に移行しやすい状態になると述べている。フルマラソンにおいては、運動中に様々な細胞が破壊されることにより、運動後増加した白血球が修復に働くと推察される。また、白血球以外にマラソンレース前後での変化はみられず、一時的な激運動により貧血になることや、貧血が悪化する可能性は低いと推察される。

5. まとめ

本研究では、中高年マラソンランナーを対象に、その血液成分から貧血状態について検討し、マラソンレース前後における血液成分の変化に基づいて、ランナーにみられる貧血状態について調査した。その結果、性差については特に女性ランナーにおいて鉄欠乏性貧血に陥りやすいこと、年齢別でみた場合には、加齢にしたがって赤血球数やHt値が低値になりやすいことが明らかにされた。さらにマラソンレース後においては、白血球数の著しい低下を示し、マラソンレースによる免疫系に対してかなりの負荷がかかっていることが推察された。本調査で得られた知見をふまえ、今後は練習内容や生活習慣(特に食習慣)等との関連的立場からさらなる詳細な分析を加え、貧血予防やその改善にかかる方策について検討していきたい。

参考文献

- 内田和宏、友納美恵子、城田知子、清原裕(2003)中高年女性の貧血と栄養摂取との関連。中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 36: 175-179.
- 川原貴(2003)スポーツと貧血-貧血の知識とアスリート特有の問題。スポーツメディスン, 15: 6-9.
- 北村聖(2003)貧血。日本臨床検査医学会: 150-154.
- 白井克佳、岡本久美子、永井純(1998)スポーツ選手におけるコンディションからみた貧血とパフォーマンス。臨床スポーツ医学, 15: 1345-1347.
- 鈴木克彦(2004)運動と免疫。日本補完代替医療学会誌, 1(1): 31-40.
- 西村脩平、小川彩音、石室屋美紀、嘉手納瑞穂、川上由紀子、高尾憲司、高尾理樹夫、堀部秀(2013)一般市民ランナーの貧血とその要因。Journal of Life Science Research.11: 17-20.
- 松本恵(2014)スポーツ栄養学 8章, スポーツ選手の貧血予防と栄養摂取。103-112.

参照URL

http://healthpress.jp/i/2016/06/25-2_entry.html (2016) : 日本陸上競技連盟公式サイト

江口正信 (2016) : 看護師のための検査値の早わかりガイドより <https://www.kango-roo.com/sn/k/view/2607>

山中 慎 (s_yamanaka@hokuyo.ac.jp)

中上級日本語学習者を対象とした授業報告

— 内容説明の作文タスクを中心に —

藤田 航輝
北洋大学

Report on a class for intermediate and upper-intermediate learners of Japanese
— Focusing on a composition task of explanation of contents —

FUJITA Koki
Hokuyo University

提要

笔者在北洋大学的面向中高级日语学习者的“日语会话IV”的课上，对5名日语学习者进行了让学习者听录音或者看图片后写作的训练。通过反复的练习，某位学习者针对图片进行写作的时候不再是单纯地罗列单句，而是学会了用连词将单句变成复句进行说明。课程结束后笔者进行了问卷调查，据问卷调查结果显示学习者自我感觉日语有所提高。但是，学习者当中有自身日语能力与本课程要求的日语能力之间存在很大差距的情况，这样的学生没有其他学生的帮助很难独立完成课上布置的任务。这种情况下应该如何应对成为笔者应该反省的问题。

1. はじめに

ある程度成熟した日本語学習者、とりわけ大学に通う留学生は、膨大な情報を整理し順序立てた説明を求められる場面が多く、それはレポート、論文作成のために学術的な文章を作成する能力にもつながる。北洋大学における中上級者向け日本語科目には、「日本語コミュニケーションⅠ」～「Ⅳ」の授業が存在し、生活日本語から身近なトピックに関するディスカッションの方法までを段階的に習得・訓練することを目的として設計されている。2023年度秋学期に開講された「日本語コミュニケーションⅣ」においては、全日程のおよそ半分の時間をかけ、学習者の説明能力向上を目的とした授業を実施した。本稿では、学習者の文生成に関わる課題に言及しつつ、その成果報告を行う。

2. 授業計画

2023年度日本語科目「日本語コミュニケーションⅣ」は、①膨大な情報の中から重要なものを拾い上げ、簡潔にまとめることができること、②アカデミックな言葉で説明したり議論したりできることを到達目標として掲げる中上級者向けの科目である。本科目の授業計画は表1の通りである。2023年11月現在、本科目は第10回が終了した。特に第7回までの授業では、前年度と比し生教材を大幅に増やし、より実生活に近い日本語に触れさせることを試みた。

表1 2023年度「日本語コミュニケーションⅣ」授業計画

回	授業名	概要	備考
1	ガイダンス	自己紹介ならびに各授業の説明	10月4日実施
2	ニュース・新聞を読んで説明する①・②	インターネットや図書館を利用し、好きな新聞記事を探し、簡単に要約して説明する練習	① 10月11日実施
3			② 10月17日実施 (補講)
4	アナウンスを聞いて説明する①・②	Youtubeの動画や録音音声を用いて、公共交通機関やデパートの音声案内等を聴きとる練習	① 10月18日実施
5			② 10月25日実施
6	写真・映像を見て説明する①・②	静止画や十数秒の短い映像を見てその内容を説明する練習。2回目の授業では何も見えない他の学生が代表者の説明を聞いて静止画を再現するアクティビティを実施	① 11月1日実施
7			② 11月8日実施
8	要約・言い換え①・②・③	中級レベルの文章から要点を抜き出しまとめる練習。単語や表現の言い換えを行う練習。使用する文章は『テーマ別 中級から学ぶ日本語〈三訂版〉』より選定する。	① 11月15日実施
9			② 11月22日実施
10			③ 11月29日実施

回	授業名	概要	備考
11	トピック①	中級～上級レベルの文章を読み、その内容についてペアディスカッションとグループディスカッションを各回交互に行う。 なお、使用する文章は新聞記事や読解テキストより選定する。 (『テーマ別 上級から学ぶ日本語〈三訂版〉』、『上級学習者のための日本語読解ワークブック ― 試験に強くなる! ―』)	
12	トピック②		
13	トピック③		
14	トピック④		
15	トピック⑤ 授業の振り返りとまとめ		

3. 授業の成果

3.1. 学習者について

本科目の履修人数は6名であったが、うち1名は第2回以降出席していないため、本稿ではその他の5名の学習成果について述べる。この5名はいずれも中国語母語話者である。また、学習者は全員日本語学習歴1年以上であるが、編入学生も含まれ、日本滞在期間に関しては半年未満である。また、交換留学生として来日した学生が2名本科目を履修した。

表2 「日本語コミュニケーションⅣ」履修者一覧

学習者名(仮称)	日本語学習歴 / 日本語能力	年次
S1	1年以上2年未満 / N2相当	1年次
S2	1年以上2年未満 / N2相当	3年次
S3	2年以上3年未満 / N3相当	3年次
S4	3年以上4年未満 / N3相当	交換留学生
S5	3年以上4年未満 / N4相当	交換留学生

3.1.1. S1

全体的に発話数が多く、積極的に参加する姿勢が見られた。時にはS2とともに他の学習者を、母語を用いながら口頭でサポートすることが多かった。今回行った一連のタスクにおいては平均して最も優秀な成果を修めた。

3.1.2. S2

S1と同様、積極的な発言が多く、また頻繁に他の学習者のサポートに回っていた。S3とは特に仲が良く、サポートする場面以外でも、S3とともに説明文を考えたり単語を調べたりする様子が多くみられた。

3.1.3. S3

日常会話を行うことはできるが、聴解に対して苦手意識を持っており、授業後のアンケートにおいても感想として同様の内容を述べている。困った場面では S2 と相談することが多く、結果的にペアでの協働となることがあった。

3.1.4. S4

交換留学生として来日。日常会話は問題なく行うことができる。第4回～第5回においては断片的な情報を聴きとって、おおよその内容を推測できていた。しかし、内容説明は読み取ったもしくは聴きとった内容をそのままリピートすることが多く、要約することに対して不慣れな印象を受ける。

3.1.5. S5

S4 と同様、交換留学生として来日。日本語学習歴は今回の学習者の中では S4 と並んで最長であるが、日本語能力試験を受けた経験はない。授業中の発言が少なく、指名しても消極的な姿勢を見せることがあった。一連のタスクは基本的に S4 の手助けがあって進めることができた。

3.2. 各回の成果

3.2.1. 第1回

自己紹介ならびに授業全体のガイダンスを行った。第2回～第7回の概要については、「物事の要点を把握しつつ説明する能力の向上を目指す」のものであると説明した。その後、図書館にて閲覧可能な全国紙、地方紙、雑誌等の確認や、インターネットで閲覧可能な代表的なニュースサイトを紹介し、各自が自由に調べることができるよう導入した上で、第2回の授業で自分が選んだ任意の記事一本の内容を説明するタスクを行う旨を伝え、1週間の準備期間を設けた。

3.2.2. 第2回～第3回

S4、S5 は2週とも欠席であったため、S1、S2、S3 の成果についてのみ述べる。各学生が選んできた新聞記事と説明内容は、それぞれ以下の通りであった。なお、第3回については本来のスケジュールでは行われず、別に補講の時間を設けた。

表3 第2回～第3回における学習者の成果

学習者	回	記事内容	学習者による内容説明
S1	第2回	ワクチン開発に関するノーベル医学賞受賞	「スウェーデンのカロリンスカ研究所は、(中略)と発表しました。」 「授賞理由は、(中略)だからです。」 「mRNA とは、(中略)という意味です。」
	第3回	東京五輪における汚職事件に有罪判決	「東京五輪・パラリンピックを巡る汚職事件で、(中略)判決を言い渡しました。」
S2	第2回	中国産の花粉症禁輸による国内農家の反応	「梨やリンゴの生産に使う中国産の花粉の輸入停止を受け、国内産地に波紋が広がっています。」 「一方、農水省が(中略)声も上がっています。」
	第3回	花粉症「緩和米」支援における政府の対応について	「花粉症「緩和米」支援、政府対応、きょうにも決定します。」
S3	第2回	子どもの自殺防止について	「子どもの自殺防止は大人の責務です。」 「警察庁の自殺統計に基づく厚生労働省のまとめによると、(中略)です。」 「自殺の原因は(中略)です。」
	第3回	原ゆたか氏インタビュー	「『かいけつゾロリ』は(中略)認定されました。」 「ゾロリは、毎回最後に失敗する反面教師です。」

第2回、第3回ともに、学生全員が記事の本文を引用する形で内容について述べていた。理解できていない専門用語もみられたが、記事の見出しなどから、概要や要点は把握できており、関連する話題について意見を表明する学習者もみられたことから、内容理解はできていたといえる。しかしながら、要約、内容説明とするには、記事本文を読み上げているのみに留まる印象を受けた。特に第3回のS3の記事はインタビュー記事のため、読み上げるだけでは説明の体をなさないものであった。第3回の中で、引用が長くなりすぎない意識を持つことと、引用節を用いて「という記事です。」「という話です。」などの表現を用いるよう指導したところ、第4回以降に改善がみられた。

3.2.3. 第4回～第5回

学習者は2週とも全員が出席した。当初は第3回で導入したように、引用節を用いた説明をさせることを想定していたが、誘導がうまくいかず、音声数を数回流した後、内容を問う質問に対して、学習者はいずれも聴きとった文言をリピートする形で回答した。各々の聴き取った文言をまとめておおよその内容が明らかになった（もしくは著者によってスク립トが開示された）のち、再度内容の説明を要求したところ、S5を除く4名は内容を要約する形で説明文を作成することができた。

第4回～第5回で使用した音声素材は、①駅のホームのアナウンス（列車の到着）、②電車の車内放送（緊急停止時）、③高速バスのアナウンス（降車時の注意事項）、④店内アナウンス（お酒とたばこの販売について）、⑤会場アナウンス（講演会）等の合計12点である。

表4 第4回～第5回における学習者の成果

学習者	学習者の様子	学習者の発話（聴きとり）	学習者による内容説明
S1	いずれの音声においても、おおよその内容を理解できている。聴き慣れない単語、知らない単語でも意味の推測や、音の正確な聴きとりができています。	「10個編成」 「未成年者の飲酒とたばこは禁止です。」 【実際の音声】 「10両編成」 「未成年者の飲酒喫煙は法律で禁止されております。」	【音声②】 「(この音声は) 危険な信号を受信して電車が緊急停車し、ご迷惑をおかけし申し訳ありませんというアナウンスです。」
S2	再生速度を落とせば、いずれの音声においてもおおよその内容を理解できている。全体は聴きとれずとも、部分的な要素から内容を推測することができる。	「ご迷惑をおかけし…」 「定期券ははっきり見せます。」 【実際の音声】 「ご迷惑をおかけし、大変申し訳ございませんでした。」 「定期券・回数券ははっきりとお見せください。」	【音声③】 「(バスを) 降りるときはお忘れ物に気を付けてと言います。」
S3	1分～2分程度のアナウンスの中で、重要な単語は聴きとることができ、そこからおおよその内容を推測できている。	「外には出ないでください。」 【実際の音声】 「列車の外には絶対降りないようお願いします。」	【音声①】 「(この音声は) まもなく駅に電車が到着します。」
S4	1分～2分程度のアナウンスの中で、重要な単語の聴き取りは可能。そこからおおよその内容を推測できている。聴き慣れない単語、知らない単語であっても音だけ聴きとれることがある。	「(お酒とたばこの) 販売はお断りです」 【実際の音声】 「未成年へのお酒、たばこの販売はお断りしております。」	【音声④】 「(この音声は) お酒とたばこはたちからと言います。」

学習者	学習者の様子	学習者の発話（聴きとり）	学習者による内容説明
S5	挨拶や謝罪といった基本的な文言の聴き取りは可能。また、聴こえた音声をリピートすることはできるが、単語として意味を理解出来ていないものがある。	「お疲れさまでした。」 「お願いします。」 【実際の音声】 「長らくのご乗車、お疲れ様でした。」 「座席よりお立ちになりませんよう、お願い申し上げます。」	【音声②】 内容説明の要求に対し「わかりません」と答えたが、アナウンスの内容が「乗客への謝罪」であるという点は理解できていると思われる。

学習者の内容説明の特徴としては、S2やS4の説明にみられるように、「(話し手が)～と言います」と引用節を選択しながらも、文末表現が「る形」となっている点が挙げられる。授業ではより自然な形として「ている形」を用いるよう指導した¹。また、授業中に使用した音声素材の中で登場する語彙や文型について、学習者に新たに導入するものがあつた。

【新たに導入した語彙・文型】

- ・ [好ましい状況や目標など] + よう (に) + V する / V たい
(水谷、松本、高橋 (2015) より抜粋)
- ・ リクライニングシート
- ・ 喫煙／禁煙
- ・ 遠慮
- ・ おつかい
- ・ 何卒

3.2.4. 第6回～第7回

第6回のみS4が欠席した。第6回では、タスクの説明のために用いた例も含め、学習者全員でモニターに映される写真や映像素材（合計12点）について内容説明に挑戦した。第7回では、1名の学習者がとある写真について、それが見えていない他の4名に説明し、4名は説明を聞いて写真を再現したイラストを描くというゲーム方式を採用した。

表5 第6回～第7回における学習者の成果

学習者	学習者の様子	学習者の発話／内容説明
S1	<p>写真や映像を見て細かな情報まで読みとることができる。それらを適切な語彙を用いて説明することができる。文字情報がないためか、内容説明のために、まずは読みとった情報を複数の短い単文として作成し、情報を整理したのち一文にまとめるというプロセスを踏んでいた。</p>	<p>「男と女がいます」 →「男と女がいて、右に男で、左に女です。」</p> <p>「椅子や机もあります。」「男と女は椅子に座っています。」 →「椅子や机もあって、二人は椅子に座って会話しています。」</p> <p>「景色は、前は草地で、後ろに山があります。」 「二つのテントがあって、右は少し小さくて左は大きいです。」</p>
S2	<p>写真や映像を見て細かな情報まで読みとることができる。分からない単語は調べるなどしていたが、基本的な文の生成（主語、述語の理解、ている形の使用）は可能。また、第6回までと比較して単文で説明することが少なくなった。</p>	<p>「2人の子供がいて、右が男の子で、左が女の子で、秘密話をしています。」</p> <p>「女の子は白い服を着ています。」「白い服の女の子は、髪が2本です。(ツインテールの意)」 →「女の子は白い服を着ていて、髪が2本です。」</p>
S3	<p>基本的に辞書を用いて単語を調べながら短い単文を作成できる。第7回の時点で複文の作成ができるようになる。ただし、主語が同一の異なる2文を一文にまとめる行程で、主語の省略などは行わずそのまま接続することが多い。</p>	<p>「畑に5人の農民がいます。」 「5人の農民は帽子をかぶっていて、中央の農民の前にコンバインがあります。」 「後ろに山で、天気は晴れです。」</p> <p>→「畑に5人の農民がいて、5人の農民は帽子をかぶっていて、中央の農民の前にコンバインがあります。」</p> <p>※実際には畑ではなく田んぼであり、コンバインではなく田植え機であった。</p>
S4	<p>基本的に辞書を用いて単語を調べながら短い単文を作成できる。他の学習者と比較して言語化に時間はかかるが、写真や映像に含まれる細かな情報を説明することができる。他の学習者の手助けもあって、最終的には断片的な情報を接続助詞「ながら」等を用いてまとめることができる。</p>	<p>「女性と犬が草地でいます。」 「女性はうつ伏せになっています。」 「女性は両手で犬の首を撫でています。」 「カメラを見ています(カメラ目線の意)」 「天気は晴れです。」</p> <p>→「女性と犬が、晴れの草原にいます。」 「女性はうつ伏せでカメラを見ながら犬の首を撫でています。」</p>

学習者	学習者の様子	学習者の発話／内容説明
S5	写真や映像に含まれる膨大な情報から、核となる情報を読みとり、言語化することができる。辞書を用いて調べた単語を文法関係なく並べているだけではあるが、他の学習者に基本的な情報を伝えることができていた（第7回）。また、他の学習者の手助けがあれば、短い文を作成することができる。	<p>「男の子フラフープをしています。」 「道路で車があります。」</p> <p>※実際の写真では車はあくまで男の子の後方に置かれた背景要素であったが、S5の説明により他の学習者は男の子の横にあるものと捉えていた。</p>

特に第7回では学習者の反応は良く、ゲーム性を取り入れたタスクが学習者同士の日本語でのコミュニケーションを促進したような印象を受ける。また、回答者側が描いたイラストを見て説明者側の学生が自身の説明内容について自己評価を下す場面も見られた。

3.3. 学習者の変化

S1は、授業開始以前から十分な読解・聴解能力を持ち合わせていたものの、文字情報がゼロの状態、特に視覚情報からの言語化には不慣れだったのか、第6回～第7回では文作成の際に写真や映像から読み取った内容をまず短めの単文として言語化し、その後それらの情報をまとめるというプロセスを踏んで説明文を作成していた。また、第2回～第3回では、新聞記事の本文の大部分を読み上げる形で内容説明を行っていたが、第8回以降では、同程度の長さの文章に対し、文中の要点を適切に読み取った上で即座に要約文を作成できるようになった。

S2、S3、S4は、音声や写真・映像から読みとった情報を言語化する際、単文で出力されることが多かったが、第7回以降、並列節を用いて複文を作成することが多くなった。第8回では、中程度の長さの文章において、段落ごとに1文での要約を作成できるようになった。

S5は、一定の読解能力はあるものの、特に文章作成能力において、それまでの日本語学習歴に対して本科目が要求する日本語能力との乖離が大きいように見受けられた。そのため、一連のタスクを単独でこなすことが困難であると予想された。結果的に説明文の作成や著者による指導の理解など、多くの場面で他の学習者の手助けが必要であったが、第7回のゲーム形式を採用したタスクでは自力で単文を作成することができた。

4. 授業評価アンケート

第7回が終了した2023年11月8日（水）～11月22日（水）までの期間、Web上にて授業評価アンケートを実施した。設問数は履修の動機や各回の評価、第7回までの全体的な

満足度などを問う 16 問で、22 日時点で学習者 5 名全員からの回答を得ることができた。

表 6 授業評価アンケートの回答結果²

番号	設問内容	選択肢	回答
1	氏名	なし(自由記述)	非公開
2	学籍番号	なし(自由記述)	非公開
3	日本語学習歴	半年未満	0名(0%)
		半年以上～1年未満	0名(0%)
		1年以上～2年未満	2名(40%)
		2年以上～3年未満	1名(20%)
		3年以上～4年未満	2名(40%)
		4年以上～5年未満	0名(0%)
		5年以上	0名(0%)
4	日本語能力	N1もしくはN1相当	0名(0%)
		N2もしくはN2相当	3名(60%)
		N3もしくはN3相当	1名(20%)
		N4もしくはN4相当	1名(20%)
		N5もしくはN5相当	0名(0%)
5	履修動機	なし(自由記述)	「学校のルールです」 「学校のルール」 「日本語をアップしたいと思います」 「コミュニケーション能力を上げたい」 「日本語の聴力とコミュニケーション能力を高めたい」
6	第 2～3 回 「ニュース・ 新聞を読む ①・②」の 内容評価	よかった	2名(40%)
		どちらかという とよかった	1名(20%)
		どちらとも いえない	0名(0%)
		どちらか という とよ くな かった	0名(0%)
		よくな かった	0名(0%)
		2回とも 欠席 して いた	2名(40%)
7	6.の回答の理由	なし(自由記述)	「補講の時間が忘れてしまいました、内容は難しく、もっとも面白いと思います、」 「おもしろい」 「新聞を読むことができる」 「知らない日本語が勉強できれば、どんな授業でも良い」 ※無回答 1 名

番号	設問内容	選択肢	回答
8	第4～5回「アナウンスを聞いて説明する①・②」の内容評価	よかった	3名(60%)
		どちらかというよかった	1名(20%)
		どちらともいえない	0名(0%)
		どちらかというよくなかった	0名(0%)
		よくなかった	1名(20%)
		2回とも欠席していた	0名(0%)
9	8.の回答の理由	なし(自由記述)	「日本語の能力が上昇できる。」 「おもしろい」 「聴解ダメです」 「知らない日本語が勉強できれば、どんな授業でも良い」 ※無回答1名
10	第6～7回「写真や映像を見て説明する①・②」の内容評価	よかった	5名(100%)
		どちらかというよかった	0名(0%)
		どちらともいえない	0名(0%)
		どちらかというよくなかった	0名(0%)
		よくなかった	0名(0%)
		2回とも欠席していた	0名(0%)
11	10.の回答の理由	なし(自由記述)	「一番面白いと思います」 「おもしろい」 「授業の式が面白かったです」 「知らない日本語が勉強できれば、どんな授業でも良い」 ※無回答1名
12	日本語能力は向上したと思うか	向上したと思う	3名(60%)
		どちらかという向上したと思う	1名(20%)
		どちらともいえない	1名(20%)
		どちらかという向上しなかったと思う	0名(0%)
		向上しなかったと思う	0名(0%)

番号	設問内容	選択肢	回答
13	授業の難易度	難しかった	1名 (20%)
		どちらかというとなんか難しかった	2名 (40%)
		どちらともいえない	2名 (40%)
		どちらかというとなんか簡単だった	0名 (0%)
		簡単だった	0名 (0%)
14	13. の回答の理由	なし (自由記述)	<p>「自分の程度が不足なんです。」 「自分の程度が不足なんです。」 「私はいつも文の結構を身に付けたいと思います。正しい日本語が話せない、どうしようかなあー」 「難しいこと易しいこともある」 「特に理由はない、ただ難しくないと感じているだけで、ただし自分の日本語の表現能力が低いいため、話すことは簡単ではありません。」</p>
15	授業の良かったところ	なし (自由記述)	<p>「日常会話について、能力上昇できる！」 「日常会話につて、能力上昇できる。」 「先生が面白い」 「会話力が少しあがったかもしれない」 「人が少ない、文系の考え方をめぐる出題。個人の提案ですが、後で物語を読んでから話すか、単にテーマを与えて物語を語ると良いでしょう。一度読んだ物語を語ることができるなら、記憶力は確かに優れています。物語のプロットと要約を覚えるだけでなく、高度で正確な総合能力も必要です。物語を語るには、柔軟な言語能力が必要で、これには論理的な分析能力も含まれます。脳が物語のプロットを処理し、正確に表現する能力も求められます。以前はニュースのまとめ、リスニング、画像の内容の説明など、私にとっては文系に焦点を当てた能力を必要とするものでした。ですので、以前のコースの評価は良好でした。」</p>
16	授業の改善点	なし (自由記述)	<p>「先生の喋るスピードが早すぎだと思います。」 「先生の喋るスピードが早すぎ」 「もっと簡単になった方がよいと思います」 「皆の語彙力が低いため、授業中はもっとヒントを与える方がよい、授業のスピードが低いから。後は、情報量が少し少ない、授業の前に、いろんな予習資料がほしい。」 「何にもない」</p>

4.1. 理解度

設問5「履修の動機」については「日本語能力の向上のため」と3名が回答した。しかし、交換留学生として来日した2名については「学校のルール」と回答していたため、本人の日本語能力とは無関係に履修しなければならなかったものと考えられる。特にS5に関しては先述の通り、他の学習者の手助けがあって何とかタスクをこなしており、本科目で要求される日本語レベルとの乖離が大きいように見受けられた。

各回の評価については、設問6（第2～3回の授業内容に対する評価）、8（第4～5回の授業内容に対する評価）、10（第6～7回の授業内容に対する評価）において「よかった」「どちらかというよかった」「どちらともいえない」「どちらかというよくなかった」「よくなかった」の5段階で回答してもらった³ところ、ネガティブ寄りの回答は設問8「第4回～第5回の授業評価」における「よくなかった」の1件のみであった。なお、その理由については設問9において「聴解が苦手だから」との回答があった。また、第6課～第7回については、ゲーム形式を採用したこともあってか、学習者全員が「よかった」と回答していた。

設問12「自身の日本語能力が向上したと思うか」という問いに対しては、「向上したと思う」が3名、「どちらかという向上したと思う」が1名、「どちらともいえない」が1名であり、学習者のうちの多くが自身の日本語能力が向上したと自覚している回答結果となった。設問15「本科目の良かったところ（自由記述）」において「日常会話能力が向上した」との回答があったことから、履修の動機であった「日本語能力の向上」というニーズは学習者の中で部分的にでも満たされたと認識してよいだろう。

4.2. 満足度

前節にて述べた学習者の満足度とは裏腹に、設問13「本科目の難易度」については、「難しかった」が1名、「どちらかという難しかった」が2名、「どちらともいえない」が2名という回答結果となった。その理由（設問14）として、「自身の日本語能力の不足」に言及している学習者が5名中4名であった。そのため、授業の理解度については、タスクの難易度調整や著者の指導内容に問題があったものと考えられる。

第2回～第3回における新聞記事の要約では、学習者がそれぞれ新聞記事を選定したため、記事の長さや内容の難しさ、使用されている専門用語の理解などに苦勞する側面があった。図書館の利用を促す目的もあったが、結果的に裏目に出てしまった印象を受ける。また、第4回～第5回に関しては、公共交通機関や店舗における放送音声の特徴として、基本的に聞き手に対する尊敬語が用いられていることが挙げられるが、「お待ちください」、「お忘れ物」、「お立ちになりませんよう」などの文言が、かなりの高頻度で登場するため、学習者が知っている単語であっても、普段馴染みのある形態では用いられていないことで、正確に聴きとれない恐れがあった。このことについて事前説明を行わなかったことで、結果的に学習者の混乱を招いてしまった可能性がある。

しかしながらS2に関しては、設問15「日本語コミュニケーションⅣのよかったところ

(自由記述)」について、「(説明には)柔軟な言語能力が必要で、これには論理的な分析能力も含まれる」としており、著者が設定した一連のタスクの意図、目的を正確に理解しているように見受けられた。

4.3. 課題

今回は履修者が5名であったため、少人数での開講となった。それゆえに学習者一人ひとりに目が行き届き、各人の作成した文に対し、時間をかけた指導を行うことができた。しかしながら、学習者の日本語能力の個人差が大きかった事態に対する対処が適切だったとはいええない。特に一連のタスクについて、筆者は第7回を除き、基本的に個人での作業を想定していたが、結果として学習者同士が助け合う協働作業の様相を呈していた。S5に関してはそれによって得られた恩恵は大きく、学習のモチベーション維持にもつながったものと考えられる。今後は、各学習者へのフォローに加え、ペアワークやグループワークを想定したタスクを取り入れるなどして、学習者の日本語能力の個人差や、交換留学生在が履修することに適切に対処するための備えが必要だろう。

また、設問16「改善点」において「話すスピードが速い」「予習するための資料を提供してほしい」等の指摘や要望を受けたことから、著者の指導や、学習者に提供する教材についても、改善の余地がある。振り返り用のプリントについては、第15回の授業において配布する予定であったが、今後は各回に宿題や補足資料等の形で配布するか、あるいは第2回～第3回で使用する新聞記事を、記事内容の難しさを統一することも兼ねて学習者ではなく著者が選定し、事前に配布する等の対応をするのがよいだろう。

5. おわりに

今回は生教材を多く用いたタスク中心の授業を設計、実施し学習者の観察を行った。その結果、第2回～第7回までのタスクにおける成果として最も顕著だったのは、「単文での言語化→並列節等を用いた複文の作成ができる」という変化であった。ただし、少人数クラスならではの強みである一人ひとりへの重点的な指導や、学習者同士の協働による成果でもあるため、10名以上の履修者がいる状況で同様の成果が得られるかは定かではない。また、第4回～第5回において内容説明の文末表現が「る形」となっている学習者が確認されたが、聴覚情報のみからの言語化とはいえ、「ている形」が選択されない理由については特に追究・考察を行うことはできなかつたため、今後の研究にて明らかにしたい。

注

- 1 内容説明の文において、「ている形」が用いられることや、「る形」との対立については、アスペクト的観点から様々な議論、研究が行われているが、本稿ではその文法的特性や機能に関して特に追究しない。
- 2 設問1「回答者名」ならびに設問2「学籍番号」は非公開のため一部編集を行っている。また、表6に示した回答結果は Web 上においても確認できる。<https://docs.google.com/forms/d/1GKVt6fu6GhZxw4gKY1fx1ygNnkqAQDMS-ckXBJQEYZQ/viewanalytics>
- 3 設問6、8、10においては、授業に関する評価とは別に「2回とも欠席していた」等の選択肢を設けた。また、設問7、9、11では、設問6、8、10の回答の理由や、授業で学んだことなどを自由記述で回答してもらった。

使用教材（本文にて言及したもの）

【第2回～第3回】

- S1 日本経済新聞「「mRNA」にノーベル賞 ワクチン開発カリコ氏ら」2023年10月3日 朝刊
 日本経済新聞「五輪汚職、贈賄で有罪判決」2023年10月11日 朝刊
 S2 日本農業新聞「花粉症禁輸 産地に波紋」2023年10月4日 朝刊
 日本農業新聞「花粉症「緩和米」支援 政府対応、きょうにも決定」2023年10月11日 朝刊
 S3 北海道新聞「子ども自殺防止 大人の責務」2023年10月3日 朝刊
 朝日新聞「〈リレーおびにおん〉長すぎる：19失敗こりず次へ、元気出すんだぜ！原ゆたかさん」2023年10月11日 朝刊

【第4回～5回】（いずれも Youtube より）

- 音声①「【日本語・聴解】 駅のホームのアナウンス [初級]」<https://youtu.be/Whu0cPfyipiw>
 音声②「【日本語 | 聴解】 電車のアナウンス～急停車した時～」https://youtu.be/QTJ22fONsko?si=q2mQeiVBbFTtU44_
 音声③「【日本語 | 聴解】 バスのアナウンス」<https://youtu.be/1F6Up9shABQ?si=rY9RqXXtUXzb3reY>
 音声⑤「【現場映像】 司会進行例 | 講演会開演前アナウンス (アドリブ入り)」<https://youtu.be/54zYJjQ2xHM?si=DQBR5mtRrxw4DCj>

【第6回～7回】（いずれも photoAC より）

- S1「森の中でキャンプする夫婦 (アウトドア)」
 S2「内緒話をする兄妹」
 S3「芝生の上で愛犬と寝転ぶ若い女性」
 S4「田植えをする日本人3」
 S5「フラフラブをする男の子」

参考文献

松田浩志 (2016) 『テーマ別 上級から学ぶ日本語 (三訂版)』研究社

松田浩志・亀田美保 (2014) 『テーマ別 中級から学ぶ日本語 (三訂版)』研究社

水谷信子 (監修・著)、松本隆、高橋尚子 (2015) 『わかる！話せる！日本語会話 発展文型 125』Jリサーチ出版

目黒真美 (2010) 『上級学習者のための日本語読解ワークブック ― 試験に強くなる！ ―』アルク

参考URL (最終情報取得日：2023年11月30日)

photoAC (<https://www.photo-ac.com>)

videoAC (<https://video-ac.com>)

Youtube (<https://www.youtube.com>)

藤田 航輝 (ko_fujita@hokuyo.ac.jp)

東洋思想再考

— 風水とは何か —

山田 利一・岡迫 晃
北洋大学

What Is Fengshui? Reappraisal of Ancient Chinese Philosophy

YAMADA Toshikazu · OKASAKO Akira
Hokuyo University

Abstract

Fengshui is generally believed to be an irrational and outmoded idea or a superstition in modern Japan. Is the ancient Chinese thinking really irrational and outdated? The purpose of this paper is to clarify the essence and transformation of ancient Chinese fengshui thought, and to describe how it influenced the development of the ancient Japanese nation.

序

中国語圏において、風水は今日でも大きな社会的影響力を誇示している。対照的に日本では、風水への一般的関心は低く、評価も低い。とはいっても、書店の棚にはいく種類もの「風水本」が置かれており、一定の読者層の存在が想像される。さらに政財界のリーダーが風水と表裏一体の関係にある古典『易経』を愛読してきたことはつとに知られている。本稿の目的は、この矛盾に満ちた、くわえて重層的かつ多義的な思想の背景を探り、その本質を解明する、すなわち風水とは何か、という問いに対する概略を提示することである。

仮説的に言えることは、以下に詳述するが、厳密な意味での風水——地理学的、地質学的側面——は原初的かつ原理的には科学、すなわち合理的な思考体系であったということである。しかし風水には当初から占いとしての側面があり、両者は渾然一体となっており、後者の性質を排除したかたちでの風水論は成立しない。ゆえに風水は一般的には学問的分析には馴染まない。しかし一方において、それは数千年の歴史を生き延びた経験則であり、貴重な人類の知的遺産でもあり、この本質を理解することなく「迷信」のひとつで一顧だにしないのもまた非学問的かもしれない。

ところで本研究の契機となったのは、著者の一人である山田が同僚の岡迫から風水（占い）にまつわる多くのエピソードを聞かされ、その摩訶不思議な性質に興味を感じたことであった。とりわけ山田が興味をそそられたのは風水占いであった。占いという和未来を予知する部分と、現状分析と二つの側面があるが、岡迫の性格分析は際立っていた。山田の性格は本人が気づかない点も含め正確な分析をおこない、山田の家族の性格に関しては、面識がまったくないにもかかわらず、山田よりも的確に性格分析をおこなった。その結果、山田は高い精度を示した風水占い、その母体である風水思想に大きな興味を感じ、研究をはじめることになった。

そしてわかったことは、風水をひとことで説明することはできないということだ。なぜならそれは数千年の歴史があり、様々な側面や性格を有すると同時に、様々な流派が存在するからだ。にもかかわらず、本稿の二人の著者は風水の起源と発展を概略することで、風水の本質理解に少しは迫れるのではないかと期待している。最終的に本稿は山田が文責を負っているが、執筆に際しては岡迫と逐一議論し、協議し、草稿を検討した。

最後に、参考文献からも明らかのように、風水は過去においても正当な学問対象であったし、今日でも、例えば中部大学の渋谷鎮明教授による「吉地」研究プロジェクトや、同じく中部大学の渡邊欣雄教授の論文「日本風水史」に見られるように、複数の大学で風水研究が進められており、本稿が正当なアカデミズムの土俵の上に立つ研究であることを再度力説したい。

学問と偏見

今日の日本では影の薄い風水であるが、黎明期の日本においては、それは最先端の科学知識であり、土木工学上の必須技術でもあり、宮都建設地や遷都の候補地選定において欠

くべからざる常識であった。よって以下に詳述するように、近畿地方に根を下ろした古代王朝の都邑づくりはすべて風水の力を借りてなされたと考えられるが、史学界は伝統的にこの不可視の古代技術の存在を無視する形で研究が続けられてきた。

アカデミズムにおける、この非生産的傾向に最初に疑義を呈したのは、『日本陰陽道史総説』（塙書房）の著者村山修一であった。彼は1981年、風水（陰陽道）が「……従来の日本古代史家によって見落とされてきた重大な点……」¹であったと指摘した。だがこの批判にもかかわらず、日本古代史学界に大きな変化は見られなかった。たとえば2020年に刊行された佐藤信編『古代史講義「宮都編」』（ちくま新書）には風水の言及が皆無である。

本書は「飛鳥の宮々」から「平泉」まで15の宮都の成り立ちを論じているが、そこに「風水」の文字はない。それどころか、「六六七年（天智六）三月、中大兄皇子は飛鳥の地を離れ、近江遷都を決行する」²といったように、15の古都の建設や遷都があたかも天皇の一声であっさり決定され、実現されたかのような記述が目立つ。繰り返すが、当時の日本が中国の先進文化の強い影響下にあり、風水が王都や宮城の建設に必須の技術であったことを想起すれば、この叙述の仕方は極めて不自然といえるし、風水に対する偏見の裏返しとしか思われぬ。

ならば真実とはということになるが、土木技術の日本への伝播は602年で、都城や宮室を建設するためには東西南北の正確な方位の確定が必須であるとの認識が確立した。もちろん、方位に対する意識は風水にほかならない。³

さらに694年、持統天皇によって造営された藤原京は、先帝の時代から風水的調査が実施されていたが、「……広瀬王・大伴安麻呂以下の官人とともに、陰陽師・工匠を畿内に派遣し、都の候補地を調査せしめられており、陰陽師は当然このとき相地の業にたずさわったものである」⁴から明らかなように、この都は風水の専門家が派遣されたことによりはじめて築かれたのである。

実際、藤原京は風水的には「被山帯河」と呼ばれる最良の立地であった。⁵藤原京は畝傍、耳成、香具の三山に囲まれ、南に飛鳥川が流れる完璧な立地であったし、風水師の存在なしにこの地を選定することは不可能であった。

さらに708年、元明天皇が平城京への遷都を宣言したさい、「四禽図」と「三山鎮」が言及されているが、⁶これも風水思想の表現に他ならない。四禽図とは中国の伝説上の動物を描いた図である。またこの四獣は神聖視され四神とも呼ばれ、「……方位を正し吉凶禍福を支配すると考えられ、都邑が正しく東西南北に企画されていないと災いが生ずると信じられたから、正確に北辰（北極星）を観測し厳密に方位が定められた」のである。⁷

そして8世紀後半に企画された近江保良宮の造営においては、まず759年に7人の官人が派遣され、ほぼ1年後にさらに9人が派遣され、遷都に対する用意周到ぶりがうかがわれると同時に、淳仁天皇が「北京」を造ろうという企画を抱いていたことが明らかとなった。⁸これは当然、唐における太原を北都に、次いで北京に改名したことを意識した結果であり、朝廷の中国への傾倒が顕著である。言うまでもなく、この時代の、国家あげての中国

信仰は朝廷に限られたことではない。それを雄弁に物語るのが高松塚古墳とキトラ古墳の壁面に描かれた彩色の天文図や四神図であろう。それは同時に飛鳥時代に生きた人々の篤い風水信仰の表現でもあった。

以上の事実を踏まえれば、天皇による鶴の一声で遷都や建都が実施されたかのような『古代史講義 [宮都編]』の記述が、風水と共に生きた古人の歴史を正視していないことは明白である。風水は俗信、という思い込みの犯した弊害は大きい。

風水の起源と発展

風水は多面的、多重的な概念で、ひとことでこれを説明することは困難である。それは数千年の歴史を経て、場所を変え、今日においても変化し続けている。「風水」という言葉の初出は5世紀の『葬經』であるが、⁹言うまでもなく、この言葉が意味するものは、これよりはるか以前から存在していたのである。すなわち、太古から中国には天と地からなる環境を注意深く観察することにより、人は真理を極めることができるとする思想があり、紀元前8世紀に書かれた『易経』には「地理」と表現されている。¹⁰

以下にその発展を論じていくが、その前に風水のコンテンツについてひとこと言及すれば、それは土地を視覚的かつ物理的に評価する立場と、人間の運勢を占う、観念的で呪術的な立場に大別できる。より具体的な説明をすれば、風水は基本的には、人間が快適に生活できる居住地を探す方法論である。その手掛かりは視覚を含む五感を用いて、人が安寧のうちに生活できる場所を見つけ出すことである。他方、土地とセットになった「気」と「方位」を重視し、それらが土地はもちろん、そこに住む人間の運命を決定するとする信仰もまた風水である。この思想は陰陽道と呼ばれ、儒教や道教、仏教と混交・融合し、神秘主義と化し、本来の風水とはかなり様相を異にしている。風水が迷信、という俗説は風水の、この側面のなせる業と考えられる。いずれにせよ、風水は原理的にはこれら二つの側面から成立していることをまず確認したい。しかし実際には二つの側面が独立している場合と、両者が融合している場合があり、風水の正体解明は容易ではないが、まずは最初期の風水について詳述してみたい。

風水は数千年前の黄土高原において発生した思想で、住居や集落(邑)の選定方法であった。当時、人は集団と集落をつくり、農耕(仰韶文化)をはじめたが、発掘された二つの遺跡の立地を分析すると、①河川の氾濫を避けて流れの内側(くま)に立地、②自然の河川と濠を集落の外周とする、③道が東方に通じている、④集落の中央に広場や大きな建築が配置されている、さらに⑤作業場や墓地は集落の外に配置されている、といった特徴が見られ、明らかに邑形成の方法論の存在がうかがわれる。¹¹これが最初の風水といえる。

そして時代が下がって殷代(紀元前16世紀から11世紀)になると、頻繁に遷都が行われ、宮都の選定方法が発達し、マニュアル化されたようだ。それによると、①適地調査は土地をよく観察し、②実際に歩いて踏査し、③測量し、④土地の高低や河川の状態を考慮し、⑤川のくまを選択すべき、となる。仰韶文化期からの経験則が体系化され、文字化され、一般

化されたということである。

農業に適した土地は水利に富む肥沃な土地でなければならないが、同時にそこは河川の氾濫から自由な土地でなくてはならない。すると人は流れの外側ではなく、内側の土地に住まうことになる。このような経験則が風水であった。特筆すべきは、農地に適した土地を調べる方法である。殷代末期（紀元前12世紀）、後に周王朝を興す武王の曾祖父、古公亶父は植物の糖度を確認して土地の肥沃度を評価したと言われている。¹²

その結果、確定した殷代の王都は前に河、後ろに山を背負う地理的特徴を示したが、これを「被山帶河」といい、¹³風水の標準となった。西周の洛邑も北魏の洛陽も同じ地理的構造を有しているが、同一の風水理論にしたがって建設されたことは疑いが無い。ちなみに被山帶河は都邑の後に山を背負う形だが、「首都防衛」を考慮すれば、山が両翼にもあり、王都を三方から守る形がより好ましい。これを「背山面水」といい、風水では理想的な立地と位置付けられる。奈良盆地に建設された古代日本の宮都はみな背山面水であったし、その最終形が平安京であった。今さら言うまでもないことだが、平安京の北には船岡山、東には大文字山、西には西山が位置しており、この都は背後と両翼から、3つの山に守られる状態で立地している。

さて次に、風水の主要構成要素たる「気」について言及したい。何世代にもわたって地形を観察してきた古人は、大地と人間の相似に気づき、大地も人間と同じ「生き物」と考えた。さらに彼らは、人体に血液が流れ、生命を維持しているのと同様に、大地にも大地を生かすエネルギー（気や龍脈）が流れているはずだ、と考えた。気は万物創造のエネルギーで、生命力そのものである。人間にツボ（経絡）があるのと同様に、大地にも気が集中する場所（龍穴）があると考えた。ならば龍穴に住居を建てれば大地のパワーの恩恵に浴することができるのと彼らは発想した。これが風水の二つ目の相で、気の利用技術あるいは制御手段になる。もちろん気は目には見えず、その存在は想像するしかない。それゆえ、気の内容を前提にした段階で、風水は形而上学となり、宗教と化す。とりわけ、大地を流れる気を利用すべく、それが噴き出す龍穴を見つけ、そこに住まうという発想は、以下の引用から明らかなように信仰というしかなく、この点で風水は宗教に転化したといえる。

風水の目的とはこれらの地形定則にそって「龍穴」を見つけだすことであり、その上に造営物を建てれば地中の「気」に感応して莫大な繁栄と幸福が招かれるのである。「龍穴」の上に造られた住宅では地中の「気」の作用によって傑出した人物が育ち、また先祖の墓を建てれば「気」の影響によって祖霊が安息でき、後代の子孫に繁栄と幸福が与えられると信じた。¹⁴

そして気の内容は「陰陽」によってその呪術度をレベルアップさせた。気は、まさに空気のように、澄んで軽くなった状態、重く濁った状態、その中間でうごめく状態に絶えず変化するが、重い状態を陰、軽い状態を陽という。もちろん陰陽は気に限った現象では

なく、それは光や温度においても存在する。そして風水思想では地形の高低も陰陽と考える。さらにも風水は、あらゆるものの陰陽調和が必要だと説く。

風水の理念では人間が生存している大地を一つの太極と考えている。太極とは陰と陽に分けられる存在を意味し、さらに陰の中に陽があり、陽の中にも陰が存在しているとする概念である……その陰と陽を地形において具体的に説明すると、陰は陥没、低下を意味するのに対し、陽は突出、高起を象徴している。風水における選地の手法では、地形の「陰陽」が調和するように考える。それを太極の理念を用いて説明すると、太極とは陰と陽から生成され、さらに陰の中に陽があり、陽が陰を含めると陰陽安定の状態になるということになる。この理念にもとづき、風水地形の選択の原則の一つである「高処取低」……「低処取高」……がある。それは地形の高低、凸凹を調節し、陰陽調和に配慮するものである……。¹⁵

そしてこの思想が最初の風水原理に反映され、宮都選定の新たな原則が定められた。それは、「天地、陰陽の調和する所に王国を建てべきで、それは地中の場である。それを決めるのは、夏至の太陽で八尺の定規の影長が一尺五寸となる所である」。

この文言の出典は春秋戦国時代の『周礼』であり、陰陽思想はすでにこれ以前に確立していたと判断できる。ちなみに上述の「地中」は陰陽調和と同義であり、「中心」でもある。そしてその中心とは「……地形上のバランスがとれ、高低の配分が均等な場所、いわゆる龍穴の所である」。くわえて地中には「天下の中心」の意味もあり、王がここに国府を定めることにより、自然が調和し、四季が円滑に推移し、作物が実り、天下が落ち着くとする信仰が込められていた。さらに、地中は「……天上の北極星が地上に投影した中和の所」の意味もある。¹⁶

すとなぜ北極星が言及されるのか、ということになるが、その理由は、天空で不動の位置を占める北極星は天空の中心と考えられていたからである。そして古人はこれを基準に、夜空を5つの星座グループに分けた。それらは、①北極星を中心とした集団（中宮）、②玄武と名称された北の集団（北宮）、③朱雀と呼ばれた南の集団（南宮）、④青龍と名づけられた東の集団（東宮）、⑤白虎と呼ばれた西の集団（西宮）である。すでに述べたように、星座の名称であった玄武、朱雀、青龍、白虎はやがて神話化され、四神と呼ばれるようになった。さらにそれが地上の景観に投影され、王都にふさわしい土地は、その周囲、前後左右に標高の近似した山や丘が位置する土地であると判断された。これを四神相応の地、吉地という。天界を、北極星を取り巻く4つの星座グループが等しく分け合うのと同じという解釈であり、宇宙の秩序を地上に再現することが王の務めと考えられた。

古代の中国においては、天上の世界は地上と同じような社会構造をもっていると考えられ、地上でおこるさまざまな現象はすべて天象（星座の配置や動きなど）の観察

から予知できると信じられていた。換言すれば、地上の諸現象は天上界の反映であるということであり、ここから、地上の諸施設は天上界（星座）の配置に合致していなければならないという考えが生まれる。つまり地上の諸施設は天の投影であるから、天の摂理にそって配置すれば、自然の運行が順調となり、幸福がもたらされ、逆に天理に逆らえば、必ず災いを招き、災難、疫病などが地上にもたらされるとされた。こうした信仰的な面を背景にして、古代中国において帝都の形態は宇宙の摂理と合致したり、天上界の現象を地上に具現したりするよう計画された。¹⁷

そしてこの思想のもとに建設された最初の宮都が始皇帝による咸陽であった。「当時の秦王政は天下を統一し、王号を皇帝に代え、咸陽城が天下の帝都として造られたのである。咸陽城は渭水を挟み、北の咸陽城と南の安房宮が閘道で連結されていた。安房宮を天極、渭水を天漢（銀河）、咸陽を宮室（室宿座）に見たて、当時の宇宙観を地上に再現したのである」¹⁸

ちなみに、北京の宮殿（跡）は紫禁城と呼ばれるが、その理由もここにある。北極星を中心とした中宮は紫微、太微、天市の3つの星座群（垣）に細分されるが、紫微垣は上帝の居場所とされていた。ゆえにそれを地上に再現した場所、王宮は紫禁城と呼ばれるのである。いずれにせよ、天を地上のモデルとし、地上の建物は天を正確に再現しなければ災いが生じるとする信仰が生まれ、風水はますます呪術化していったのである。ではそれはいつか、ということになるが、紀元前433年に造られた曾侯乙の墓室の中に青龍白虎と星座群が描かれていたことから、¹⁹ 天象信仰はこれ以前に定着し、流布していたことは明白といえる。付言すれば、すでに言及したように、この陰陽的風水思想が数世紀以上遅れて日本に到着し、高松塚とキトラ古墳塚の天井画となったのである。

さて陰陽思想に関しては以上にくわえて方位という概念が必須項目となる。北極星の位置や、夏至や当時を含めた太陽の動きから、方位が意識され、王都建設や王宮造営などの土木・建築工事に利用されるようになったのである。その好例が周代に行われた土地均分制度「井田法」であろう。この制度により「……大地は整然とした碁盤目状に区画され、同時期の都城づくりの理念にも、この区画と同じパターンである碁盤目状の街道をもつ都市計画手法が適用されたのである」²⁰

そして後年、方位を簡単に測定できる羅盤が発明されると風水は新たな次元に突入することになった。羅盤は24の方位を測定することができたが、これにより風水は、国家はもちろん個人の運勢を占う方向に向かうことになった。これを風水では「理派」とか「理気」と称するが、一般的には陰陽道と呼ばれる。ちなみに7世紀後半の天武天皇は「陰陽式盤」を使って占いをした、と伝えられていることから、²¹ 羅盤はこれ以前に中国で発明・使用されていたと察せられる。

中国に限らず古代においては、世界各地で占いが行われていたが、中国においては最古の王朝、夏、次の王朝の殷、次の周がそれぞれ占いを行っていた。そして周の文王がこれを

『易経』として体系化したとされ、さらにそれが儒教の中に取り入れられることになった。

気概念にはじまり、天文知識と暦の発達、さらに方位の概念がくわり、風水は社会と自然、失政と天災との関係を読み取り、天が地に暗示する予兆（祥瑞や災異）の解説などを行う「応用科学」と化した。これが陰陽道である。より具体的には、それは「……古代中国に起こった陰陽五行説を中心とする思想とそれに基づく諸技術をさすもので、日月星辰の運行・位置を考え、相生相克の理により吉凶を判じ、あらゆる思考や行動の指針を導き出そうとするところにおもな目的がある」が、結局のところそれは「易の思想」ということである。²²

風水は最初、自然地理学として起こり、王宮を含む住居や集落（村や町、都市）にとって好ましい建設場所を選定する技術であった。しかしその進化の最終形は未来を占い、災いを遠ざける祈祷技術となった。しかしその評価は分かれる。記録に残る最初の批判は西暦1世紀、漢代の王充で、これを迷信と見なした。唐代には呂才が、そして宋代には司馬光もこれを否定した。²³

一方で、陰陽道を含め、風水全体に対する信仰はすっかり中国社会に定着してしまい、中国人は風水思想の中に生まれ、その中で死んでいく、とすることもできる。『風水とまちづくり — エコマースシティの創造』の著者、中国出身の上草鋼一は、中学生の時に経験した祖父の葬式後の出来事を以下のように述懐している。ちなみに上草は1961年生まれである。

中学1年の夏休みごろ、母方の父親（義祖父）が急逝し、土葬にした。叔父は風水師を呼んで、1週間をかけて、あちこち墓地を探していた。最終的に選んだ場所は、生家と遠く離れた北側15キロメートルくらいの郊外、ある丘の上の一角であった。墓地の背面にはさらに大きな山があり、前の正南面には道路をはさんで小さな溪川が流れていた。回りは緑でうめつくされていた。……なぜ、墓地の場所選択にこれほどこだわりがあるのか、叔父からの回答は実に明快である。それは、“中国人は、先祖代々から、人が死ぬと神になる。神は自分のいる場所（俗称・陰宅）の心地がよければ、自分の子孫たちを守り、そして、一族が繁栄し続けるということを信じている”ということであった。²⁴

このエピソードにより、共産主義体制下になっても中国民衆ははまだ風水を信奉していることがよくわかる。そして驚くべきは、風水の信奉者は大衆だけではないということである。

1986年、19世紀からの伝統を誇る香港上海銀行は風水思想を取り入れた本店ビルを再建し、香港名物にした。すると中国銀行が1989年、香港上海銀行に対決姿勢を示すかのように三角柱のビルを建設したのである。その真意は、まず、三角ビルは殺意が屋上に集まり、三方向に反射し、イギリス総督邸を含む付近の建物に精神的ダメージを与えるためだ、

と考えられる。第二に、香港上海銀行が、風水的には四角柱であるがゆえに「土」、であるのに対して中国銀行は三角柱であるから「火」である。そして風水論からいえば、火は土に勝つのである。²⁵

風水解釈学

風水は数千年の歴史があり、時の推移とともに様々な解釈がなされ、新たな理論が打ち立てられ、いくつもの流派が形成される一方で、基本原則が損なわれる事態も生じた。

風水は元来、自然の地形を尊重し、それを活用し、安全・安心の居住地を確保する手段であった。しかし土地の活用方法は多様であり、「……大自然風景を……鑑賞しながら、目障りになった部分に人工の手を加えて添削する……」方法もある。²⁶たとえば、正面左右に標高が異なる山が存在する景色において、その景観を「生かす」場合は、低い山の山頂に風水塔を建てて、高さを「均等」にするのである。これにより景色は陰陽調和し、レベルアップする、と風水は考えるのである。

そしてその風水塔だが、これ以外にも利用方法があり、そのひとつは「……災難を消し、邪気を避けるため……」である。さらに風水塔には財気の流出防止効果があると信じられている。河川はあらゆるものを運び、海に流出させるが、この中には財気も含まれる。これを防ぐため、数個の風水塔が河口（風水では「水口」）まで川に沿って建設されるのである。好例は広州から河口まで、珠江沿いに建てられた3基の風水塔である。²⁷

古人はこれで地域の繁栄を祈願したのである。

同じことが北京についても言える。明代に造営された紫禁城には北側に影山、西と南には金水河があるが、いずれも人工である。風水の拡大解釈では、前者は玄武で後者は朱雀になり、これで背山面水の吉地となるのである。²⁸

しかしこれで終わりではない。風水は川を山に見立てて、風水吉相を創造してしまうのである。四神相応は、山を星座に見立てた呼称だが、北京に関しては、四神は山ではなく川なのである。すなわち、北京は白河を青龍水、玉河を白虎水、盧溝河（永定河）を朱雀水、そして高粱河を元（玄）武水とすることで、理想的な風水吉地といえるのである。²⁹

しかし北京は本当に風水吉地なのだろうか？ 風水の原則に照らせば、王都としての理想はまず盆地であり、次いで東西と北に山、南に河川がある土地（背山面水）である。すると北京はこれらの条件には該当しない。北京の西方には確かに山岳地帯があるが、東は開けているし、北の山間部は数十キロメートルも離れているし、南には大河も湖もない。だが南宋の朱熹によれば、北京は背後に山、正面に黄河をもつ立派な「風水地」ということになる。³⁰たとえ黄河が300キロメートル以上も離れていても、それは大した問題ではない。なぜなら風水は寛大でマクロな視点をもつからだ。好例は崑崙山からの気（龍脈）の流れを図解した明代の「三大幹図」（『三才図絵』所収）であろう。これによれば北京は「……東の渤海、西の太行山脈、南の黄河などの大河、北の燕山、居庸関などの山々に擁護され……支配者が永遠に都を置く場所として最適……」地であり、「……背後の龍脈と前の黄河に囲

まれた北京では、マクロの“背山面水”という風水吉相……」なのである。³¹

風水とは千変万化の思想といえる。そしてこの新しい風水解釈が日本にも伝わり、日本独自の風水が興った。16世紀前半に築城された犬山城は南北軸が左に傾いているが、³²これには先例があった。南朝の首都であった南京は市の南北軸が右に数度傾く形で建設された。その理由は、方位よりも四方を山に囲まれた盆地状の立地（被山帯河）を優先させたからである。³³犬山城もこれにならった次第である。

そしてこの、方位よりも地形（四神相応）を優先させる思想は「国産技術」化し、新たな信仰として普及した。

江戸の場合、南に日比谷入江があって、町づくりの平地は東方にひろがっていましたから、朱雀—玄武の南北軸を一一二度あまり東北東へふって、ここに城の正面＝大手をおいたのです。そして平川を青龍、墨田川を通じて江戸湊を朱雀、東海道を白虎、麴町台地から富士山をのぞんで玄武の神に、それぞれかなうように計画しました。³⁴

わかりづらい説明だが、北を上にしてある地図を右に90度以上（正確には112度）回転させるということである。すると本来、北にあるはずのない富士山が北に位置し、玄武となるのである。繰り返すが、四神相応とは四方を標高差の少ない山に囲まれた王都建設の理想地を指す。ところが、江戸遷都ではこの思想の本質を無視し、既定路線化した土地に権威づけを行うために、後から四神相応理論を取り付けたのである。融通無碍とはまさにこのことを指すといえるだろう。

結論

風水とは何か？ 一般的にはいろいろな定義の仕方が考えられるが、本稿の議論にしたがえば、風水とはまずもって立地論であるといえる。大自然の中で暮らしていた古人にとって安全に住まう場所の確保は死活問題であった。そしてその解決策が風水であった。たとえば、水の確保をするとともに水害に遭わずにすむ土地をいかに見つけるか、この方法論が最初の風水であった。

次いで、地形判断としての風水は大地の下に流れる万物創造のエネルギー、気脈（龍脈）の存在を認識した。そしてそれは、「気」という、五感ではとらえることのできない現象が存在するという認識にとどまらず、それを浴びることによって人の運気が上がるという信仰に転嫁した。そして気を利用するためには、気が充満し、噴出する龍穴の近くに住居や集落を築く必要があると信じられ、立地論がバージョンアップされた。その結果、被山帯河や背山面水といった概念が生まれ、そのような地形に王都が築かれるようになった。そして気に関しては、それがあたかも水のように湿って重い状態（陰気）と、乾燥して軽く、（不可視の）気泡となった状態（陽気）が想定され、両方のバランスを取ることの必要性が重視された。これを陰陽調和という。そしてこの発想が地理学的風水にさらにフィード

バックされ、景観を「改善」する方法論につながった。左右の山に標高差があれば、低い山の頂に風水塔を建設し、左右の高さを陰陽調和させるという手法である。

その後、天象が地象を左右するという占星術的信仰が起り、それに基づいた宮都や王宮づくりが行われ、風水思想は膨れ上がった。さらに天象観察は暦と方位に対する意識を刺激し、土地の吉凶判断のみならず人の運勢をも判断する呪術、陰陽道をはぐくんだ。陰陽道は仏教にも影響を及ぼしたが、とりわけ儒教に深く浸透した。たとえば孔子は中庸の大切さを説いたが、物事に偏りがなく、過不足なく、調和が取れた状態はまさに陰陽調和である。四季が緩やかに変化し、その過程で万物の生存が確保できるように、また昼から夜への移行が徐々に推移するように、何事も極端と過激を避けることが肝要であるが、この真理を教えてくれるのが陰陽思想である。

それは一面では占い、祈祷であるが、同時にそれは深い人間理解に根差した、幸福に生きるための知恵でもある。これがゆえに風水は数千年の歴史を経て今日まで生き続けているのである。風水は開運の勧めであるが、それはひとりの人間の開運にとどまらず、子々孫々にまで波及する開運であり、利己主義であると同時に利他主義でもある。

さらに風水は大地と人間との連続を考え、大地もまた一個の生き物と考えるが、この発想は今日のエコロジー思想と類似している。地球環境の保全とは生命体としての地球の命を守ることであり、それは同時にわれわれ人間を、否、全生物の命を守ることである。こう考えると、風水の普遍性が見えてくる。風水は永遠に続く祈りとも解釈できる。

注

- 1 村山修一著『日本陰陽道史総説』、塙書房、1981年、p. 44.
- 2 佐藤信編『古代史講義【宮都篇】』、ちくま新書、2020年、p. 47.
- 3 黄永融著『風水都市 歴史都市の空間構成』、学芸出版社、1999年、pp. 232-233.
- 4 村山前掲書、p. 41.
- 5 黄前掲書、p. 154.
- 6 岸俊男著『日本の古代宮都』、岩波書店、1993年、p. 65.
- 7 村山前掲書、pp. 42-43.
- 8 岸前掲書、pp. 94-95.
- 9 黄前掲書、p. 28.
- 10 同上
- 11 岸前掲書、pp. 131-137.
- 12 黄前掲書、p. 133.
- 13 同上、pp. 152-155.
- 14 同上、p. 32.
- 15 同上、pp. 25-26.

- 16 同上、pp. 140–142.
- 17 同上、p. 145.
- 18 同上、p. 148.
- 19 同上、p. 18.
- 20 同上、p. 166.
- 21 同上、p. 68.
- 22 村山前掲書、p. 4.
- 23 黄前掲書、p. 244.
- 24 上草鋼一『風水とまちづくり ― エコマースシティの創造』、日本地域社会研究所、2001年、pp. 11–12.
- 25 上草上掲書、pp. 98–99.
- 26 黄前掲書、p. 49.
- 27 同上、p. 49.
- 28 上草上掲書、pp. 104–105.
- 29 同上、p. 103.
- 30 黄前掲書、p. 155.
- 31 上草上掲書、pp. 102–103.
- 32 黄前掲書、p. 105.
- 33 同上、pp. 112–113; p. 150.
- 34 内藤昌著『江戸の町(上) 巨大都市の誕生』、草思社、1982年、p. 12.

参考文献

- 岸俊男著『日本の古代宮都』、岩波書店、1993年
上草鋼一『風水とまちづくり ― エコマースシティの創造』、日本地域社会研究所、2001年
黄永融著『風水都市 歴史都市の空間構成』、学芸出版社、1999年
内藤昌著『江戸の町(上) 巨大都市の誕生』、草思社、1982年
村山修一著『日本陰陽道史総説』、塙書房、1981年
佐藤信編『古代史講義【宮都篇】』、ちくま新書、2020年
小椋浩一著『人を導く最強の教え「易経」』、日本実業出版社、2023年
金谷治著『老子』、講談社、2021年

山田 利一 (t_yamada@hokuyo.ac.jp)

Approaches to Mindfulness in Science — A Historical Perspective Review for Mindfulness Understanding —

LI Sheng
Ritsumeikan University

科学におけるマインドフルネスに対するアプローチ — マインドフルネス理解の歴史的な観点からのレビュー —

李 晟
立命館大学

Abstract

マインドフルネスという言葉は、過去数十年の科学文献で注目を集め、特に心理療法の中心的な要素とされている。この影響により、社会におけるマインドフルネスの動きは活発であり、同時に多くの批判を引き起したが、歴史的な研究と学際的な対話を通じて、マインドフルネスはこれらの批判を克服し、新たな展望が開かれつつある。

本論では、マインドフルネスのアプローチを歴史的発展の中で探求し、科学および仏教の文脈での理解と応用に焦点を当て、それらの特徴を整理する。最初に、従来のマインドフルネス理解の還元主義的アプローチについて整理する。次に、マインドフルネスの歴史研究から得られた三つの中核的な発見を検討し、過去の議論や批判を広範に理解するための広い視点を提供する。最後に、本稿ではカバット・ジンのアプローチと機能的文脈主義の二つの有益なアプローチについて整理し、マインドフルネスへの理解に関する価値ある知見を論じる。

1. Background

1.1. Mindfulness in the last decade

“Mindfulness” is one of the most attractive and controversial terms in the past decades of scientific literature. The term “mindfulness” has been mainly considered a core ingredient of psychological therapy in the scientific fields over the past decade. The Mindfulness Revolution in the scientific realm is considered the result of Jon Kabat-Zinn’s pioneering work (Mindfulness-based Stress Reduction, MBSR; Kabat-Zinn, 1982, 1990). As a result of his influence, psychology has developed many types of therapies, including Mindfulness-Based Cognitive Therapy (MBCT; Segal, Williams, & Teasdale, 2002), Dialectical Behavior Therapy (DBT; Linehan, 1991), and Acceptance and Commitment Therapy (ACT), all of which employ mindfulness meditation techniques. Integrated within cognitive-behavioral therapy, these therapies are called third-generation cognitive-behavioral therapies (Hayes, Follette, & Linehan, 2004). Numerous clinical and theoretical studies have shown the benefits those therapies bring to both physical and mental health.

The practice of mindfulness skills develops and improves with repetition, and interventions that use these skills are referred to as mindfulness interventions. During the past three decades, mindfulness interventions have been associated with cognitive-behavioral therapy of the third wave (Hayes, 2004) and have demonstrated benefits in the areas of health, cognition, emotions, and interpersonal relationships and more. Within the context of third-wave cognitive-behavioral therapies, the conceptualization of mindfulness training varies in each clinical intervention, leading to the distinction between Mindfulness Based Interventions (MBI) and Mindfulness Incorporated Interventions (MII), based on how mindfulness training is approached (Baer, 2003). The diversity of third-wave cognitive-behavioral therapies indicates that there are different approaches to understanding mindfulness, even in psychology.

Although researchers pointed out that mindfulness is still not evidence-matured, its fame has already started gaining widespread attention in medicine, psychology, business, education, politics, and the mainstream media as a way to improve health and wellbeing (Harrington & Dunne, 2015b). As the society and industry of mindfulness kept growing, mindfulness became associated with weight loss, better sex, helping students perform better in school, helping employees be more productive in the workplace, or even improving soldiers’ performance in the military (Stanley et al., 2011). Thus, mindfulness became controversial, and discontent with mindfulness was aroused in various contexts.

The bloom of mindfulness, however, did not wane despite criticism. More than a decade has passed since the declaration of the beginning of the “Mindfulness Revolution” (Boyce, 2011). The buzzword “mindfulness” is still hot, and it has become even more important than ever since. In the past 10 years, as it has become even more controversial as researchers explore mindfulness’s roots,

new research trends have emerged in the science literature. Debates have taken place between various research disciplines, as mindfulness has a long and complicated history (Monteiro et al., 2015; Rappay & Bystrisky, 2009). Increasingly, researchers are focusing on understanding mindfulness's history from a broader perspective. Researchers have examined mindfulness debates as a phenomenon (Gordon, 2009; Harrington & Dunne, 2015b; Sun, 2014). As a result, some have gone beyond mindfulness to science itself, thus creating this "revolution" to become an overarching movement.

Current paper aims to contribute to the understanding of mindfulness by exploring its approaches within its historical development, focusing on examining how mindfulness has been understood and applied in both scientific and Buddhism contexts. Firstly, this paper describes the conventional approach to understanding mindfulness, which is based on Reductionism approaches such as Randomized Controlled Trials and Neuroscience. Second, this paper examines three core findings in mindfulness research to provide a broader understanding of past debates and criticisms. Finally, this paper discusses two valuable approaches for mindfulness understanding: Kabat-Zinn's approach and Functional Contextualism.

2. Reductionism: The Conventional Approach to Mindfulness Research

Reductionism, a philosophical approach rooted in the breakdown of complex phenomena into simpler, more fundamental components, serves as a widely adopted method of analysis across various domains, encompassing science, philosophy, and psychology. The foundational concept behind Reductionism is the belief that understanding intricate systems becomes feasible through an examination of their individual components and the interactions among them (Searle, 1998). In the mainstream mindfulness research domain, the Reductionism approach plays an important role in mindfulness understanding, which is valuable to go through.

2.1. Reductionism

The roots of Reductionism date back to the ancient Greeks, who posited that the entirety of the world could be distilled into a few elemental components. This notion found further development in the works of philosophers like Descartes and Hobbes, who proposed that deconstructing the human mind and body into their constituent parts could yield comprehension (Mandler, 2007). In the 20th century, Reductionism gained prominence in scientific disciplines, especially physics and biology. Psychology has also been affected by Reductionism, making it a conventional approach, particularly in the behaviorist and cognitive traditions.

However, Behaviorism has been criticized for its Reductionism approach to human behavior. Critics argue that behaviorism ignores the role of internal mental processes in shaping human behavior. For example, behaviorism cannot explain why people engage in behaviors that are not

immediately reinforced, such as altruistic behavior. While cognitive psychology emphasizes the study of internal mental processes such as perception, memory, and attention, cognitive psychologists believe that complex human behavior can be understood by breaking it down into simple cognitive processes (Barnes-Holmes et al., 2000).

2.2. Randomized Controlled Trials

The mindfulness interventions in “third-generation cognitive-behavioral therapies” fall under the Reductionism approach, even literally. Under this approach, the robustness of mindfulness intervention research mostly finds its foundation in the widely recognized Randomized Controlled Trials (RCTs), a cornerstone of the “evidence-based approach” in psychology (Lack & Rousseau, 2022).

RCTs, employing random allocation of treatment conditions, stand as a primary methodology for measuring the efficacy of therapies in the clinical realm. Their acceptance by the mainstream psychotherapeutic community provides a mark of approval, solidifying the credibility of various treatments.

From relatively marginal and mysterious initiatives, mindfulness interventions have steadily gained acceptance in clinical practice over the past few decades (Wilson, 2014). It has been demonstrated that RCTs have played a significant role in this transformation, with studies conducted not only in medical clinical settings, but also in schools, businesses, and various institutions, demonstrating the broad applicability and acceptance of mindfulness therapy (Creswell, 2017).

However, a critical review of empirical studies on mindfulness-based therapies reveals methodological flaws in many cases (Baer, 2003). Over the last decade, an increasing number of researchers have called for a reevaluation of the safety, efficacy, and effectiveness of mindfulness interventions using high-quality RCTs (Karremans, Schellekens & Kappen, 2015; Creswell, 2017). This critical stance has not diminished the pursuit of proving mindfulness as “particularly effective” but, instead, has propelled mindfulness RCTs to higher standards, fostering stronger evidence for their effectiveness (Siew & Yu, 2023). Nevertheless, this is a strengthening of the methodology of mindfulness RCTs, making them more reliable and valid in a Reductionism way. And we will see that mindfulness in Neuroscience is an even more extreme version of this kind of strengthening.

2.3. Mindfulness in Neuroscience

In the realm of the Mindfulness Movement, another field extending beyond the confines of psychology and aligning with the methodology of RCTs is Neuroscience. Historical literature frequently delves into the evolution of mindfulness, often highlighting its historical narrative and substantiation within the Neuroscience domain. Researchers in Neuroscience reduce mindfulness to the intricacies of brain activities, a facet that holds substantial allure. Furthermore, this approach

steers clear of employing constructive concepts, in contrast to its “friend,” Cognitive Behavioral Therapy (CBT). This avoidance of constructivist elements addresses the persistent challenge of the ever-evolving definition of mindfulness, presenting a persuasive solution.

With the conversion to Buddhism Tradition, recent Neuroscience research demonstrates the acceptance of Buddhism Tradition concepts such as the Four Immeasurables. As a result of clinical investigations pertaining to meditation practices encompassing not just mindfulness but also compassion over the past decade, along with research efforts focused on elucidating the psychological and neural mechanisms that underpin meditation, significant progress has been made. The Buddhist concept of compassion is represented by four virtues collectively known as the Four Immeasurables. There are a variety of virtues contained within these virtues, such as loving kindness (*mett*), compassion (*karu*), and the desire for beings to experience tranquility. Beings’ accomplishments and happiness create joy (*sympathetic joy* or *mudit*), and equanimity (*equanimity* or *upekkha*) creates equanimity when observing all beings impartially (Thera, 1994). This inclusion of “equanimity” in Buddhism’s Four Immeasurables underscores the significance of serenity, not only in terms of mindfulness but also in terms of compassion (Weber, 2017, 2021). Consequently, equanimity emerges as a highly consequential concept in the comprehensive understanding of the psychological and neural mechanisms governing mindfulness, compassion, and their intricate interplay.

When examining the research perspective on “equanimity,” it becomes apparent that the compelling findings of Neuroscience are contributing to a shift in the constructive concepts of mindfulness towards a more Reductionism view. It is noticeable that the Mindfulness Movement is increasingly integrating Buddhist tradition with scientific principles as Buddhism concepts are reduced to the level of Neuroscience.

The Reductionism approach to CBTs and Neuroscience is controversial for understanding mindfulness, just as Behaviorism and Cognitive Psychology have been criticized for oversimplifying complex human behavior. It should be noted, however, that this is not merely a reminder of the past. Due to the uniqueness of mindfulness, the limitations of the Reductionism approach have become more extinct than in the past. When sorting the Reductionism approach back into mechanistic, or even the basic philosophy of describing human nature and consciousness, mindfulness is a “subjectivist turn” (Gordon, 2009) that emphasizes the importance of internal mental processes, whereas traditional mechanistic approaches focus on the physical and material aspects of human nature and consciousness. As mindfulness has gained popularity, it has challenged traditional Reductionism approaches in both psychology and Neuroscience. This has raised critical questions about the role of internal mental processes in shaping human behavior (Richards, 1996). Luckily, Reductionism is not the only approach we have had in the last few decades.

3. A Historical Approach: Core Findings of Mindfulness History

3.1. Mindfulness Movement

The phrase “Mindfulness Movement” is often used to describe how mindfulness has impacted both science and society. It is a contemporary phenomenon that has gained widespread popularity in recent years. This is a secular adaptation of Buddhist practices that emphasizes present-moment awareness, non-judgmental acceptance, and compassion (Sun, 2014). Meditation, yoga, and other related practices became increasingly popular during this period (Wilson, 2016), extending this movement a history beyond the confines of a single discipline.

In the scientific context, historical research and Buddhism research have helped to clarify mindfulness and its history. Recently, more attention has been paid to the Buddhist roots of mindfulness in scientific research. As an example, the Pali scholar T. W. Rhys Davids, who translated the Pali word “sati” as “mindfulness” in his translation of the Maha Parinibbana Sutta (Davids, 1881), can be seen presented in those papers as an example of mindfulness derived from Buddhism. Additionally, papers also introduce the concept of “sati” as “mindfulness,” as involving careful observation of four domains: the body, sensations, mental states, and experiences (dhamma) (Bodhi, 2011). As scientists continue to develop a more comprehensive understanding and application of mindfulness, it is critical to note that different territories have participated in those debates. Therefore, a historical perspective on mindfulness is necessary to fully understand its complexity and influence. Two key topics can be identified: the “Mindfulness Movement as an extension of the Vipassana Movement” and “conversations buried in the history of Zen.”

3.2. An Extension of the Vipassana Movement

The emergence of mindfulness in the American context can be traced back to the “Vipassana Movement,” a pivotal period in the early 1980s. The movement marked a transformative juncture within American Buddhism, pivoting towards meditation practices and fostering engagement in activities grounded in Buddhist principles (Fronsdal, 1998). By exploring the historical trajectory of the Vipassana Movement and its influence on the subsequent development of the “Mindfulness Movement,” it enhances our comprehension of the multifaceted nature of mindfulness in contemporary contexts.

The Vipassana Movement in American Buddhism signifies a reformist approach characterized by a return to the fundamental teachings of the Buddha. Emphasizing socially engaged ethics and a practical focus on the present world, proponents of the movement sought to prioritize these aspects over traditional beliefs, such as rebirth (Fronsdal, 1998). Vipassana meditation eventually separated itself from its Buddhist roots as it gained popularity outside of traditional Buddhist contexts as a result of the movement’s focus on meditation practices. Eventually, this divergence had far-reaching consequences, extending the influence of Vipassana into the scientific realm and laying the

foundation for what would later be termed the “Mindfulness Movement.” The Vipassana Movement’s commitment to meditation practices, a reformist shedding of cultural influences, and a focus on worldly concerns became pivotal elements within the evolving discourse around mindfulness.

As Bodhi (2011) explains, mindfulness is a means of eliminating suffering and achieving Nirvana. Thus, based on a Buddhist perspective, some commentators have described such mindfulness as ‘stealth’ or ‘disguised’ Buddhism (Fronsdal 1998; Seager 2012). However, it should be noted that mindfulness is not about proving Buddhism is right or wrong, since it emphasizes mindfulness over other elements, emphasizes practical advantages, and appears to detach from Buddhism, where teachings and values may be implied or minimally represented. As Sun (2014) posits, the Mindfulness Movement can be viewed as an extension or a more extreme version of the Vipassana Movement. This perspective emphasizes mindfulness to the exclusion of other elements. It accentuates practical advantages and appears detached from Buddhism, where teachings and values are either implied or minimally represented. Mostly, this movement focuses on the individual and their well-being rather than on larger social issues or spiritual development, while the ethical framework from the Buddhism tradition may remain valuable, as we will discuss in the coming sections.

3.3. History of Zen: Buried Conversations in the History

Zen is a school of Mahayana Buddhism that originated in China during the Tang dynasty, and later spread to Japan. In the 1950s and 1960s, Zen gained popularity in American counterculture (Sharf, 1993). Thus, in early media literature, mindfulness was occasionally linked to Zen because of confusion about meditation. Zen was expelled from scientific literature as the common understanding of mindfulness derived from Vipassana gradually became apparent. However, Zen has left a lasting impression on Western culture, especially in psychology and spirituality. Zen history can provide a deeper understanding of the Mindfulness Movement, an aspect often overlooked by mindfulness researchers.

American scholars and intellectuals developed an interest in Eastern religions during the late 19th and early 20th centuries. This led to Zen spread in America. Similar to Kabat-Zinn popularizing mindfulness in recent decades, Daisetz Teitaro Suzuki popularized Zen in the United States during the 1950s. While Suzuki’s fame was mostly confined to Zen, limited research explores his influence on the history of mindfulness and psychology. In the 1950s and 1960s, Zen gained popularity among American counterculture movements, particularly the Beat Generation. As Gordon (2009) mentions, writers like Jack Kerouac and Allen Ginsberg were drawn to Zen’s emphasis on spontaneity and non-conformity. Zen teachers, including Shunryu Suzuki, established centers across the United States, with the San Francisco Zen Center becoming a pivotal hub.

Suzuki emphasized direct experience and cultivating awareness, which are similar to the values that underlie mindfulness (Dawson, 2021). As a result of its involvement in emerging fields such as psychology, Buddhism made significant inroads into American discourse during the 20th century. In dialogues between Buddhists and psychologists, a number of psychologists have explored shared foundations (Fields, 1992).

Throughout Zen's history, reformist practices faced opposition, advocating simplified approaches to make teachings accessible (Reich, 1995). Many critics expressed concern about oversimplification and a lack of emphasis on monastic ethical frameworks. It was in the 1960s and 1970s that Zen and psychotherapy were criticized for their dialogue (Molino, 2001, which highlighted possible misunderstandings and concerns regarding their appropriation (Gordon, 2009). A similar concern arose concerning practices such as Transcendental Meditation and their potential impact on religion in the 1970s (Domash, 1977). Thus, it is not new for scientific literature originating from Buddhism to be criticized. However, it seems that very little has been learned from this period of history to improve our understanding of mindfulness in today's world. There is a need for further research to dig deeper into this dialogue and its impact on the scientific understanding of subjective skills such as mindfulness. Considering historical and ethical considerations, a nuanced understanding of Mindfulness-Based Interventions (MBI) is required. Through this interdisciplinary approach, scholars in Buddhist studies and psychology will be able to deepen our understanding of how mindfulness is conceptualized and operationalized. As a result of its recognition of the need to bridge historical contexts, mindfulness research will be more comprehensive and reflective of the diversity of its roots.

4. From Criticism to a New Understanding: Kabat-Zinn's Approach

Mindfulness, initially introduced into scientific discourse largely through Kabat-Zinn's pioneering efforts, has encountered criticism for its apparent detachment from its Buddhist roots (Neale 2011; Purser & Loy 2013). The prevalent focus on Kabat-Zinn's work, particularly the Mindfulness-Based Stress Reduction (MBSR) program, has overshadowed the rich historical and doctrinal underpinnings of mindfulness within the Buddhist tradition. Over the past decade, a new understanding of Kabat-Zinn's approach has become clear (Gordon, 2009).

As a trailblazer in integrating mindfulness into the scientific realm, Kabat-Zinn has offered valuable definitions and theoretical models, making the concept accessible to researchers, patients, and the public. However, as the Mindfulness Movement has gained momentum, concerns have arisen about the evolving and somewhat ambiguous definitions associated with mindfulness. For example, Kabat-Zinn's (1982, 1994, 2003) revisions to the definition in 1982, 1994, and 2003 have contributed to the challenge of assessing the unified effects of mindfulness interventions.

The ambiguity in definitions has far-reaching implications, affecting measurement scales and

potentially undermining intervention effect assessment. This semantic ambiguity, evident in Kabat-Zinn's evolving definitions, has been a source of critique, especially in the burgeoning field of mindfulness research in psychology. Critics argue that clear psychological terms are essential to facilitating rigorous scientific research (Baer, 2011).

Moreover, the secularization of mindfulness, often reducing it to a standalone technique with instrumental purposes, has been criticized as a process of 'de-Buddhification.' The transformation of mindfulness into a commodity, promising benefits ranging from weight loss to enhanced workplace productivity, has been labeled 'McMindfulness' (Neale 2011; Purser & Loy 2013). Many critics fear that this secular rush will dilute the authentic essence of mindfulness and reduce it to a marketable product (Harrington & Dunne, 2015).

Over the past decade, Kabat-Zinn has responded to criticisms of his approach to mindfulness. Kabat-Zinn has been criticized for his calls for more "mechanism-oriented studies" while also expressing dissatisfaction with such ways of knowing (Kabat-Zinn, 2003). One explanation for this duality is that his calls for more research on mindfulness are directed at critics who are concerned about his scientific credibility. However, the studies that have been conducted thus far have been less than ideal in their design or results. Kabat-Zinn welcomes studies to appease his critics, but he also recognizes the limitations of mechanistic approaches to understanding mindfulness. Additionally, Kabat-Zinn's work with MBSR has been the topic of innumerable newspaper articles, radio shows, television programs, and magazine articles (Barker, 2006). While his work has been widely popularized, it has also been subject to criticism from some quarters (Gordon, 2009). For example, some critics have argued that MBSR is too individualistic and does not address the social and political factors that contribute to stress and suffering. Kabat-Zinn has responded to these criticisms by acknowledging the limitations of MBSR and emphasizing the need for a more holistic and integrative approach to mindfulness-based psychology. Overall, Kabat-Zinn has responded to criticisms of his approach to mindfulness by acknowledging the limitations of his work and emphasizing the need for a more comprehensive and integrative approach to mindfulness-based psychology.

Other researchers have also responded to these critiques (Anālayo, 2019; Dawson, 2021). Scholars in Buddhist studies emphasize nuanced definitions and highlight the multifaceted nature of mindfulness. Anālayo's (2019) work delves into early Buddhist texts, offering insights into the healing aspects and the application of mindfulness. These scholars argue that clinical definitions need not encapsulate the full range of mindfulness nuances in a particular Abhidharma tradition to be considered correct. Importantly, within the broader context of Buddhism, each tradition has unique mindfulness understandings that have evolved within distinct historical and social contexts. Additionally, certain meditation practices defy measurement and quantification, challenging Western operational definitions.

Responses are derived from a variety of domains, making Kabat-Zinn such a complex figure to categorize. Scientific literature merely mentions the fact that Kabat-Zinn has no academic training in clinical or experimental psychology. While the Buddhist training he has received profoundly influences his mindfulness approach, as he said, his work is offering 'the wisdom and the heart of Buddhist meditation without the Buddhism' (Kabat-Zinn, 2005). This makes his approach to understanding mindfulness unique in several ways, which we will discuss in this response.

Firstly, Kabat-Zinn's approach emphasizes the importance of subjective experience in understanding mindfulness. Kabat-Zinn challenges the evidentiary status of standardized empirical methods of randomized controlled trials (RCTs) and argues that subjective ways of knowing still have a place in modern psychological knowledge. In his view, RCTs fail to adequately describe the nature, spirit, and substance of the mindfulness-based intervention curriculum, which emphasizes essential core meditative practices based on silence, stillness, self-inquiry, embodiment, emotional sensitivity, and acceptance of all emotional expressions. Obviously, Kabat-Zinn's emphasis on subjective experience is a departure from the Reductionism approach noted earlier in this paper.

Secondly, Kabat-Zinn's approach to mindfulness is grounded in Buddhist philosophy and practice, but he has adapted it for a secular, Western audience. Kabat-Zinn has cut ties with Buddhism and turned to non-Buddhist ways of explaining mindfulness techniques (Kabat-Zinn, 2005). However, his approach is still informed by Buddhist philosophy and practice, which emphasizes the importance of present-moment awareness, non-judgmental acceptance, and compassion. Kabat-Zinn's adaptation of mindfulness for a secular, Western audience has made it more accessible and acceptable to a wider range of people.

Thirdly, Kabat-Zinn's approach to mindfulness is holistic and integrative, drawing on a range of disciplines and perspectives. Kabat-Zinn's work in psychology domain has focused almost exclusively on MBSR, which poses a limitation in its scope. However, his approach to mindfulness is not limited to MBSR and incorporates other perspectives and approaches as well. For example, he has collaborated with cognitive-behavioral therapists to develop Mindfulness-Based Cognitive Therapy (MBCT), which combines mindfulness practices with cognitive-behavioral techniques to help individuals with depression and anxiety. Kabat-Zinn's holistic and integrative approach to mindfulness has made it more relevant and applicable to a wider range of psychological issues and contexts.

In Kabat-Zinn's approach, subjective experience plays a significant role, as he skillfully adapts Buddhist philosophy to an audience that is secular and Western in nature. His approach is not limited to psychology but incorporates insights from various disciplines to foster a broader understanding of the human condition. While Kabat-Zinn emphasizes subjective experience, he recognizes the complementary role of objective and Reductionism approaches in understanding mental health. Consequently, Kabat-Zinn and MBSR navigate the dynamic interplay between

subjectivism and Reductionism within the broader landscape of psychological methodologies.

5. A Promising Approach: Functional Contextualism

Kabat-Zinn's approach to subjectivism is not as insistent as the more self-proclaimed third-wave behavioral therapies (Gordon, 2009). Compared to other CBTs, Acceptance and Commitment Therapy (ACT) shows more sensitivity to the philosophical framework of psychological therapies. With its own distinct paradigm, Functional Contextualism, ACT provides an original and valuable approach to understanding mindfulness.

Functional Contextualism, the philosophical foundation for ACT, offers a pragmatic and context-driven approach to understanding human behavior (Hayes, 2004). It emphasizes that behavior is intricately linked to specific contexts, and its meaning and function are best understood in relation to the environment, social context, and cultural norms. This approach goes beyond merely describing behavior, like behaviorism, as previously discussed. It focuses on prediction and influence by considering the contextual variables that shape behavior, but with a new understanding of language, or, in its own words, "verbal behavior" (Moore, 2000).

Furthermore, in a holistic and context-focused manner, Functional Contextualism recognizes the interconnectedness of psychological events (Biglan & Hayes, 2015). ACT, for example, emphasizes openness and acceptance toward all psychological events, moving beyond the presence of events to their contextually established function and meaning. Additionally, Functional Contextualism underscores the importance of goals in understanding behavior, with ACT emphasizing chosen values as foundational to a meaningful life and treatment (Hayes, 2004). This holistic and integrated perspective highlights the interconnected and interdependent nature of human experience, challenging a Reductionism approach that isolates behavior from its context, which is vital for mindfulness understanding. Mindfulness meditation practitioners find that this feature of Functional Contextualism is extremely valuable in understanding the "failure" of the practice. Because mindfulness is not defined by its form of sitting there doing meditation or running for a game, instead, it is defined by its function: if it helps the practitioner become aware of the psychological content happening here and now.

Furthermore, this approach recognizes that behavior is shaped by the context in which it occurs, including the physical, psychological, and social environment in which it occurs (Biglan & Hayes, 2015). Thus, mindfulness as a behavior is shaped by past experiences and our current environment, whether it is in a therapist's room or a Buddhist temple. By understanding the relationship between behavior and context, ACT practitioners can gain a better understanding of how to help their clients achieve their goals and make meaningful changes in their lives. This makes Functional Contextualism understand mindfulness and avoid considering it as a constructive concept that needs to be refined through time, like Kabat-Zinn did.

Finally, the rejection of ontology is another defining feature of Functional Contextualism. Rather than seeking objective truths or realities, it acknowledges that our understanding of the world is inherently limited by our interactions with it (Biglan & Hayes, 2015). This is mirrored in ACT's emphasis on abandoning any preoccupation with the literal truth of thoughts or evaluations and redirecting focus toward living in accordance with one's values. Under this approach, mindfulness in different contexts could be understood from a certain perspective. By recognizing this, we can gain insight into how our thoughts and behaviors are impacting our lives and make decisions that are more in line with our values. This is also vital for daily mindfulness practice, making mindfulness mobile even if it is provided outside of the structure of Buddhism or the framework of psychological therapies.

Functional Contextualism can help us understand mindfulness by emphasizing the importance of context, function, and goals in understanding behavior, which other approaches have ignored. Additionally, empirical research has also shown the potential of this approach. Atkins & Styles (2015) observed an improvement in the flexibility of perspective-taking for participants after a mindfulness intervention, noting enhancements in self-related behaviors termed "self-as-process" and "self-as-context."

Research under this approach indicates that mindfulness intervention could be a context for promoting participants to develop a new perspective on talking about themselves (Atkins & Styles, 2016). This gives us a more flexible way of adapting or applying the effectiveness derived from mindfulness as a construct while overcoming limitations. For example, refining the definition, the difficulty of daily practice, dropouts, and monotonous measurements.

Functional Contextualism represents a philosophical approach to understanding human behavior and experience, placing emphasis on context, function, and goals. It advocates for a holistic and context-focused understanding, recognizing the interconnected nature of mindfulness and highlighting the importance of comprehending mindfulness as behavior at various levels of analysis. As Hayes (2002) explains that while empirical clinical psychology is effective at testing the usefulness of certain therapeutic technologies, it is a weak source of innovation. Under the Functional Contextualism approach, combining spiritual traditions with science will be expected to advance our understanding of not only mindfulness but also human suffering.

6. Conclusion

Mindfulness as a concept that has been present in various cultures and contexts throughout history. Current research examined through the history for mindfulness research of various domains, including its Buddhist roots, the Vipassana Movement and Zen in historical research, and its impact on psychological therapy and Neuroscience. Reductionism, the historical perspective, Buddhism, holistic and integrative approaches, and Functional Contextualism are all discussed both in their

characters and limitations. Each approach provides a unique perspective on mindfulness and can be used to inform research and practice in the field of psychology.

First, Reductionism involves breaking down complex phenomena into simpler components. In the mainstream mindfulness research domain, the Reductionism approach plays an important role in mindfulness understanding. As a relatively new trend, Neuroscience showed its promising understandings for reduce mindfulness to brain activities, providing scientific evidence even for other Buddhism Tradition, like “equanimity.” However, it is important to recognize that Reductionism has its limitations for understanding mindfulness benefits, and a more holistic approach may be necessary to fully understand the complexities of mindfulness.

Second, by examining the historical core findings in the history of mindfulness, current paper examines how mindfulness has been understood and applied in different cultures and contexts. For example, although mindfulness originated in Buddhism, the Mindfulness Movement has some American features. This approach highlights the importance of cultural context in understanding mindfulness and its applications. Furthermore, to enhance the depth of historical focus, it is necessary to delve further into the historical background, specifically emphasizing shared interests in mindfulness. Through these concerted efforts, researchers from diverse contexts can foster additional opportunities for the flourishing of interdisciplinary conversations.

Thirdly, in addressing the criticisms and debates surrounding mindfulness, this paper examines the conflicts between Reductionism and the Buddhist tradition. The Buddhist perspective underscores the significance of subjective experience in mindfulness practice, recognizing its role in mental health and well-being, and emphasizes the ethical framework derived from its tradition. Conversely, within the scientific framework, mindfulness has faced criticism for its secularization and adaptation to Western audiences, rooted in the history of the Vipassana Movement. The exploration of responses to these criticisms leads us back to Kabat-Zinn’s approach as a transformative force within the scientific domain, characterized by a holistic and integrative stance that transcends both Subjectivism and Reductionism. Kabat-Zinn’s approach seeks a comprehensive understanding of mindfulness beyond the disciplinary confines of both science and Buddhism.

Finally, Functional Contextualism emphasizes the significance of context in understanding behavior and mental processes. Operating as a robust paradigm for human comprehension, it explores how mindfulness practices can efficiently yield diverse outcomes, overcoming certain limitations associated with other approaches to understanding mindfulness. This viewpoint acknowledges that mindfulness is not a universally applicable solution, recognizing that individuals may derive benefits from specific mindfulness practices tailored to their distinct circumstances. Moreover, Functional Contextualism introduces an innovative prospect for the scientific framework, positioning mindfulness as a central focal point.

7. Limitations

The current paper has several limitations that merit consideration. Firstly, as mainly focused on providing a broad overview of various approaches to understanding mindfulness, this paper briefly mentions criticisms and debates surrounding mindfulness in the Buddhist tradition, details regarding criticisms related to mindfulness measurement is lacked. Recent research trends, such as the process-based approach in clinical psychology, have attempted to address this gap, indicating the need for further research to offer a more comprehensive analysis of these responses.

Secondly, this paper predominantly focuses on the Western perspective of mindfulness and its applications in psychology, neglecting the roots of mindfulness in Eastern philosophy and culture. A more inclusive analysis of mindfulness should encompass a broader range of perspectives and cultural contexts. For instance, Asian research in China and Japan presents alternative understandings of mindfulness (Ito, 2019; Tani, 2021). Additional research is required to explore the mindfulness history within various Asian Buddhist cultural contexts, including India, Myanmar, Thailand, Sri Lanka, etc., which have played pivotal roles in shaping mindfulness history.

Thirdly, there is limited in-depth discussion of Kabat-Zinn's approach and the Functional Contextualism approach. These two approaches, distinct from conventional scientific structures, offer potential directions for a paradigm shift in the philosophy of science. For instance, Functional Contextualism has given rise to its own scientific domain, Contextual Behavioral Science. The activities of Kabat-Zinn as a public figure should be explored in detail. Consequently, further research is needed to enhance our understanding of these two approaches and their consequential contributions.

Finally, the paper provides an overview of the primary historical research on mindfulness in science but lacks a detailed analysis of the current state of mindfulness research in various contexts. Topics such as online mindfulness interventions (Cavanagh et al., 2013), second-wave mindfulness interventions (Shonin, Van Gordon & Griffiths, 2014), mindfulness institutions worldwide, etc., remain unexplored. A more comprehensive study that examines recent mindfulness research would offer valuable insights and suggestions for future directions in diverse contexts.

References

- Anālayo, B. (2019). Adding historical depth to definitions of mindfulness. In *Current Opinion in Psychology* (Vol. 28, pp. 11–14). Elsevier B.V. <https://doi.org/10.1016/j.copsyc.2018.09.013>
- Atkins, P. W. B., & Styles, R. (2015). Mindfulness, Identity and Work: Mindfulness Training Creates a More Flexible Sense of Self. In J. Reb & P. W. B. Atkins (Eds.), *Mindfulness in Organizations*. Cambridge: Cambridge University Press, 133-162.
- Atkins, P. W. B., & Styles, R. (2016). Measuring self and rules in what people say: Exploring whether self-

- discrimination predicts long-term wellbeing. *Journal of Contextual Behavioral Science*, 5(2), 71-79.
- Baer, R. A. (2003). Mindfulness training as a clinical intervention: A conceptual and empirical review. In *Clinical Psychology: Science and Practice* (Vol. 10, Issue 2, pp. 125–143). <https://doi.org/10.1093/clipsy/bpg015>
- Baer, R. A. (2011). Measuring mindfulness. *Contemporary Buddhism*, 12(1), 241–261. <https://doi.org/10.1080/14639947.2011.564842>
- Barker, K. (2006). “Self-healing in late-modernity: The case of mindfulness.” Paper presented at the annual meeting of the American Sociological Association, New York City, Aug 11, 2007
- Barnes-Holmes, D., Barnes-Holmes, Y., & Cullinan, V. (2000). Relational frame theory and Skinner’s Verbal Behavior: A possible synthesis. *The Behavior Analyst*, 23(1), 69–84. <https://doi.org/10.1007/BF03392000>
- Biglan, A., & Hayes, S. C. (2015). Functional Contextualism and Contextual Behavioral Science. In *The Wiley Handbook of Contextual Behavioral Science* (pp. 37–61). Wiley. <https://doi.org/10.1002/978111849857.ch4>
- Bodhi, B. (2011). What does mindfulness really mean? A canonical perspective. *Contemporary Buddhism*, 12(1), 19–39. <https://doi.org/10.1080/14639947.2011.564813>
- Boyce, B. (2011). *The mindfulness revolution: Leading psychologists, scientists, artists, and meditation teachers on the power of mindfulness in daily life*. Shambhala Publications.
- Cavanagh, K., Strauss, C., Cicconi, F., Griffiths, N., Wyper, A., & Jones, F. (2013). A randomised controlled trial of a brief online mindfulness-based intervention. *Behaviour Research and Therapy*, 51(9), 573–578. <https://doi.org/10.1016/j.brat.2013.06.003>
- Creswell, J. D. (2017). Mindfulness Interventions. *Annual Review of Psychology*, 68(1), 491–516. <https://doi.org/10.1146/annurev-psych-042716-051139>
- Dauids, T. W.R. (1881). *Buddhist Suttas*. Oxford: Clarendon Press.
- Dawson, G. (2021). Zen and the mindfulness industry. *The Humanistic Psychologist*, 49(1), 133–146. <https://doi.org/10.1037/hum0000171>
- Domash, L. (1977). The Transcendental Meditation technique and quantum physics. In D. Orme-Johnson & J. Farrow (Eds.), *Scientific research on Maharishi’s Transcendental Meditation and TM-Sidhi program: Collected papers* (2nd ed., Vol. 1, pp. 652– 670). Weggis, Switzerland: Maharishi European University Press.
- Fields, R. (1992). *How the swans came to the lake: A narrative history of Buddhism in America*. Boston, Shambhala: 205, 134-135.
- Fronsdal, G. (1998). Insight Meditation in the United States: Life, Liberty, and the Pursuit of Happiness. In C. S. Prebish, & K. K. Tanaka (Eds.), *The Faces of Buddhism in America* (pp. 163-180). Berkeley, University of California Press.
- Gordon, D. J. (2009). *A Critical History of Mindfulness-Based Psychology* [Wesleyan University]. <https://doi.org/10.14418/wes01.1.366>
- Harrington, A., & Dunne, J. D. (2015a). When mindfulness is therapy. *American Psychologist*, 70(7), 621–631. <https://doi.org/10.1037/a0039460>
- Harrington, A., & Dunne, J. D. (2015b). When mindfulness is therapy: Ethical qualms, historical perspectives. *The American Psychologist*, 70(7), 621–631. <https://doi.org/10.1037/A0039460>
- Hayes, S. C. (2002). *Acceptance, Mindfulness, and Science*.
- Hayes, S. C. (2004). Acceptance and commitment therapy, relational frame theory, and the third wave of behavioral and cognitive therapies. *Behavior Therapy*, 35(4), 639–665. [151](https://doi.org/10.1016/S0005-</p>
</div>
<div data-bbox=)

7894(04)80013-3

- Hayes S. C., Follette, V. M., & Linehan, M. (2004). *Mindfulness and Acceptance: Expanding the Cognitive-Behavioral Tradition*. New York: Guilford Press.
- Ito, Y. (2019). Is it possible mindfulness training not depending on meditation. *Psychiatry*, 34(2), 121–126.
- Ivanovski, B., & Malhi, G. S. (2007). The psychological and neurophysiological concomitants of mindfulness forms of meditation *Acta Neuropsychiatrica*, 19, 76-91.
- Kabat-Zinn, J. (1982). An outpatient program in behavioral medicine for chronic pain patients based on the practice of mindfulness meditation: Theoretical considerations and preliminary results. *General Hospital Psychiatry*, 4, 33– 47. [http://dx.doi.org/10.1016/0163-8343\(82\)90026-3](http://dx.doi.org/10.1016/0163-8343(82)90026-3)
- Kabat-Zinn, J. (1990). *Full catastrophe living: Using the wisdom of your body and mind to face stress, pain, and illness*. New York, NY: Delacorte.
- Kabat-Zinn, J. (1994). *Wherever You Go, There You Are*. New York, NY: Hyperion.
- Kabat-Zinn, J. (2003). Mindfulness-Based Interventions in Context: Past, Present, and Future. *Clinical Psychology: Science and Practice*, 10(2), 144-156.
- Kabat-Zinn, J. (2005). *Coming to our senses: Healing ourselves and the world through mindfulness*. New York, Hyperion: xvi.
- Karremans, J. C., Schellekens, M. P. J., & Kappen, G. (2015). Bridging the sciences of mindfulness and romantic relationships: a theoretical model and research agenda. *Personality and Social Psychology Review*, 21(1), 29-49.
- Lack, C. W., & Rousseau, J. (2022). Mental Health, Pop Psychology, and the Misunderstanding of Clinical Psychology. In *Comprehensive Clinical Psychology* (pp. 47–62). Elsevier. <https://doi.org/10.1016/B978-0-12-818697-8.00052-2>
- Linehan, M. M., Armstrong, H. E., Suarez, A., Allmon, D., & Heard, H. L. (1991). Cognitive-behavioral treatment of chronically suicidal borderline patients. *Archives of General Psychiatry*, 48, 1060-1064.
- Mandler, G. (2007). A history of modern experimental psychology. Cambridge, The MIT Press. Chapter 1 The Modern Mind: Its History and Current Use .pp.5-15
- Molino, A. (2001). *The couch and the tree: Dialogues in psychoanalysis and Buddhism*. London, UK: Open Gate Press.
- Monteiro, L. M., Musten, R. F., & Compson, J. (2015). Traditional and Contemporary Mindfulness: Finding the Middle Path in the Tangle of Concerns. *Mindfulness*, 6(1), 1–13. <https://doi.org/10.1007/s12671-014-0301-7>
- Moore, J. (2000). Words are not things. *The Analysis of Verbal Behavior*, 17, 143-160.
- Neale, M. (2011). *McMindfulness and Frozen Yoga: Rediscovering the Essential Teachings of Ethics and Wisdom*. Accessed, October 29, 2014.1-14.
- Purser, R., & Loy, D. (2013). Beyond McMindfulness. *The Blog - Huffington Post*, July 1.
- Rapgay, L., & Bystrisky, A. (2009). Classical Mindfulness. *Annals of the New York Academy of Sciences*, 1172(1), 148–162. <https://doi.org/10.1111/j.1749-6632.2009.04405.x>
- Reich, C. (1995). *The Greening of America*. New York, Three Rivers Press: 2.
- Richards, G. (1996). *Putting psychology in its place*. London, Routledge: 181-182
- Seager, R. H. 2012. *Buddhism in America*. 2nd ed. New York, NY: Columbia University Press.
- Searle, J. (1998). *Mind, language and society: Philosophy in the real world*. Basic Books: 57.

- Segal, Z. V., Williams, J. M. G., & Teasdale, J. D. (2002). *Mindfulness-based cognitive therapy for depression: A new approach to preventing relapse*. New York: Guilford Press.
- Sharf, R. H. (1993). The Zen of Japanese Nationalism. *History of Religions*, 33 (1), 1–43.
- Shonin, E., Van Gordon, W., & Griffiths, M. D. (2014). The emerging role of Buddhism in clinical psychology: Toward effective integration. *Psychology of Religion and Spirituality*, 6, 123–137. <http://dx.doi.org/10.1037/a0035859>
- Siew, S., & Yu, J. (2023). Mindfulness-based randomized controlled trials led to brain structural changes: an anatomical likelihood meta-analysis. *Scientific Reports*, 13(1). <https://doi.org/10.1038/s41598-023-45765-1>
- Stanley, E. A., Schaldach, J. M., Kiyonaga, A., & Jha, A. P. (2011). Mindfulness-based Mind Fitness Training: A Case Study of a High-Stress Predeployment Military Cohort. *Cognitive and Behavioral Practice*, 18(4), 566–576. <https://doi.org/10.1016/j.cbpra.2010.08.002>
- Sun, J. (2014). Mindfulness in context: A historical discourse analysis. *Contemporary Buddhism*, 15(2), 394–415. <https://doi.org/10.1080/14639947.2014.978088>
- Tani, S. (2020). *Psychology of language and behavior: Learning behavior analysis*. Kongoshuppan.
- Thera, N. (1994). *The four sublime states: Contemplations on love, compassion, sympathetic joy and equanimity*. Kandy: Buddhist Publication Society. <https://www.accesstoinsight.org/lib/authors/nyanaponika/wheel006.html>
- Weber, J. (2017). Mindfulness is not enough: Why equanimity holds the key to compassion. *Mindfulness & Compassion*, 2, 149–158. <https://doi.org/10.1016/j.mincom.2017.09.004>
- Weber, J. (2021). A Systematic Literature Review of Equanimity in Mindfulness Based Interventions. *Pastoral Psychology*, 70, 151–165. <https://doi.org/10.1007/s11089-021-00945-6>
- Wilson, J. (2014). *Mindful America: The Mutual Transformation of Buddhist Meditation and American Culture*.
- Wilson, J. (2016). *Selling Mindfulness: Commodity Lineages and the Marketing of Mindful Products* (pp. 109–119). https://doi.org/10.1007/978-3-319-44019-4_8

李 晟 (gr0421rx@ed.ritsumei.ac.jp)

第2部：北洋大学のこの一年

新聞記事に見る「北洋大学」のこの一年

苦小牧民報

日付	見出し
1月6日	「スピード男子500杉山25位 フィギュア男子坪井26位」
1月14日	「1部昇格を祝う 北洋大女子バスケ部『インカレ出場目標に』」
1月14日	「北洋大学教授 山田利一さん 海外への憧れ 入り口は映画」
1月14日	「大学入学共通テスト 大一番『自信持って』北洋大会場は447人出願」
1月16日	「まちを見詰めて 北洋大学2年生 高橋こはくさん 居心地良いが願望も」
1月17日	「最初の関門 440人挑む 共通テスト 東胆振・日高でも始まる」
1月21日	「北洋大 願書受け付け中 23年度入試 30日まで」
1月24日	「北洋大 図書館前を子どもに開放 中央図書館から児童書200冊」
1月28日	「北洋大冬休みで3月末まで休業 カフェテリア『ウエステラ』」
2月8日	「体感的にSDGs学ぶ ゲームや講話で理解深める」
2月17日	「生きた英語 映画で学ぼう23日 比較文化学会道支部大会 3部制講演 オンライン配信も」
2月21日	「サーカスの技にびっくり ひよし保育園で芸術鑑賞会」
2月28日	「映画素材に英語学ぶ 日本比較文化学会道支部が特別講演」
3月4日	「香山リカさん、北洋大の客員教授に就任へ」
3月15日	「卒業生 キャンパスに別れ 北洋大で学位記授与式」
3月22日	「学位記を受け取るのはかま姿の留学生=15日、北洋大学」
3月25日	「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ いつもある感動」
3月28日	「新事務長に富田氏 市や地元団体と連携強化へ」
4月3日	「19人が新生活スタート 北洋大で入学式 留学生も」
4月3日	「市民の利用も歓迎 カフェテリア営業開始」
4月12日	「緊張した面持ちで式に臨む北洋大学の新入学生たち=2日、北洋大学」
4月12日	「中国人留学生と話そう あす北洋大で交流イベント」
4月15日	「『カレーラーメンが好き』中国人留学生と市民が交流」
4月19日	「新戦力の活躍に期待 大滝監督『レギュラー取る強い気持ちを』」
4月21日	「大学野球 初戦に向け意気込み 北洋大 優勝争いへ『まずは1勝を』」
4月22日	「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ 鮮やかな思い出」
4月22日	「北洋大 前期授業の聴講生募集中 26日まで 語学や一般教養など42科目」
4月24日	「大学野球 北洋大は1勝1敗 道学生1部春季リーグ」

- 4月28日 「大学野球 第2節へ 両先発が闘志 道学生野球1部春季リーグ」
- 5月1日 「わたしの時間 事務職経験発揮したい 苫小牧市錦西町 刈屋悌二さん」
- 5月2日 「北洋大、完封負け 道学生野球1部春季リーグ」
- 5月3日 「北洋大、敵地 函館で連敗 道学生野球1部春季リーグ」
- 5月8日 「北洋大は室工大に連勝 学生野球1部春季リーグ」
- 5月15日 「北洋大は東農大オホーツクに連敗 道学生野球1部春季リーグ」
- 5月17日 「道内初 北洋大で国際学術大会 19、20日に日本比較文化学会」
- 5月19日 「『にし活』北洋大と連携 勉強会で交流 まち活性化へ」
- 5月22日 「国内外の研究者ら100人参加 北洋大で比較文化学会の全国大会」
- 5月22日 「大学野球 北洋大、3勝6敗に」
- 5月23日 「道学生野球1部春季リーグ 北洋大5位に終わる」
- 5月24日 「大学野球 東農大、接戦制しV」
- 5月24日 「北洋大の奥村学長が講演 あす 台湾玄奘大で研究会」
- 5月27日 「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ なんともないよ」
- 5月27日 「来月から授業本格化 北洋大の『外国人留学生別科』」
- 5月29日 「多文化共生指針を策定へ 在留外国人増の中、ビジョンまとめる」
- 5月30日 「売り手市場、選考早期化 すでに内々定も 大学生や高専生」
- 6月1日 「ストリートスポーツ楽しもう 3日 北洋大でイベント ダンスやバスケなど4種目」
- 6月3日 「中泉さんが挑戦歴語る 『にし活』北洋大で講演会」
- 6月5日 「雨の中、白熱のバトル 北洋大でイベント ストリートスポーツ楽しむ」
- 6月6日 「留学生別科が本格始動 北洋大 進学目指し日本語学習」
- 6月21日 「北洋大に猫の引っかけ絵 ニャンクシィこと白山さん」
- 6月22日 「日本語教師 資格も取得可能 入学希望者向けパンフ作成」
- 6月24日 「インカレ出場へ勝負の年 今季、1部リーグ初参戦 北洋大女子バスケットボール部」
- 6月24日 「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ あと3年」
- 6月29日 「ごみ拾いでSDGs推進 コープさっぽろが海岸清掃」
- 7月6日 「来月の犬猫チャリティーイベントPR ハーティさんらが市長表敬」
- 7月14日 「16日に防災イベント 北洋大 体験コーナー充実」
- 7月21日 「設備見学や体験で意識高める 北洋大学で防災イベント」
- 7月22日 「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ コーレン!と励まして」
- 7月28日 「浴衣姿で住民と交流 すずらん町内会夏祭りに留学生参加」
- 7月31日 「苫小牧で1000人交流 障害児や家族ら いけませ夏フェス」
- 8月12日 「メディア社会と心テーマに 香山さん講義、市民参加歓迎」
- 8月12日 「地域創生を学ぶ 北洋大 市職員ら講師に授業」

- 8月16日 「犬猫の保護活動PR 19日北洋大でチャリティーイベント」
- 8月23日 「ペット連れらでにぎやかに 犬猫保護PRイベント」
- 8月25日 「大学野球 北洋大 巻き返しへ あす、秋季リーグ開幕」
- 8月26日 「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ 答えを探す」
- 8月28日 「道学生野球I部秋季リーグ開幕 北洋大 連敗スタート」
- 8月30日 「市民公開講座 メタ認知能力高めよう 香山リカさん メディア社会
テーマに講義」
- 9月4日 「北洋大、東農大に1勝1敗 道学生野球I部秋季リーグ」
- 9月7日 「歌や踊りを披露 市錦岡長生大学で大学祭」
- 9月11日 「函館大に痛い連敗 道学生野球 北洋大、打線振るわず」
- 9月19日 「北洋大は1勝1敗 道学生I部秋季リーグ」
- 9月20日 「和やかにスイカ割り ハスカップ青春の集い 大会に25人」
- 9月21日 「北洋大図書館に漫画コーナー 道内ゆかりの作品も 市民も閲覧可能」
- 9月22日 「外国人への伝え方学ぼう 北洋大 来月から市民公開講座」
- 9月22日 「名称変更後 初の大学祭 北洋大 30日と来月1日」
- 9月22日 「秋季リーグあす最終節 北洋大、現在3位」
- 9月23日 「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ 大切なもの」
- 9月25日 「教育委員会委員の辞令交付 北洋大の佐藤氏を再任」
- 9月26日 「北洋大4位に終わる 東農大オホーツクV 道学生野球1部秋季リーグ」
- 9月26日 「絵本作家あべ弘士さんの作品紹介 北洋大図書館 来月2日まで」
- 9月30日 「グルメ、イベント盛りだくさん あすまで 北洋大の大学祭」
- 10月6日 「高・大生が活性化へ提言 苫JCと市 まちづくりトークで意見交換」
- 10月9日 「働く喜び体験 小学3、4年生が仮想のまちで」
- 10月10日 「14日 中国の小正月『元宵節』を知って 北洋大 漢字ゲームや伝統
スイーツ」
- 10月18日 「社会に関心高める とまこまいキッズタウン」
- 10月26日 「外国人留学生 期待胸に 北洋大と別科が合同入学式」
- 10月28日 「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ 底力の見せどころ」
- 11月1日 「記者コラム 風 トマリ」
- 11月9日 「映画『夢みる小学校』上映会 北洋大で11日 教育の在り方考える」
- 11月11日 「中国語 スピーチ部門3位 全日本コンテスト北海道大会『来年こそ
1位を』北洋大3年織笠さん」
- 11月21日 「『地域医療の主役は住民』精神科医 香山リカさん講演」
- 11月22日 「伊藤大海、来季への抱負語る 北海道応援大使プロジェクト選手交流会」
- 11月23日 「『防災』楽しく学んで 26日、復興応援フェスタ」
- 11月24日 「司馬遼太郎の本展示 生誕100年で北洋大学図書館」

- 11月25日 「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ 不便さいっぱい」
 11月27日 「eスポーツ白熱の対戦 新千歳で大会 来場者倍増」
 11月27日 「楽しく防災を学ぶ 香山リカさんから講演 むかわ町復興応援フェスタ」
 11月30日 「最初で最後、インカレに闘志 創部4年目の北洋大女子バスケット部快挙」
 12月2日 「北洋大に『ニャンクシィ』9、10日 色彩画など作品展」
 12月6日 「留学生へ仕事内容紹介 北洋大で合同企業説明会」
 12月11日 「個性豊か 作品と音楽鑑賞 クリエーター白山さんら 北洋大で『ニャンクシィ展』」
 12月13日 「見よう見まねで挑戦 北洋大留学生らそば打ち体験」
 12月22日 「『現戦力の底上げを』北洋大・大滝監督インタビュー」
 12月23日 「土曜の窓 恐竜のまちから 香山リカ 集団接種は社交の場」

北海道新聞

日付	見出し
3月4日	「香山リカさん 北洋大客員教授に」
3月5日	「香山リカ ふわっとライフ 使い捨てカイロの温もり」
3月15日	「北洋大客員教授 香山さん就任へ 8月に集中講義」
3月16日	「『社会の壁 乗り越えていく』北洋大でも式、今後の活躍誓う」
3月16日	「北洋大事務長 富田氏起用へ 元市総合政策部長」
3月19日	「香山リカ ふわっとライフ 救いのひとこと 実践したい」
4月2日	「香山リカ ふわっとライフ 忙中閑あり」
4月3日	「留学生ら19人 新たな一歩 北洋大入学式『仲間と切磋琢磨』」
4月5日	「道内大学 再編の動き加速」
4月23日	「連載300回 香山リカさん 日常からテーマ 執筆が癒やし」
4月23日	「香山リカ ふわっとライフ 苦勞してでも 自然でいたい」
4月26日	「北洋大で eスポーツ活動に熱 宮下龍士さん」
5月2日	「道六大学野球 函大、北洋大下す」
5月3日	「道六大学野球 函大が3勝目」
5月7日	「道六大学野球 函大コールド勝ち」
5月7日	「香山リカ ふわっとライフ ホットする場所」
5月9日	「障害児と交流 魅力知って 『いけませ夏フェス』市内で20日PRシンポ」
5月15日	「道六大学野球 東農大網走8連勝」
5月16日	「道六大学野球 北洋大」
5月19日	「北洋大で比較文化学会大会 あす研究発表 道内初 香山リカさん講演も」

- 5月21日 「香山リカ ふわっとライフ 誰もが何かの先生」
- 5月21日 「道六大学野球 首位東農大網走 函大と引き分け」
- 5月23日 「道六大学野球 函大と東農大網走 きょう優勝決定戦」
- 5月29日 「ここが聞きたい 経営移譲5年 今後の展望は 北洋大を運営する学校法人京都育英館理事長 松尾英孝さん」
- 6月3日 「道六大学野球秋季リーグへ闘志 福田翔大さん」
- 6月4日 「香山リカ ふわっとライフ 『卒業』の使い方」
- 6月18日 「香山リカ ふわっとライフ 『プチ身だしなみ』はいかが」
- 7月2日 「香山リカ ふわっとライフ 野菜づくり IT操作よりすごい」
- 7月15日 「苫小牧の犬猫譲渡イベント盛り上げる 日ハムソング歌手のHARTYさん出演」
- 7月16日 「香山リカ ふわっとライフ 短い電話 通じ合えた心」
- 7月19日 「日ハム応援歌 苫小牧で披露へ HARTYさん」
- 7月30日 「香山リカ ふわっとライフ 『えらい人』って」
- 7月31日 「障害児と家族ら 道内外の千人交流 苫小牧 いけませ夏フェス」
- 8月7日 「香山さん『メディア社会と心』語る」
- 8月13日 「香山リカ ふわっとライフ おしゃべりのいい距離感」
- 8月27日 「道六大学野球 函大など開幕白星」
- 8月27日 「香山リカ ふわっとライフ 人生経験が生む『動じぬ心』」
- 8月28日 「道六大学野球 函大など2勝目」
- 9月3日 「道六大学野球 旭教大7点大勝」
- 9月4日 「道六大学野球 旭市大開幕4連勝」
- 9月10日 「道六大学野球 函大、北洋大下す」
- 9月11日 「道六大学野球 東農大網走5勝目」
- 9月12日 「道六大学野球 秋季リーグ」
- 9月17日 「道六大学野球 函大コールド勝ち」
- 9月17日 「香山リカ ふわっとライフ もの忘れの妙」
- 9月18日 「道六大学野球 東農大網走同率首位」
- 9月24日 「道六大学野球 東農大網走など勝利」
- 9月24日 「香山リカ ふわっとライフ がんばりすぎず 自分のペースで」
- 9月25日 「道六大学野球 東農大網走と旭市大が首位」
- 9月26日 「道六大学野球 東農大網走 6季連続V」
- 9月29日 「北洋大学祭『初陣』あすから 音楽ショー、eスポーツも」
- 10月1日 「北洋大 改称後初の学祭開幕 きょうまで 留学生や地域も協力」
- 10月4日 「苫小牧のまちづくりへ発信 高大生 市長に活性化策提言」
- 10月8日 「香山リカ ふわっとライフ 光陰矢の如し、だけど」

10月9日	「子ども、若者 夢へ 目指すは消防士 苫小牧で職業体験」
10月15日	「弁当盛り付け楽しい 北洋大で食育イベント」
10月26日	「留学生 夢へ待望の一步 北洋大・国際文化学部など入学式」
11月5日	「香山リカ ふわっとライフ 自然体っていいな」
11月19日	「香山リカ ふわっとライフ つらい時のやさしさ」
11月23日	「日ハム3投手 北洋大でトーク 苫小牧 市民ら500人集う」
12月3日	「香山リカ ふわっとライフ カゼだってリハビリ必要」
12月6日	「自社の魅力 留学生らにPR 北洋大で札商など企業説明会」
12月8日	「猫の日常 ひっかき絵で描く あすから北洋大 白山さん個展」
12月17日	「香山リカ ふわっとライフ 今日の自分は元気？」

北海道建設新聞

日付	見出し
11月11日	「北海道の道標 研究者に聞く 北洋大学教授 奥村訓代氏」

読売新聞

日付	見出し
5月24日	「猫の絵 北洋大で常設展示 校内カフェや通路に50枚 苫小牧の白山さん作」
7月14日	「防災テーマ 体験や展示 北洋大16日」

Asahi Weekly

日付	見出し
4月2日	「メディアでひもとく英語の世界1 動いたり消えたりする謎をひもとき学習をすっきりと 福嶋剛司」
8月20日	「メディアでひもとく英語の世界10 数量詞遊離構文：離れて置くことで『それぞれ』を際立たせて表現しよう 福嶋剛司」
9月3日	「メディアでひもとく英語の世界11 数量詞遊離構文2：数量詞が移動できる場所をおさえよう！ 福嶋剛司」

北洋大学紀要 投稿規程 (2022 年 7 月)

1. 投稿論文は、複数の査読者による査読結果を基に研究・図書・情報委員会が任命する編集委員会の審査を経て受理する。
2. 当紀要誌は、北洋大学における多文化間の理解や学際的研究の方法の発展を目指す研究成果の投稿を受け付ける。
3. 投稿資格は、本学専任及び非常勤講師に限る。ただし、編集委員会が認めた場合は、この限りではない。
4. 同一論文を異なった投稿先に同時に投稿してはならない。
5. 同一号への掲載は、単著 1 編と筆頭著者ではない共著 1 編、あるいは、共著 2 編（そのうちの 1 編は筆頭著者ではないもの）までとする。
6. 論文執筆に際しては、以下の指示に従うものとする。
 - i. 使用言語は、原則として、日本語もしくは英語とする。また、母語以外の言語で執筆した場合、ネイティブ・スピーカーのチェックを受ける等、著者の責任においてミスのないように努めること。
 - ii. 論文は、未発表のものに限ること。ただし、口頭発表したもので、その旨を記してある場合は、この限りではない。また、博士論文や修士論文、ならびに、その一部を論文として投稿することは認めない。なお、論文の内容・文体などについては、多様な専門分野の研究者のリーダービリティに十分に応えるものとする。
7. 論文の体裁については、執筆要領を参照すること。
8. 著者校正は、原則として、初校のみとし、印刷上のミスに限るものとする。
9. 著者は、本刷 3 部を受け取ることができる。ただし、抜き刷りについては、希望により別途著者負担で作成するものとする。
10. 完成した原稿は電子メール添付にて、件名を「氏名_紀要第〇号投稿」とし、北洋大学図書館 (tocho@hokuyo.ac.jp) 宛に送付すること。投稿の締め切りは、11 月末日の日本時間 23:59 とする。添付する原稿のファイル名は「氏名_タイトル_年月日 8 桁」とすること。
11. 諸事情により予定号に掲載できない場合は、編集責任者の判断で次号に回す場合がある。

北洋大学紀要 執筆要領 (2023 年 7 月)¹

1. 投稿時の注意点

- i. 投稿時には論文および実践報告・研究ノート・レビュー論文のどちらで投稿するかをメール本文で示し投稿してください。(投稿内容を受け、希望する分類では受理できないと編集委員会が判断した場合には、もう一方の分類での受理を可能とする旨を伝える可能性があります。)
- ii. 原稿のファイルは、原則として、Word 形式および PDF 形式の両方でご提出ください。
- iii. 原稿の Word ファイルは必ず互換モードで保存の上、Word/PDF ファイルにはパスワード保護などはせずお送りください。
- iv. タイトル・著者名・要旨などは 1 頁目に記入し、本文は 2 頁目からとします。

2. 使用ソフト、枚数・用紙設定に関して

- i. 執筆には、原則として、MS Word (98 以降) をご使用ください。
- ii. 論文は原則として、A4 横書き、注・参考文献・図表を含めて 15~20 頁を目処とします。実践報告・研究ノート・レビュー論文については同様の要件で 10~15 頁を目処とします。
- iii. 原稿のページ設定については、ワードの初期設定 (「ページレイアウト」→「ページ設定」) 文字数と行数の設定 [40 字 × 34 行]、余白 [上 35 ミリ、下・左・右 30 ミリ] でお書きください。
*既存の Word 文書フォーマットを使用する場合は、[40 字 × 34 行] の設定が適用されていないため、文字数超過例が多いです。設定に不便を感じる方は投稿テンプレートを利用してください。
- iv. 編集の都合上、ページ数は挿入しないでください。

3. タイトルと著者名

- i. ページの最初にタイトルをお書きください。その下に著者名と所属機関を一行ずつお書きください。
- ii. タイトルと著者名のフォントは、和文 MS ゴシック・英文 Times New Roman にて作成してください。
- iii. タイトルおよび副題は、14 ポイント、中央揃えにしてください。ボールド体 (太字) は使わないでください。
- iv. 著者名は、姓 (氏) と名の間にスペースを一文字 (全角) 空け、12 ポイント、中央揃えにしてください。ボールド体 (太字) は使わないでください。
- v. 和文の場合、日本語でタイトル・著者名・所属機関名を記した後に、1 行をあげ、同

じ順序で英語表記を付してください。ポイントに関しては和文に準じてください。

- vi. タイトルと著者名(所属機関)の間は行をあげず、著者名と要旨の間は1行あけてください。
- vii. 所属先は基本的に1つのみとします。またフォントは和文MS明朝・英文Times New Romanにて11ポイント、中央揃えにしてください。ボールド体(太字)は使わないでください。

4. 要旨

- i. 和文の場合、要旨は日本語以外(英語・中国語など)で作成してください。
- ii. 英文の場合、要旨は英語以外(日本語・中国語など)で作成してください。
- iii. 要旨の分量は、日本語・中国語の場合400字以内、英語など欧文では200語以内で作成してください。

5. 章・節のタイトルのフォント

- i. 章立ては、1. 2. …(半角)としてください。その下にセクション(節)を立てる場合は、1.1. 1.2. 1.2.1. 1.2.2. と半角数字を半角ピリオドで区切ってください。
- ii. 章のタイトルはMSゴシック・12ポイント、英数字の場合はTimes New Roman・半角・12ポイントでお書きください。ボールド体(太字)は使わないでください。
- iii. 節のタイトルはMSゴシック・10.5ポイント、英数字はTimes New Romanにしてください。ボールド体(太字)は使わないでください。
- iv. 各章のはじまりは1行あけ、その下のセクションは行をあげないでお書きください。

6. 本文のフォント

【和文】

- i. 本文は原則MS明朝・10.5ポイント、英数字の場合はTimes New Roman・半角・10.5ポイント、両端揃えでお書きください。
- ii. 句読点は、「。」(句点)と「,」(読点)を使用してください。句点(。)読点(、)ともに全角を使用してください。
- iii. 本文中の括弧は全角を使用してください。

【英文】

- iv. 本文はTimes New Roman・半角・10.5ポイント、両端揃えでお書きください。
- v. 句読点は、「,」(ピリオド)と「,」(コンマ)を使用してください。「.」(ピリオド)「,」(コンマ)ともに半角を使用してください。

7. 図と表

- i. 図・表の上下に1行あけてください。

- ii. 表のキャプションは表の上に、図のキャプションは図の下に記載してください。
図・表のキャプションの文字は MS 明朝 10.5pt・半角英数字 Times New Roman・中央揃えでお書きください。
- iii. 表中の文字は MS 明朝 10pt・英数字 Times New Roman でお書きください。

8. 注や参考文献など

- i. 注や参考文献のタイトルは MS ゴシック・10.5 ポイントでお書きください。
- ii. タイトル以外の部分は 9 ポイントでお書きください。ポイントを除いた書式については執筆者の専門分野に一任します。

9. 末尾連絡先

注や参考文献を含めた論文の最終行の後に 1 行あけて、著者名とメールアドレスを右揃えでお書きください。著者名は、姓(氏)と名の間にスペースを一文字(全角)空け、MS ゴシック・10.5 ポイントでお書きください。その右隣の()内に、連絡用メールアドレスを英数字(Times New Roman・半角・10.5 ポイント)でお書きください。括弧は全角にしてください。

注

- 1 指定するフォントやサイズは版組の際に一部入れ替えることがあります。変更箇所を明確にするためにも執筆要領を遵守し提出ください。

編集後記

『北洋大学紀要』第3号は、言語や文化、教育、経済、スポーツ分野など幅広い研究分野より計10本の論文・実践報告などが集まりました。大きな学会誌では学会の方針や雑誌編集方針の都合上、議論を深めることが難しいトピック、本学での授業実践報告などが集まり紀要だからこそ筆を尽くして議論できた号になったのではと感じます。この紀要発行により、地方大学として地域へのさらなる貢献に繋がることを祈っております。

末筆ではございますが、スケジュールや執筆要領等で、執筆者・査読者の皆さま、そして北斗プリント社、特に小木志織さまには大変お手数をおかけいたしました。皆さまご理解ご協力いただいたこと、改めて多謝申し上げます。

(T・F)

北洋大学紀要 第3号

令和6(2024)年3月31日印刷発行

編集発行

北洋大学

〒059-1266 苫小牧市錦西町3丁目2番1号
電話 0144-61-3111

印刷

株式会社北斗プリント社

BULLETIN OF HOKUYO UNIVERSITY

Vol. 3

(Part 1) Articles

Perception of the Mongolian Aspiration Contrast by Speakers of Other Languages — A Perceptual Experiment with Native Japanese, Chinese, and Korean Speakers —	◀ UETA Naoki ▶	5
Developing Local Japanese Language Volunteers and Various Conditions — Regarding the Image of Volunteers Sought at Hokuyo University —	◀ OKUMURA Kuniyo ▶	21
A Study of the Embodied Cultural Capital — From the Perspective of Promoting the Eyeglass Industry —	◀ TAKINAMI Yoshinobu ▶	31
Non-Native Speaker's Evaluations of Chinese Dialects: — Auditory Survey of Native Japanese Speakers Studying Chinese —	◀ CHEN Xi ▶	47
On Syntactic Reduplication in Japanese and Noun Reduplication in Hokkien	◀ FENG Yifeng ▶	63
A Study on The Misuse of Honorifics in Modern Japanese Society — Through Examples from Practical Books on Honorific Language from the 1990s —	◀ FUKUMOTO Tatsuya ▶	77
A Study on Anemia in Middle-aged and Elderly Runners	◀ YAMANAKA Shin · KOBAYASHI Aiko · SUGIYAMA Kiichi ▶	93
Reports, Remarks, and Reviews		
Report on a class for intermediate and upper-intermediate learners of Japanese — Focusing on a composition task of explanation of contents —	◀ FUJITA Koki ▶	109
What Is Fengshui? Reappraisal of Ancient Chinese Philosophy	◀ YAMADA Toshikazu · OKASAKO Akira ▶	125
Approaches to Mindfulness in Science — A Historical Perspective Review for Mindfulness Understanding —	◀ LI Sheng ▶	137
(Part 2) What's New at Hokuyo University		155